



雑記

ごまめの歯ぎし

い

pinokopapa

資本主義は 欲望 の体系 と私は思っています。

資本主義は商品経済を社会規範とする と恐慌論にもあります。そして 利子率と利潤率の対立が 恐慌を引き起こすといえます。しかし、恐慌論 の序論に 資本家的産業資本の生産力の増進 を言います。この方が飲み込み易い感じがします。商品を大量に生産し、消費者に安価に渡せます。 生活の向上 と恐慌論にもあります。大量生産 - 大量消費が行われます。そしてその消費を上回る商品の生産が行われ、それが停滞し、それを消費、消滅させようとする と価格が暴落、つまりは利潤率の暴落となり、恐慌を引き起こすこととなります。または、もう一方の選択肢、絶対的な商品の大量消滅の方法としての 戦争 を選ぶことになるかもしれません。アメリカのイラク戦争は、米軍の大量に貯蔵した武器の廃棄のために行ったというような、一部歪んだ見方があったぐらいですから。

ここまで 恐慌論 の、余りに示唆に富んだ言葉に駆り立てられて独善的に記してしまいました。

長崎の五島列島は昭和も相当遅くまで、自給自足の生活を営んでいおりました。ですから、殆どお金も要らずにそれなりの豊かさで、島民全体が協力しあって暮らせていたそうなんです。そんな中、三種の神器 が島にも入ってきます。テレビ、冷蔵庫、洗濯機、そんな 便利な家電 が彼らの島にも普及してきました。薪、炭がガスになり、テレビを楽しみ、主婦にとって一番の苦勞が、洗濯機に助けられることになりました。そして、多くの若い人がそれを購うために九州や他の地に出て行きました。 生活の向上 です。そして、貨幣の侵入 です。資本主義は、まず貨幣が侵入してきます。私達のごく当たり前にお金で物事を判断しますが、江戸時代末期まで、地方の農村ではお金など無くとも、殆どが物々交換で済ませてしまえました。税金は 年貢 で 米 でしたから。だからこそ、明治になり、税金をお金で収めなくてはならなくなって 血税一揆 が起こってきたのです。またそれは、西洋人が生き血を欲しがっていて、それを政府が代わって取り立てるのだと誤解したからでもありました。そして、それほどに一般農民はお金というものに馴染みがありませんでした。

五島列島では、貨幣の侵入を見た途端、村が崩壊して行きました。残された島民は年寄りばかりになり、遂にはその人たちも都会の子供達のところへ移って行き、村は崩壊し、島は無人島になってしまいました。そんな島にかつての島民が集まってくるようなようです。誰も来なくなった島の協会の行事に、船に乗ってやってきます。

資本主義は、大量の商品を生産、供給し、それを消費させるために、貨幣を尖兵と

して、社会の隅々まで侵入させます。そして最後には、全てのものをお金の額に換算して、その価値を決めることに疑問を持たなくしてしまいます。貨幣も 他の商品に交換できる商品の一つ にすぎないものなのですのに。

資本主義は 欲望の体系 だと思っています。

秦の始皇帝は広大な領土を治めるのに、多分歴史上初めての壮大な実験を行いました。つまり各地に 王 ではなく、 長官 を派遣しました。官僚制の始まりでした。国土は郡県制となり、人民は等しく秦の国民とみなされ、長官は給料で雇われた統治官であって、王のように世襲制ではなく、任期を持って交代させられる身でした。その国家統治の基本は法家思想で、刑名主義を持って国家運営にあたりました。ですから、秦の始皇帝が亡くなり、その重石が取れると今の官僚もそうですが、倫理観など無く、国家への忠誠心は吹き飛んで、一気に三国志の世界になってしまいました。

先日、NHKで、広島、長崎に原爆が落とされた時のことを放送しておりました。当時の軍参謀本部は、いかに無能でも原爆の情報は入手していたそうです。ですから、広島にとつともない威力の爆弾が落とされそうだという事は、米軍の偵察機の不振な行動で察知しておりました。しかし軍部は国民に、避難命令の一つも出しませんでした。長崎も同様で、偵察機が飛び、当初目標としていた福岡の天候が悪いので、さらに偵察を続け、長崎に目標を変更しての投下となったとのことでした。そして、この情報も参謀本部はきちんと把握していたのに、なんの措置もとりませんでした。当時の飛行兵が、紫電改なら、B29は落とせない飛行機ではなかったから、体当たりをしてでも阻止しようとしていたにも関わらず、出撃命令がでなかったと、そして、今でも悔やまれると、老いた目に涙を溜めて証言しておりました。

その、原爆を積んだB29が長崎に向かっていた最中に、参謀本部がなにをやっていたかという、米国は広島に続いて二個めの原爆を落とせる能力はないと高をくくった論議をし、それよりもソ連の参戦に ポツダム宣言 を受諾するかどうか、そして、国体を護持しなければならないとかの御前会議をおこなっておりました。広島で地下の防空壕に居た人は助かりました。ですから、長崎でも避難命令さえ出していれば、もっと多くの人助かったのにと、語っていました。

国体護持とはなんでしょう。国体護持に名を借りた官僚たちの、国民などそっちのけの保身の言ではないかと、憤っております。秦の時代から、官僚に倫理観を求めても権力の座にあったものには無駄なことです。終戦のとき、誰も責任を取らなかったのですから。阿南陸相は、天皇陛下に申し訳ないと割腹しました。国民にとは言いませんでした。

詰まらない繰言を述べ立てました。私が あのと時闘った も

のの正体を知りたくて、色々考えてみたことです。紫電改の乗組員が未だ悔し涙をみせるように、新左翼の全共闘崩れは未だ心迷っております。

国家が暴力装置であることが、共産主義国で示されていることに、皮肉さを感じております。天安門事件、ロシアの周辺国への圧迫と戦車の乱入、そして国家に不都合な者は外国に居ても暗殺しても良いとする法律、これらは国家主権を守るため、国民ではありません。

しかし、中国の奥地に共産党員が出かけてゆくと、土地の人が

今度の皇帝様は誰だね

と訊いたというジョークがあります。为什么呢、これは。

ニュースを見ていると、経済成長率を2.5%に修正しましたとか、兎に角経済は成長し続けることが前提になっています。これっておかしいんじゃないかと、疑問に思っています。そんなにいつまでも成長し続けられるものなんですか。物を生産するには資源が要ります。環境が破壊されます。成長し続けるって神話は、無限連鎖を前提とする ねずみ講 の、まやかしかもしれません。

ウォール街を占拠せよ という呼びかけに今もデモはつづいているようです。集まった人たちは殆どが非暴力で、略奪とか警官との衝突とかを聞きません。ニュースのインタビューに答えて、資本主義が限界を迎えようとしている と普通の女性が答えていました。ウォール街に集まった人たちは、オールドティーパーティとは違うそうです。 ノンセクト ラジカルズ かもしれません。

またまた 恐慌論 ですが、資本主義は19世紀末に、爛熟期、終末期に入ったと書いてあります。あれから1世紀とちょっと、今は金融資本主義だそうです。そういえば国債を発行して、またエコポイントをつけて、太陽光発電に補助金を出して、そこまでして、需要を上回る資本主義の生産能力を消化しなければならないのでしょうか。これも税金です。

公共事業が景気を上向かせるというのも、ケインズ経済学が産んだ神話です。公共工事という税金の再分配は、富の再分配としてはそれなりに機能しました。国民総中流の意識を持つことが出来ました。それを果たさせたのが 田中角栄氏 であったことは周知のことだと思います。しかし、そのことから日本は土建屋国家といわれるようになりました。

元々、日本人は国民性として 生真面目 で 約束 したことは必ず守り、 敬虔に、 慎み深く 、贅沢には生きず そして、国民全般に教育も行き届いています。そのような国民性が、資本主義を繁栄させるものと、マックス・ウエーバー氏は有

名な プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 で述べています。資本主義はその当初の 原始資本主義の、利を貪る荒々しさが強調されますが、その生産力の旺盛さが人々の生活を豊かにしたことは間違いありません。布一枚手に入れることさえ大

変で、平安時代は着物一枚と牛車一台が同じ価値であったそうです。そして、その資本主義的生産を担って発展させるに最適な国民性を、明治維新の前から日本人は身に付けていました。GDP世界第二位にして一億総中流、日本は資本主義ではない、最も成功した社会主義国だと言われたのも無理ないことと思います。

恐慌は、貸付金が回収できないという形で、金融恐慌として現れます。本来資本とは、生産手段とそれによって生産された商品のことですが、貨幣が現れた途端、資本主義の矛盾の爆発として、貨幣が資本にすり替わってしまうと、宇野弘蔵氏は、正に資本主義の錯覚を見事にえぐり出して言います。恐慌論を読んでいると、突然このような鋭い洞察に出くわし、それだけで心酔してしまいます。

今恐慌を避ける手段として様々な方策が講じられるようになり、恐慌が恐慌として作用しなくなりました。その結果、恐慌によって清算、破壊されるべきものがそのまま先送りされてゆきます。震災後、国内大手メーカーが液晶テレビからの撤退を表明し始めましたが、本来もっと依然にそうなるものではなかったでしょうか。今アメリカには蛍光灯を作る工場はないそうです。そのうち日本でも、テレビを買うときには外国メーカーの中からしか選択肢が無いことになるのでしょうか。液晶パネルを作る処のないアメリカのように。

話が逸れました。企業は 信用 を以って、銀行から融資をうけますので、社会全般でその貸付金が回収できなくなると金融恐慌になりかねません。そこで銀行を守るために、国から税金が注入されます。このことは、ついこの間日本で見たことでした。

恐慌、大不況を避けること、そのために近代経済学は生まれました。しかし、それは資本主義を延命させるだけのものでした。下部構造が上部構造を規定するという命題が本当なら、様々な科学技術の進歩がもたらした現代の繁栄も、資源の枯渇、環境の悪化、少子高齢化などの下部構造の衰退も、上部構造を変化させるのでしょうか。

それでも、中国やキューバは、市場原理 を導入し、つまりは経済を資本主義化し、市場を活性化しようとしています。

人は欲で動きます。資本も利潤を求めて動き、人の欲望をかきたてて消費を促します。生産のエネルギーに、それが喩え人には制御できない地獄の炎であっても、悪魔との契約といわれても、危険に目をつぶって 原子力の火 に手をだします。もう、そろそろ気がついてもいいのじゃないでしょうか。資本主義のなかには 人 はいなくて、欲望だけが体系化され、すべてが商品となり、それを貨幣が取り巻いている と。マルクス経済学であれ、近代経済学であれ、国富論から始まった経済学はそう教えています。

しかし、私達は後戻りはできません。もう道しるべのない未曾有の混乱の時代が来ようとしているかもしれません。マルクスによって予言された共産主義の時代が来るなんて誰もしんじていない今日、次の時代へ今移って行こうとしていることだけ知っておき、身構えておきましょう。声をあげましょう。目を見開いておきましょう。我々はかつて時代の真ん中にいたのですから。

後に保守派に転向した人ではありますが、塩見七生さんがローマ帝国の亡びた原因はカエサル以降、この指導者なら、いやこの指導者ならと短期間で次々と指導者をとっかえひっかえして、政策の一貫性がなくなったからであると言っておりました。ローマ帝国は百年の単位で亡びてゆきましたが、現代ではそうは行きませんし、その意味では今日本は滅亡に向かっている最中でしょう。時代は待ってくれません。

終戦後、占領下の日本で和平交渉に、実質的に当たったのは 白州次郎氏であったそうですが、彼のような人をこう呼びましょう、 インテリゲンチャー 。

確固とした世界観と国際意識を持ち、大衆に迎合せず、きちんとした国家観を持って決断、行動できる インテリゲンチャー が出てくれることを望みます。

まっ もう無理か

父が海軍で自動車兵であったことは書きましたが、父が自分で仕事を始めたときも自動車には凝りました。始めこそお金もないので大したものには乗りませんでした、あの名車 スバル360 にも乗っていました。2ドアで、しかも観音開き・・・と言ってもわからないかもしれませんが、ドアが前から後ろに向かって開く、今の車とは反対の開き方でした。ですから、ドアの取手も前方に付いていると言えれば想像できるでしょうか。エンジンも360CCしかなく、非力と言えれば非力でしたが、とてもよく走りました。スバルはもともと戦闘機を作っていた会社で、メカも凝りに凝っており、当時の悪路をととても乗り心地よく走りました。ただあまりにふわふわするので乗り疲れし、長距離は辛いものがありました。エンジンも RR で ー リアエンジン リアドライブ のことですが ー このことから 日本のプアマンズ ポルシェ ともいわれておりました。とても及ぶものではありませんが。そして今はこの プアマンズ ポルシェ という言葉自体多様化し、スバル360にそんな形容がされたことなんか忘れられてしまっています。しかし松田のキャロル、トヨタのパブリカと続き、国民車という時代のさきがけでありました。

そして父の乗ってた車で次に印象深かったのが ブルーバード でした。それも510 というブルーバードです。これでよく猪鼻峠を越えました。四輪独立懸架の足回りはコロナよりしっかりと路面をとらえ、しかも乗り心地がよかったと覚えています。ただ安心感といえ、若干腰砕け気味なところもあり、ひやっとすることがありました。サファリの脚、と言い聞かせて乗っておりましたが・・・。

コラムシフト なんて言ったって今の人には解りません。ましてや、ちょっと意地悪に だるまシフト って言うんだよという、なにそれっ！と問い返してきます。普通になら フロアシフト ですね。私が免許を取った時は、ハンドルコラムシフトが全盛でした。さらに、自動車雑誌の評では、シフトがぐらぐらするという点がよく指摘されていました。オートマチックばかりになったいまでは、クラッチを踏み、レバーを操作して変速してゆくななんて特別なことで、趣味の世界になってしまいました。510 ブルも確かコラムシフトで、三段変速じゃなかったでしょうか。父はちょっと高級なテクニックの、ダブルクラッチを自慢していました。

私が自分の車として乗ったのは、シビックの初代でした。これは今でも懐かしい車です。排ガス規制をエンジン機構のみでクリアし、ホンダマチックという二段手動オートマチックでFF車、しかも 2ボックススタイル と新機構満載でした。さらにその出足の鋭さは他社を寄せ付けません。ただ、冷房はクーラーで、夏場スイッチを入れる

と霧を吹きました。なにがあったから次の車に乗り換えたのか、覚えておりません。10万Km以上乗ったと思います。

そんな時代、車は夢でありました。それが何時の間にか、車は乗り潰すのが一番経済的と思うようになり、その頃から、大体20万Km以上乗るようになって、期間も十年ほどは一つの車で押し通すようになりました。車はただの移動手段、そう思うのが普通の意識になるなんて自分でも不思議なくらい、若い時は熱中しました。夢のない話です。車と言えば、家の次に大きな買い物ですのに。

今の車も10万Kmを越えています。ハイブリッド、ディーゼル、EV、プラグイン、いろんな言葉が飛んでいます。多分ハイブリッドは後2~3年で、次の世代の車に変わってしまうのでしょうか。プラグイン ハイブリッド という技術がもう出てきていますから。しかし次の技術なんて解りませんので、今の車に乗ってあと五年待ってみましょうか。・・・しかし、後5年もすると、車も要らなくなってしまうかもしれません、私のほうが。

国債は国の借金とは解っています。なんか1千兆円なんてとんでもない金額になっていこうとしているようです。国は破綻するのでしょうか。ヨーロッパを見ていると不安でなりません。国の借金は私達に帰ってくる重責です。誰がこんな借金をつくったのでしょうか。もちろん時の政権でありましょう。日本を再度被爆国としたのも、原発行政を推し進めてきた 時の政権 でありました。確かに今の政権も政権慣れしておらず、政治が停滞しまくって歯がゆい限りではありますが、それだからと言って前政権側が居丈高にののしり、脚を引っ張る様は見苦しいかぎりです。この結果の原因を作ったのは誰と問いたいです。

国債はどここの国も出しているようですが、国が借金して手にしたお金はどこへいったのでしょうか。国民の懐に入ったと、今の名古屋市長は言ってましたが、私のところに来たでしょうか。そんな覚えはあまりないのですが・・・。しかし自分では買ってなくとも、お金を預けた銀行が買っているみたいです。勿論個人向け国債なんて言うのもあるようですが。銀行は国債を買って、その利子より低い金利を預金者に渡し、その利鞘を稼いでいると聞きました。だから国債なんて危なくて買わないと言ってても、無関係では居られないのです。銀行は日銀に国債を引き受けさせられ、逆にそれで稼いでいるという構図です。こうして手にしたお金を何につかったのか。それは多分、国家予算の中に書いてあるのでしょうか。それも、わからぬように。

ドイツのアウトバーンは、ナチス・ドイツが行った、失業対策としての公共工事でありました。アメリカも西海岸の高速道路網の建設で、同じように不況対策を行いました。国が借金をして、お金をばらまけば景気が良くなり、再び税収も上がって借金は返せるというのが、ケインズ理論であります。しかしこれがケインズさんの限界でありました。いまは、ケインズさんが想像もしなかった事態が起こっております。国が破綻する、破綻しっこない国が今は破綻して行きます。そんな時代をケインズさんは想定していなかったのです。人口も工業力も消費も、一様に右肩上がりと思って、不況はちょっとした躓きだから、ほんの少し助けてやれば、また元の活気を取り戻すと思ったのです。しかしその想定が覆りました。どうしましょう。誰がこんなに借金してくれと頼みましたか。誰があぶく銭を掴みましたか。以前にも書きましたが、よおく目を見開いて、見ておかなければなりません。原因を作った奴が、下を向いてほくそ笑んでいるかもしれませぬよ。

自分がそうだからと、日本人全体が、などと大きなことを言うようですが、日本人って 自分のために 生きる ことが苦手なのではないでしょうか。自分を主張し、自分勝手に振舞うことは 身勝手 で 不謹慎なことだとされているように思います。滅私奉公の時代から、自己犠牲 とか 献身 、私欲を捨てる ことが 美德 であると、今また言われます。時に、我欲という言葉も言われるようになりました。我欲 って、なんでしょう。昔、それと対峙するような言葉を聞いた気がします。自己否定、そしてこの言葉は芸術家が、自分の作品をより高い次元に押し上げようと葛藤することであったものが、新左翼学生が自分達の恵まれた環境を否定し、より弱い人たちのために闘わなければならないという風につかわれるようになった言葉でした。そしてこれを、ともに激しい自己主張であると喝破したのは 高橋 和己氏 でした。

こんな大げさなことではなく、また子供のためにとか親のためにとかではなく、もっと自分を生かすように、自分の欲を主張するのではなく、自分が達成したかったことを成し遂げようと生きてみてもいいのではないのでしょうか。特に私達の年齢のものは、もう自分の時間が残り少ないのですから。世の片隅で生きてきたものにも 夢 はあります。昨日の続きみたいになりました。しかし、その 夢 も忘れていたみたいなんです。

かつてのSF大好き少年は、内容は全くわからなくても 光格子時計 がとてつもない可能性を持っている とか リサ ランドール博士が 物質 反物質 そして素粒子が ふっと消えて行く それは 異次元 に飛んで行く とすれば説明がつく というNHKのインタビューを聞くと、つい耳をそばだててしまいます。そして今日、筑波大のチームが京大のスーパーコンピューターを使って、宇宙の始めには 九次元 あったものが ビッグバン のある時を境に三次元だけが広がり、後の六次元は縮んだまま取り残されたことを解明したというニュースを聞きました。またニュートリノ粒子が光より速いとか。これによってアインシュタインの相対性理論が覆ったと言って、ほんのすこし話題になりました。科学はどこへゆくのでしょうか。しかし二十一世紀は物理学の時代かもしれません。原爆をつくったのも科学ではありましたが。

古代インドの人たちは、例の 亀に象が乗り大地を支える宇宙像を考えました。密教の 退蔵曼荼羅 も仏教からの宇宙観でありました。その時代の、ある常識、もしくはそうと意識しないしない想像の土台が、科学的といわれるものを、実は支配しています。天動説がそうでした。いま私達は地動説を常識とし、天動説、地動説の争いを過去の歴史と思っていますが、天動説を論拠がキリスト教であったこと、そしてそれを覆そうとすると火あぶりにさえなり、大衆もまたそれを支持したことを思うと、科学というものに思想が入り込んでいないかと疑わなければならないとおもいます。なにかの思い込みがないか、ある事象にそれで当然と簡単に肯定してはいないか — 特にこんな時代ですから、目の前の事柄にとらわれすぎてはいけないと思っています。

しかし科学者は、今度はどんな宇宙像をみせてくれるのでしょうか。

よく見かける月刊誌で、ふーんと見るだけにして買ったことのなかったものを、ちょっと買ってみました。それを見つけて、これもちょっと理屈っぽい娘が、お父さんて左翼だよね としらじらしく訊いてきます。イヤ 新左翼 だよ、左翼なんかじゃないよ と言り返します。じゃ、竹島は？ 尖閣列島は？ 中国は？ 安保は？、私は心情右翼よ、と畳み掛けて聞いてきます。多分それは、なにがどうと言う事もない反感なのでしょう。TTPは？ と娘に問われても、危うさを感じている としか答えられません。日本の将来はと、NHK も MADE IN JAPAN の復活を特集していました。

しかし、本当に危うさを感じています。大東亜戦争に突入していくときの、ABC包囲網をみているような気がします。国の借金は1000兆円を超え、ケインズさんも想像できなかった 国家の破綻 が現実にかかる時代です。資本主義はその需要を超えた供給の行き場を失い、本来なら恐慌によって整理されるはずなのに国の借金で支えられ、資本の健全性を取り戻すきっかけを失って存続してしまい、それでも成長し続けねばならない定めでその運動を持続して国民の中に格差を生み続ける、そんな構図があまりにも透けて見えます。中東の春 は アメリカの春 には結びつかないでしょうし、チェインジ は出来ず、日本も停滞したままですから、覚悟しましょう。これが私の念頭の思いでした。なにを？と娘が聞きます。自給自足、晴耕雨読、病気をしないように健康を維持、そして、私 生きてて良かった と思い、くじけないでと言ってくれる人の思いを覚悟する、これです。

子供のときです、監獄ロック を聴いたのは。しかし、私達より下の世代でも、プレスリー が大好きという人もおります。しかし、私達世代ではちょっと古い人ではないでしょうか。なんたって ビートルズ 、そして ローリング ストーンズ です。これらを私達は、今風に言えば リアル タイム に聴いてきました。ウッドストックもありました。それ以降、音楽そのものを変革する 新しい ものは出ていないと言われていています。この時期、チャーリー パーカー から起こった新しいジャズも、マイルス デビス がワイト島のロックフェスティバルに出演し、圧倒的な存在感を示して、音楽シーンからフェードアウトして行きました。

パソコンの話をしてしましよう。ワンボードマイコンをご存知でしょうか。近年 大人の科学 で復刻版が発売されましたが、値段は2500円ほどだったと思います。ところが最初は当時のお金で8万円もしていました。それでも、このマイコンに飛びついた人たちがおりました。直流電気のキットは別売りだったと思いますし、言語は マシン語 でありましたし、技術者のトレーニングキットであったにも関わらず、今で言う オタク の一派が、つまりは新し物好きのマニアがとびつきました。言語入力はテンキーで、出力は電卓のようなセグメントLEDで、何桁かの数字とABCが表示されるだけでありましたのに。

のちに、日本ではシャープの、テープBASIC の乗ったMZ80と、ROM BASIC の NECのPC8001 の戦いになり、PC自身はシャープの方が速かったにもかかわらず、NECが市場を席卷しました。アセンブリ言語やら二進数やら、PCの聡明期は活気のある混乱でありました。そしてAPPLEはコンピュータのポルシェといわれるほど高かったです。さらにPCは マイコン と呼ばれ、雑誌もこの名前のものがマニア向けに発行されておりました。ちなみに、私の初めてのPCは MZ80B でありました。

その時期、このマイコンを使って、パソコン通信なるものが行われておりました。インターネットとは違って、電子メールのみの通信で、画像とか動画は添付できませんでしたし、インターネットとは違い、開放されてはおりませんでしたので、契約した者の中だけの通信で終わっておりました。そして直ぐにインターネットの時代になり、パソコン通信なんか在ったのかという風になり、思い出されもしなくなりました。

しかし、たとえモデムを使ったインターネットでも私達はその聡明期から使ってきました。ホームページとは、ネット接続のとき一番最初につなげるサイトの事を言うとか、今思えば変な解説のマニュアル本がまかり通っておりました。夜八時の、電話代

が安くなる時間帯を待って、英語だらけのサイトをネットサーフィンしておりました。

携帯はどうでしょう。テレビはどうでしょう。テレビは、アナログからデジタルに変わりましたが、BSもCSもデータ放送も使いこなしておりますし、昔とそう変わった風にも受け止めてはいません。自動車も、ハイブリッドがどうしたとか、EVやらプラグインハイブリッドも物怖じするものではありません。携帯は・・・、ガラパゴス化したその機能はちょっと手をこまねいてしまうところがありますが、なににスマートホンやらiPadだって使えると信じております。いや、パソコンを使ったネットよりも使いやすいものになっておりますから、接続設定とかなんとかを意識せず使えて、もっと快適なはずです。ですから、これだって物怖じするものではありません。通信料が高いだけです。

パソコンもテレビも車も、時代の最先端のものと言ったって昨日の続きのものばかりです。。前世紀（20世紀）、時代を革新し、生活を大きく変えたものは、私達が作ってきたものです。私達が時代の真ん中にいて、次々と新しいものを世に送り出し、生活を変え、考え方まで変え、価値観まで変革してきました。21世紀はまだ12年しか経っておりませんが、そんな変革の芽も見えません。時代はまだ私達を乗り越えてはおりません。ですから、自分から年寄りだというのはやめましょう。3Dゲーム？、そんなものチャンチャラおかしいわ、インベーダーやらブロック崩しの出てきたときの衝撃なんか知らんやろう、と言ってやりましょう。iPod？、ウォークマンの新しさは、凄いブームを作ったんだぞ。車なんか、最初の形の改良でしかないじゃないか、携帯とかネットは20世紀のものだしね。

21世紀はまだ20世紀を乗り越えてはおりません。

そして今の人達が、私達に理解できないものを作り出したとき、日本は立ち直れると確信しております。

頑張れ、若造！！

と言っても、法律相談をしようというわけではありません。

法律相談と言えば、確かに NHK 土曜午後 の 生活笑百科 は 某テレビ局の 法律相談所 なるものよりは地味ですが、より有益でおもしろいです。この番組を見るまでもなく、我々の生活には、法が網の目のように張り巡らされています。また、ゆりかごから墓場までの、人の一生も同様です。この世に おぎゃ と生まれると、出生届を出さなければなりません。（ 戸籍法 ） だんだん成長すると、その時々には予防接種も受けることになります。（ 予防接種法 ） 学齢期では義務教育を受けるため、学校に入学します。（教育基本法 学校教育法 ） また、未成年者の間は喫煙、飲酒は 未成年者喫煙禁止法 未成年者飲酒禁止法で禁止されていますし、未成年者の契約を含む法律行為は、法定代理人の同意がなければ無条件で取り消すことができます。（ 民法 ）

あげたら切りがないほどですが、意識してなくても我々の生活は法律にがんじがらめにされています。道を歩くのさえ道路交通法で決められているのですから。人は右、車は左、と小学生の頃から教えられます。学校の先生が言うから決まりなんだろうとおもいこみますが、これも 法律 が定めていることです。決まり と 法律 ってどうなんでしょう。

自然法 という概念があります。あれこれ理屈をつけなくとも誰も否定できない、当然の摂理だといっておきましょう。王権神授説のように、カミが与えたもうたとか言い出しますが、気にしません。人を殺すなかれと、神も仏も人も説きますから。決まり も 倫理 も 法律 も、このことに反論は出来ません。ところが戦争はどうでしょう。人を殺せば殺すほど 英雄 になり、法も倫理も決まりも 賞賛 します。

規範価値の逆転 が起こります。戦争以外で人を殺せば 殺人鬼 、戦争ならば 英雄 の、規範の逆転です。人を殺すなかれという命題は、戦争という地平に置かれると、例えば 祖国防衛 とか 自国民救出 などの価値が介入し、普遍的規範をも逆転してしまいます。正当防衛も同様のことですが、交通事故を避けるため、どうしても避けなければならなかったところにたまたま人がいて、車等でこの人を死に至らしめても正当防衛の考え方が適応され、免責とされるという、ちょっと理解するのに苦労するようなところが起こります。

大学のゼミを受講する際、教授の面接が必要で、そこでなにをやりたいのかを述べなければなりません。以前書きましたが、私は社会科学方法論を考えてみたいと申告しました。その時、担任教授から、国家は何時成立したと思うか、と問われま

した。有史以来、古代国家は存在しましたし、アリストテレスの 国家論 もあること
ですから、そんな風に答えた所、否と言下に否定されました。古代国家は国家とは言わ
ない、国家と言うもの、もしくは近代国家は、資本主義が芽吹いてきたときからその形
を整えた、と教えられました。勿論、マルクス主義的国家論からの言及だったと思い
ます。私的所有財産の保障のための国家機構の成立をもって近代国家、ブルジョワ国家
の成立とします。自由、平等、博愛、そして所有を確かなものとする委員会が国家機構
であるといえます。民主主義もこの中から生まれました。法の下での平等もそうです。
軍事、司法、立法、そして行政となり、官僚機構が成立し、これが影に隠れた支配機構
となり、権力の執行機関となりました。法を執行する官僚こそが、権力を握った国家
です。民主主義は国民が主権者として政治家を選びます。政治家は、選挙で選ばれ、立
法府を形作り、法を成立させます。そしてその法を実際に運用、執行するのは、選挙で
選ばれることのない官僚たちです。法を執行するから、力を振るいます。そして、その
法の結果からの責任は問われません。権力を振るいながら責任は問われない、なんと理
想の権力者ではありませんか。日本の公務員は、どんなことがあっても解雇されること
もないのです。飲酒運転は別ですが。しかし官僚も、責任を追及されないための逃げ道
は意識しています。例えば行政の無謬性とか、事業の継続性、司法の独立など、いろん
な理屈をつけてきます。にもかかわらず、最高裁判決で、行政の側に立たない判決があ
ったでしょうか。裁判さえ国家の側に都合よく行われます。

法は、憲法を頂点に、刑法、民法、行政法と、美しい正義の体系をなしていると思
っていました。幻想です。法はただの調整方法の塊に過ぎません。遺産相続を考えてみ
ても、親が遺産相続なんかさせたくないと思っている子孫にさえ、平等の権利を与えて
います。遺言状があるじゃないかといわれそうですが、それでも遺留分を認めるのが法
律です。ただ、子孫だからという身分上の権利だけで、それ以上の事情は考慮されま
せん。どこかで決着をつける、つまり調整をする、それが法律です。法の決着に正義は
ありません。

憲法は占領軍の押し付け。その憲法も解釈で捻じ曲げ、拡大解釈の連続となり、
しかし、憲法そのものの縛りで改憲もできず、いまやいびつな国家が出来上がりました
。そのことに気付き、法を学ぶことに嫌気が差しました。

しかし、悪法も法 です。 心しましょう。

私たちも怒ってはいるんです

今の状況について憤ることは確かにあります。しかしそれはいかにも政治的なことですので、極力避けてきました。そんな発言は聞きたくもないし、退屈なものです。しかし言わずにはいられないこともあり、つい元政治学生が口走ったこともありました。尖閣列島について、今激しく 愛国的な ことを喚いている 元与党 とその取り巻き評論家は、竹島について自分達のしてきたことをわすれたのでしょうか。李承晩ラインが引かれ、拿捕された漁船、そして死者まで出した漁民ことを私達の世代は知っています。今竹島でファッションショーが行われようと観光旅行が組まれようと、先ずその発端で抗議らしい抗議、実力行使もせずに来たのは彼らです。弱腰外交と罵るなら自らを罵ってからにすればいい。尖閣についても同様の事。駄目外交といって批判している今の政府は、かつての政府の取った行動とおなじではないでしょうか。頼被りして、国民は忘れているだろうと高を括ってはいけません。中国の、尖閣の先送りというの術数に乗ったのはだれだったのか、そのことを思い出してから批判すればいい。

といった、過激な発言を何度か書いて、また削除してきました。やはりこんな政治発言は控えましょう。こんなこと誰でも知っていることですから。

団塊の世代と言われて久しいのですが、私達団塊の世代は今の日本の人口のなかで5.5%の比率を占めております。これが今の日本が抱えた、これから予想される困難のおおもとなんです。誰もはっきりとそうだとは言いませんが、事の真相はそういうことです。しかし、それがどうしたと言ってやりましょう。最近の政治状況を見ると、社会福祉がどうか、一人が一人の肩車方式とか、まるで国の足かせ、重荷といわんばかりの言い方です。しかしそれがどうした！今の事態を招いたのは私達ではなく、それを予想できたにもかかわらず、何もしてこなかった そちら の責任だろう！！そう言ってやりましょう。今私は腹立たしくて仕方ありません。今回はそんなことがつい思わず口を突いて出てしまいました。

私達はたまたま戦後間もなく生まれました。全く何も無い、荒廃の限りを尽くした戦後に生まれ、それから起こした日本の奇跡の時代を生きてきました。誰が、戦後の日本が世界第2位の経済大国になるなんて予想したでしょう。そして、私達自身もその戦後日本の昭和を荷い、闘い、ついには時代を支えるようになりました。ときには日本の文化さえ、私達の意識が作り出しました。それが今、世の中の中心からはずれ、老兵は消え去るのみ という事態になってくると、時には年金の食い逃げ、全世代で一番貯蓄を持っているシルバー世代、一番よかった時代を生きてきた人たちと称されます。税金を払わなくなれば国のお荷物と言わんばかりじゃありませんか。それはあなたのひがみ根性と言われそうですが、それに対して言い返してやりたい。政治と国策の貧困、そして利権を抱え込んで離さない あなた達 の誤りだと。

この あなた達 って誰なんでしょう。政治家、官僚、マスコミ、言論人、そういった人たちもあるでしょうが、なにか茫漠とこの国をおおったものがあるように思えます。間接民主主義は選挙によって議員を選びます。それによって国権の最高府たる国会が構成され、そこで国策がきまります。選挙が国民の総意、それによって国策が決まる、本当にそうでしょうか。国民の総意に反して、国民の知らぬところで、国民の支持しない政策、国家の方向が決まってきたことを私達は見すぎました。

今ワイドショーでヒーローのように取り上げられている某市長は、選挙で選ばれてきたんだからとか、支持されているからとか言って自己を正当化します。それに対して東大の某政治学者が彼に、選挙で選ばれたからと言って全権を委任したわけではない事をしておくべきだと発言しています。選挙で勝利しても独裁者になれるわけではない。彼は徹底して大衆に迎合していく、底の浅いアジテーターにしか見えません。私は在日朝鮮人の苦境のなかで生きてきた政治学者の方を信じます。

現政権のていたらくは、政権運営に不慣れなだけではないと思えます。過去の巨大な負の遺産に押しつぶされたこともあるでしょう。彼らの無能さも一因です。しかし政治家が入り込めないところで何かが決まっていっているように見えます。しかしそれが顕在化したのが 岸信介、昭和の妖怪 ではないでしょうか。そして 吉田茂、彼らの行ったことは正に 国家の意思の発動 でした。この 国家の意志 に反すれば、あのオバマ氏でも何も成し遂げられなかったということが見え隠れします。米国では、エスタブリッシュメント という言葉が言われます。Establishment 支配階層体制 創業 設立、結局表の顔が変わっても何も変えられません。ましてや民主党ごときでは。

どうも、団塊の世代の恨み言になったみたいです。

団塊の世代は、オオ モオレツ！と言われるほど勤勉に働いてきました。家庭も忘れ、政治状況も振り返らずにです。生まれた途端から競争競争とかりたてられてきたからでしょうか。しかし、今日の日本をこんな風にしてしまったことについては、ほったらかしにしてきた我々にも責任があると思います。我々はテレビ右翼のアジテートに乗せられたりもしません。戦後の日本を自分史として見てきたのですから。さらに、遅れてきた青年将校ほどにも年取ってはいません。より冷静に判断し、もっと積極的に声を上げるようにしなければいけないと思っています。

付け加えるなら、自分は正しい と思っている人ほど始末に悪いものはありません。彼らの思考はそこで停止しているのですから。思う 感じる ことは誰でも出来ます。考えましょう。正確な情報に基づいて考え、やたら怖がったりせず、考えたら覚悟を持って決め、実行しましょう。放射能汚染の事も、がれき処理の事も。誰でしたか、自治会長なる人が 聞く耳持たない と言い捨てていました。そう言い切って終わりですか。腹立たしい限りです。その人の口から 絆 支えあう日本 なんて言葉は出ないのでしょね。

しかし 戦後の昭和 は私達の時代でしたから。

浜矩子さんの書いた新・国富論を読みました。ちょっとじゃなくて、随分怖い女史ではありますが、テレビ等で言ってることを聞くと、「市民国家」「国民国家」を目指し、国民の大半が豊かな中間層になることを願っていることがうかがえる論客とみえました。その女史がいまの世界化した経済を分析し、そこからなにか新しい富論への処方箋を展開してくれているのかと期待して読みました。結論から言うと、それが書かれていたのかどうか、解りませんでした。もどかしいほどのあいまいさです。先を予測するなら、経済は国境をとくに越えていってしまおうとしている。その現実にあって国家とその枠のなかの国民が、経済活動から取り残され、それゆえ国民を不幸にしている。その矛盾が、民の不幸をもたらしていると、持って回った言い方で分析しております。グローバル化は、何もかもを均一化しようとし、最低価格、最安値、最低の人件費、最低のコスト、と並べて最下位争いといいます。デフレなんか当たり前。こんな時代には、企業栄えて国家滅ぶ、企業栄えて国民滅ぶ、となっているといいます。そういえば、お隣の韓国がそうですね。国が挙げて応援し、ウォン安とのっぺらぼうなパクリ、金で頬を叩いてのヘッドハンティング。これは中国も同じですね。今NHKでメイド・イン・ジャパンというドラマをやっておりますが、この現状をよく描いていると思います。

そんなことは、引かれ者の小唄程度でしかありません。

いまの世界はヒト・モノ・カネがかつてなく自由に世界を動き回っていると、浜さんは言います。これがカタカナで表記されるところに、妙に解りやすさを感じました。

さらにキーワードはグローバル時代、またはグローバル化。このグローバル化を、我々は歴史上三回経験しているといいます。第一回は航海時代、ついで産業革命のとき、そして今回の三回だと言うのです。浜さんは言及しておりませんが、明らかに第二回目の産業革命のとき、その時代人は大デフレを経験しているはず。たとえばそれだけで懸命な諸氏は納得されていると思います。とても高価だった繊維製品をはじめ、多品種のものが大量生産され、それまでのものとは比較にならに程の安値でどっと市場にでまわるようになったからです。生活の利便性を追求し、需要のある物は大量に供給される、それが産業革命と資本主義の原理でした。その時代も原材料費をとことん抑え、人件費も女工哀史にあるように徹底して抑制されました。そして製品は軽々と海を越え、海外に輸出されました。イギリスは世界の工場でした。つまり、製品の値段はどんどん安くなり、そこから利潤をあげるため、人件費も最低に抑えられたのです。これはデフレです。

現在の日本のデフレは、明らかに中国からもたらされたものです。中国の甘言に乗り、低い賃金で人件費を抑えて加工組み立てを行い、製品の原価をとことん抑える。少々流通費を払っても、そのほうが利潤をあげられる。そのような、その会社にとってはいいことも、全体で見ると不利益になる。これを合成の矛盾と言うのだそうですが、その通りです。その結果国内での雇用は無くなる。あっても中国に限りなく近い水準まで押し下げた、各種保険とか退職金のいらぬ非正規になってしまいました。そのあたりは、私たちはつぶさに現実としてみているので、浜さんに解説してもらうほどのことでもありません。

グローバル・サプライ・チェーンという言葉も出てきます。iPhoneを例にすると、その大方の部品が東芝であったりソニー、パナソニックで、中の基板は台湾製、タッチパネルも台湾製、液晶部分がサムソン、表面ガラスはアメリカ製。そして組み立て工場が中国。このiPhoneと闘っているのがサムソンのギャラクシー。特許権訴訟で泥仕合のアップルとアンドロイドですが、iPhoneの肝心要めのCPUを作っているのが、なんと当のサムソン。なんという世界構造でしょうか。アップルはデザインするだけ。あとは都合のいい部品を集めて、パクリの国中国で組み立てる。そして仇敵とも片手では殴り合いをし、もう片方は握手している、それがグローバル・サプライ・チェーンです。

しかし日本はだらしがない。かつてOSについては、アメリカの圧力で日本製のOSの開発を断念し、CPUはソニーがゲーム機のCPUですが128ビットのものを作れるのに、これもアメリカの貿易摩擦を口実にした強い圧力に屈して断念した過去があります。それを韓国はやすやすと乗り越えています。もちろん、液晶の製造機はエプソンが作り、他の部品も日本から多々輸出されて、サムソンもそれに頼らざるを得ない。またサムソンの最大株主は確か、NTTだったのではなかったでしょうか。浜さんのいうモノが技術も含むなら、製造機械も技術もカネも韓国、中国に日本のモノ、カネが出て行っています。そして日本の雇用も内需も出て行きました。国の富が出てゆき、国民生活も中国、韓国のレベルにまで引き下げられました。非正規雇用、派遣、パートの雇用形態が一般的になり、格差が広がり、韓国中国の貧富の差の有様と変らなくなってきています。企業栄えて国滅ぶ。正にその通り。

グローバル・サプライ・チェーンから、グローバル市場に目を移すと、国際市場と世界市場は違うといえます。国際市場は国別ではあるが、それらが多様性を持ったまま集合した市場。グローバル市場は情報が同時に広がる、そしてその情報によって地域特有の嗜好性が薄まって行き、均一化する市場といえるかと思います。よく言われました。サムソンの強みは地域のニーズを汲み取り、それに合った製品を他より安価に売るこ

とだ。確かにそれもあるでしょう。そして日本ではその反論にメイド・イン・ジャパンのブランド力はまだ生きている。為替レートさえ何とかなれば、輸出大国日本はまたよみがえるんだ。これは、神風が吹く、という妄信としか思えません。我々が欧米各国の家電メーカーを追い落とし、ついには米国に蛍光灯を作る会社がなくなるまでにしたのは、ついこの前でした。米国政府が日本の液晶パネルに、国内産業を脅かす不正があったと言いがかりを付け、何倍もの関税をかけようとしたこともありました。米国の国内産業？なんですか、それ。米国に液晶パネルを作っているところって一社でもありますか。不正競争防止法って適応して大丈夫ですか？こうして日本の液晶テレビは世界を席卷したのでした。

そのころ液晶パネルは、高度な技術とクリーンルーム等の設備が必要なハイテク製品でした。それを日本自身が容易に作れる技術を生み出しました。そしてその技術をお隣とかその向うに輸出して、ハイテクをローテクにしてしまいました。自分で自分の首を絞め、それでもまだメイド・イン・ジャパンは生き残れるとこだわり続けたのが、ついこの前までの事でした。これって、ソニーのトリニオン・ブラウン管のときと一緒にです。液晶を見くびり、わが社のブラウン管の優秀さは決して追い越されることはない、高を括っておりました。ソニースピリッツも地に落ちたと思いました。ソニーの凋落もここから始まりました。IBMがレノボに買われ、ジャンク品の集まりのような、直ぐ壊れると評判の立つPCしか作れなくなっているのも、この頃の事です。自分たちがかつて追い越し、追い落としたものは、次には自分たちが追い落とされることになるのだと知っておかなければなりません。日本でもテレビと言えばサムソンかLGから選ぶしかないときがくるかもしれず、また日本人もそれを覚悟しなければならない時代になったのではないかと思っています。円安の神風は、たぶん焼け石に水……。日本の家電メーカーはなぜ次を見据えておかなかったのか。トヨタに出来ることが、なぜ出来なかったのか。ホンダも個人用ジェット機を手がけています。アシモ君も開発し、次の時代を見えています。ソニーのノートパソコンはすぐ壊れるそうです。

ヒト・モノ・カネが経済で、カネはどうだというのでしょうか。国富論のスミス先生は、それまでの重商主義を批判して、労働価値説を言ったと浜さんは書きます。商品の価値は市場で、どれほどの価格で売れるかが決まる。持って回った言い方ですが、できるだけ安く作り、沢山売って出来るだけ儲けたい、そしてカネを蓄えたい、これを重商主義と言っています。それに対して、商品の価格または価値は、その品物にどれほどの労働が加えられたかによって決まると考えるのを、労働価値説と言っております。我々日本人は、比較的、労働価値説は飲み込みやすいと思います。一つのもので作り続け、未だ満足のいくものが作れない、勉強中ですというのが日本人です。極めたいと思うからでしょう。ですから**の神さまが出てきます。あのヒトはなんとかのかみかまだから……。さらに、なんでも 道 にしてしまいます。お茶を飲むのも茶道、お花を生けて華道、匂いを当てて香道、剣術が剣道、柔術が柔道、空手もこれに習って空手道、相撲も相撲道、切りがありません。しかしこれが日本人だと思っています。ですから一つの品物にも名人技がこもっています。その意味で労働価値説は解り易い。しかしスミス先生のいう西洋的労働価値説は、プロテスタント的禁欲主義から来る、倫理上の価値説ではないかと思っています。市場で決まる品物の価格は、需要と供給だけで決まてはいけない、そこにどれほどヒトの手が加えられているかで決まるのだと言いたいのです。需要と供給のバランスといえ、スミス先生の専売特許のようにいわれますが、見えざる手による決定なんて、あの国富論の中ではほんの一二ヶ所でしかないのです。それも分業による需要と供給で社会はバランスよく成り立っていくとっております。スミス先生はカネ儲けをして、富を蓄えることを批判します。カネは交換動機の便利な道具、交換のスムーズな活動のための尺度、量りでしかないと。しかし拝金主義は昔から横行しています。カネだ、金だ、ダイヤモンドだっていくら持っていたても、砂漠で水にはなりません。飢饉に食べ物にもなりません。

今、円安が進んでおりますが、庶民はマスコミの報道にどう思っているのでしょうか。デフレからの脱却と、インフレ・ターゲットで2パーセントなどの文言が踊っていますが、かつての金本位制から国家管理の通貨になったカネは、数字でしかありません。金融緩和で紙幣を刷りまくって、ジャブジャブ市場に流せば、それは遠めにみると、国家の富を水増しして薄めていることに過ぎません。一時期薄めた貨幣価値は、市場の物価が時間を置いて変動することから、カネ持ちになった、沢山買えると言う事になりますが、薄まった貨幣価値は高くなった物価に飲み込まれ、手にする紙幣が増えない庶民を苦しませるだけです。早やガソリンが上がり、電気代が上がり、物価は次第に釣り上

がろうとしています。見せ掛けだけの、今の時期のみの、つまり半年先はわからないカンフル剤が**ノミクスだと思っています。

いま輸出産業を支えている、しかしお隣の国に負けている家電とかの、かつての花形メーカー企業を、その体質を改善させず、生き延びさせる策が**ノミクスでありましょう。延命策がさらなる不況を招きます。浜先生も大きな声では言っておりませんが、大恐慌が産業を一新させてきたが、国家は大恐慌を恐れて、その回避策ばかりを図ってきました。そのひずみが国家自身の破綻につながると、・・・そこまではいってはおりませんが、大恐慌のことをさらりといいております。ギリシャに端を発したユーロ圏内の破綻はそれを表しています。それゆえ、ケインズ先生は、次の時代の考察判定員から外しています。かれは国家経済を考え、グローバル時代の国家を超えた経済が見えていなかった。国家が破綻するとは思っていなかった。そこに彼の見ていた時代の限界があったと思っています。

しかし現代でも重商主義は横行しています。お隣の国達にそれを見ます。なりふり構わず金儲け、企業栄えて国滅ぶ。そのことから、国富論はあっても全富論はないと浜先生もいっています。成り立たない時代だと。内向きの政治で政権交代し、慣れない政権維持にキュウキュウとして、ついには 僕ちゃん達の失敗 をさらした前政権は、守りだけの官僚のネグレクトに太刀打ちできませんでした。たぶん現政権は次の選挙にも勝つでしょう。しかしそこから先に顕在化してくる社会矛盾を解決するすべがなく、僕ちゃん達がしたように、国内問題で立ち往生し、良識派とリベラリスト、強硬派、頑迷派、などに政界再編がおこるとおもっています。

浜先生の著作とは遠く離れたことで終わってしまうことになりましたが、お許しください。浜先生の本はわかりやすい経済論です。ご一読を。

追記

日本は、戦後60年をかけて今の状況に至りました。韓国は30年（異論はあるでしょうが）かけての現在です。中国は15年でしょうか10年でしょうか、その短い期間で現在の繁栄に至っております。彼らは日本の果実を奪い取り、成功の道のみを走り続けました。日本は独自の道を失敗だらけで歩いてきて、やっと世界第二位の経済大国となったのでした。その果実を蒸さばぼっての中国の今です。彼ら韓国も中国も、成功だけしか知りません。私達日本には、この 失敗の山 があります。自らの手で築いた失敗の山こそ日本の強さだと思っています。この経験と知見、積み重ねを持たない国に次の繁栄はないとおもっています。日本自身も、果敢に失敗を積み重ねましょう、その覚悟が出来るかどうかで次の時代が決まると思います。

浜先生の本のキーワードの一つが地域でした。商品の生産に国境が希薄になった今、ものづくりには作り手の文化が反映されているように思います。日本人の作るものには日本人の文化が反映されています。ハイテクとか見かけのかわやかさ、価格の安さなんて、わかりやすいものは、もう捨てましょう。高機能デジタル腕時計は安売りショップで充分です。手作り機械式のローレックスには成れません。ギャラクシーはiPhoneの、持つ楽しさはありません。高機能は詰まらない。文化がそこにはないからです。

先だって何気なくNHK教育テレビにチャンネルを合わせると歌舞伎舞踊を踊っておりまして。途中からでしたので内容は充分解りませんでした。どうも兄妹が酒を売りに来たらしい。ところが酒を買ってくれる人が余りおらず、退屈でもあったのか持ってきた酒を飲みたいと言いだします。しかしこれは売り物だから金を払えともう一方が言います。じゃあと懐にあった金を払い、一杯のみます。それを見て、もう一方も飲みたいくなり、金を払うから飲ませてくれろと言ひ、懐から金を取り出し、これをもう一方に渡して酒を飲みます。あとは少しためらいがちであったのですが、金を払えば飲んでいいだろとお互い金を渡して、陽気に酒を飲み、踊ったり歌ったりの大酒盛りになります。

飲んで歌って踊って、そうこうしている内に持ってきた酒樽がからっぽになりました。酒が売れた、空になるほど売れて売り切れだと兄は大喜びします。大もうけだ、さあ金を出して見せろ、金はどうした、さっき兄者に渡した。そうして兄は自分の懐を探り、金を取り出します。それは最初に弟が兄に渡した金でした。なんでこんなに少しなんだ？酒樽は空っぽなのに。二人は首を捻り、考えます。しかし得心できる筈もなく、わけがわかりません。そしてもう解らぬまんま、酔った勢いで馬鹿踊りをしながら幕は閉じて終わります。

なにか、今の世界の混乱はこんな簡単なことも解らなくなって、数字だけが踊っているように思えます。地球とその資源を食いつぶし、数字だけがあっちへ行ったりこっちへ行ったり。そのうち何も彼もが枯渇し、破壊され、馬鹿踊りでも踊ってなきゃ正気で居られなくなるかもしれません。

今盛んに 日本のデフレ が問題視され、ある党など インフレ ターゲットを定め、物価を上昇させ、円安にしなければならない、と主張しています。日本の代表的企業のトヨタが一円、円高になると利益が360億減ると言われると、確かにびっくりします。株も下がり、貿易収支が赤字転落ともニュースでいいます。しかし私達庶民までが円高を斯くまで心配させられなければならないのでしょうか。こんなニュースの傍ら、海外へ行く人は円が強い今がチャンスだからとニコニコいいます。外からやってきた外国人は円が高いから大変だと言います。庶民にとっての円相場はこんな程度でしか直接は関わりません。ガソリンの価格とかも敏感ではありますが。

円相場について、テレビの解説者がしたり顔で言う、円安が貿易立国日本には良いことだ、いや円高のほうが庶民にはブランド品やガソリンが安く買えていいことだというようなことを言いたいわけではありません。

戦後、私達の親世代が何も無いところから懸命に働き、次に私達団塊の世代がそれを発展させてきました。そうして得たGDP世界2位の地位でありましたが、私はそれを小学生低学年のとき、ラジオで聞いた覚えがあります。その時ラジオは ついに西ドイツを抜き と言ってたように記憶しています。私はそれを聞いたとき、子供ながらひどく高揚感を感じました。そして一緒に、西ドイツって凄いんだとも記憶に刻み込まれました。あの敗戦国同士の、そしてナチスドイツだった国が今まで第2位だったんだ・・・。

そこに来るまで、私達の親は大変なインフレとか通貨管理を経験しています。軍票、国債が一瞬にしてただの紙くずになったこと、預金封鎖、新円切り替え、つまりは旧円での貯蓄も消え去って、なかったことにされてしまったということなどの異常事態の後、さらにインフレが襲い、狂乱物価とか鍋底景気、神武景気、高度成長時代とそんな言葉が子供だった私にも聞こえていました。

いや、こんな古い話をしなくても、バブルの崩壊で お金の正体 はわかります。なぜ人はお金を信用するのでしょうか。以前もこんなテーマで一文を書きましたが、お金の信用って何故疑われないのでしょうか。国家がその威信にかけて保障するからでしょうか。本当は 当てにならない と皆がうすうす知りながら使って、貯めて、稼いでいるのじゃないでしょうか。

先日 ムンクの叫び が史上最高値の96億円で落札されました。これは ピカソの87億円を追い越したと言っておりました。へー、ピカソよりムンクの方が高いんだ、とあってしまいます。これもお金のマジックだと思います。

最近、国の外の事情で憲法改正論議が声高に、かつ公然と議論されるようになりました。無理からぬところもあると思います。竹島は取られ、今また尖閣も中国の艦船がきて露骨に領海侵犯を繰り返しています。そんな外圧を逆手にとって、あれは進駐軍に押し付けられた憲法だと、改正を主張します。ネット右翼、テレビ右翼、軍事評論家、世界情勢分析家と、テレビの画面を賑わせて、その声高な主張を聞いていると、今の憲法って駄目なんですかと聞いてみたくになります。元法学を学んだものとしてはどうなんでしょうと聞いてみたい。象徴天皇と九条はさておき、現行憲法は、国民主権、平和主義、基本的人権の尊重の三つを基本理念にしております。

よく道德教育を復活させねばならないと、声高にいう政治家がいます。日本人の公德心が失われたのは現行憲法の性だとも言われます。しかし、いまここではこれらの主張に反論したり疑問を呈したりはしないでおきます。

大学の憲法の講義では、まず現行憲法を非とする立場からは講義は行われませんでした。国民主権に対しての王権主権、または天皇主権、といった明治憲法との対比もあまり聞いた覚えがありません。

しかしかんがえてみると、例え現行憲法が米国からの押し付け憲法であったとしても、明治憲法は欽定憲法でありました。そして先ず、国民は臣民であり、基本的人権、例えば思想信条の自由、表現の自由、結社の自由、通信信書の秘密の保障、信仰の自由などの項目は明治憲法にもありましたが、それは法律の留保の下に、天皇から臣民に与えられた恩恵的権利でありました。確かに現憲法も、基本的人権について公共の福祉という制限はあります。この公共の福祉という縛りが時の政権によって暗に、また巧みに利用されたことが多々ありました。その発想は基本的人権も恩恵的に与えられた権利であるという明治憲法からの発想に引きづられていた感があったように思います。

いまの日本人は公德心がない、我欲とか権利意識ばかりが先行して義務を果たさないとか、政治家はいいます。いやはや、まず隗より始めよと言いたい。

日本人はまず 我慢 するそうです。そして、仕方がない というそうです。権力の側にあるものには、我慢し、仕方がないと自分を納得させて、そこからなお頑張る国民が一番好都合です。ですから基本的人権も、非常に制限された範囲でしか認められてきませんでした。憲法の条文から何故こんな判決が出るのか、理解に苦しむような判決がよく下されていたのです。しかし、新幹線の騒音問題、環境破壊、公害問題、女性の権利、労働者の権利、そういった基本的人権の尊重を主張し続けてきて今があります。それは最上位法の憲法にある権利だからです。

国の在り方も憲法に制定されています。三権分立の国家運用体制は憲法の規定です。それを歪めてはなりません。最高裁長官は内閣が指名し、天皇が任命する、日銀総裁は議会の同意を得て内閣が任命する、国権の最高機関は国会で、内閣は行政、裁判所は司法。しかし、警察は国家公安委員会で行政に属します。警察が司法警察と冠（かんむり）されることがあっても司法ではありません。公安警察というと行政そのもののよう意識されますが。

権利の主張は時に行きすぎて聞こえます。しかし、抑えつけられ、権力になお立ち向かおうとすると、過激にならなければならない時もあるかと思えます。仕方ないじゃないか、今はこうなんだから、と言う科白に騙されてき続けました。例えば今の原発、消費税。そもそも論を言い始めると訳がわからなくなります。しかし、このまま原発を維持し、推進すれば10万年先まで禍根を残します。消費税は先の政権に上げさせて、自分は何の罪もないような顔をした現在の政権こそが、消費税を上げなければならないような国家運営をしてきたんじゃないかなかったですでしょうか。その矛盾から政権交代に至ったと思うのですが、その原因は解決されぬまま、また元に戻ってしまいました。そしてその社会的矛盾を、なお一層拡大させる方向での政策が**ノミクスと持てはやされ、大衆をたぶらかすことに熱心な大マスコミの協力で、今またおし進められています。国家を一政治家のぺらぺらの美学に任せてはいけません。そう考えることのできる国民を、現行憲法は育て上げてきました。現行憲法は今の日本のあり方を決める主権者を育てました。一時の流れはしかたありませんが、**ノミクスが誰のための政策かを今の主権者は見抜けるはずです。一本の苗さえ植えたことのない御仁の、棚田の美しさを語る言葉に真はありません。フィリピンの死の行軍といわれた作戦で、一体何人の人が無為に死んで言ったか、国家として調べようとしなかった政権に、靖国への尊崇の念を語られたくはありません。夫人が南京大逆殺記念館を訪れた政治家から、南京大虐殺はなかったなんて聞くと、鼻白む思いです。

私達は臣民ではなく、国家の主権者として、冷静に見続けましょう。大借金のうえに大借金を上積みし、結局ツケは国民に払わせ、10万年先までの禍根を残す今の政権のあり方を見届けましょう。

現行憲法を維持し続けなければならないとはいいません。現行憲法は日本に、民主主義と経済の発展をもたらしました。日本国民に民主主義とはと教え、育てました。現行憲法を私に精神を私に是とします。

司馬史学とか言われます。半藤一利氏の昭和史、そして、水木しげる氏、これらの人たちをかつて読み漁りました。司馬氏はその小説はもちろん、エッセイ集は司馬遼太郎の考えたこと15巻、すべてを読みました。一言半句といますが、司馬遼太郎の考えたことは、彼の正に一言半句をまで集めた本です。文庫本の一ページに、五～六行の文章を収めてその項は終わるといようなものまで集めて収録している本です。しかし司馬氏の言葉は、なんと力を持っていることか。含蓄が深いなどという域ではありません。その五～六行の文章で伝えたいことを全て伝え切り、かつその内容も大きいのです。力のある本当の作家だと思っています。

半藤氏の語るところは全て真実だと信じています。自虐史観ではありません。昭和史の資料を丹念に調べ、語りつくします。半藤氏は史家と言えいいのか、作家と言えいいのか、元週刊文春編集長にして同専務、さらに日本のいちばん長い日――運命の八月十五日の大宅壮一氏編のゴーストライターでもあった人と言えいいのか。いいかえれば、令夫人は夏目漱石の直径孫です。ですから、その語るところは学者のようでなく、司馬氏のようにのめりこむでなく、事実をはっきりと見詰めた冷静な言葉です。リベラルな見識の人です。それゆえ、一時期ナチスドイツの非道さに匹敵するかのよう報じられた731部隊とか、滑稽談として鼻で笑われたこんにやく爆弾の完成度の高さと、その爆弾の内容の本当の姿を教えてください。こんにやく爆弾はペストの細菌兵器、でありました。当時日本は、毒ガスでは遅れをとっていたけれど細菌兵器はほぼ完成しており、実用段階にあったそうです。半藤氏は、それをサイパン島攻防戦と翌年硫黄島のときの二回、参謀本部では使用を検討し、もうすこしで採用されるところだったと、当時の陸軍参謀本部の中佐なる人の証言を報告されています。風船爆弾に通常爆弾を使用して飛ばしはしたが、そのいずれにも細菌爆弾は装着されなかったそうです。しかし細菌兵器は完成しており、命令さえ発せられれば、攻撃できる準備は出来ていたのです。事実細菌兵器は中国大陸で昭和十五年特殊作戦として決行され、ペストを流行させることに成功しています。ところがこのことをアメリカは知り、世界に非人道的行為として流布され、あわてて陸軍が自重するよう支那派遣軍に求めたそうです。しかしサイパン、硫黄島では使おうとして裁可が下りませんでした。毒ガス兵器では勝っている米軍が、もし細菌兵器を日本軍が使用すれば、直ちに毒ガスをもって報復する準備が出来ていることも参謀本部は知っていました。米国は日本本土を不可避的破壊をしても構わないと思っていました。ですから毒ガスも先制攻撃では使用しないが、報復的攻撃にはためらうことなく使う積りでありました。それを日本参謀本部

も知ってはいたのですが、結局使用しなかったのです。そのことの最大の防波堤は、天皇陛下の裁可が下りなかったことでした。国際的信義を大切にしたいと後にご意向が伝えられたそうです。

細菌兵器に多くを語りすぎました。ついでに、特殊攻撃についてもこの項で、半藤氏は、元帥伏見宮が肉弾攻撃を承認するかのような発言をし、それを受けて東條参謀本部長が特攻作戦を発動させたことも述べています。彼ら統帥部にとって、突撃ラッパで切り込み突撃をするのも、人間爆弾で肉弾攻撃するのもおなじにおもっていたようだといいます。もう狂っていたと。

水木しげる氏は、戦争の坩堝からの証言を当事者として聞かせてくれます。以前も言いましたが、水木氏の隣に父もいたかもしれません。

表題からは遙か離れた文章になりましたが、司馬氏、半藤氏、水木氏をまた読み返しております。

私、この人の伝記映画を見に行きました。鉄の女といわれたサッチャー女史。八十七才と聞いております。テレビでは表題のような彼女の言葉を流していましたが、起こった事態を目で見るのではなく、頭脳で見て、感情に流されるのではなく、論理で考え、結論を出さなければならないと映画の中で語っていた言葉が強く印象に残っています。その時は福島原発事故の真っ最中で、感情論が渦巻いていました。論理的に、頭で考えて判断するの言葉が今一番大事だと、この映画を見たとき思いました。と同時に、

彼ら　　の陰謀でこんな結果になったにせよ、私達はそれを責めてどうこうと言う前に、愚かだった民族として一緒に滅んでいくよりしょうがないな、と頭の隅で覚悟をしていました。たぶん誰もがそう思っていたのではないのでしょうか。放射能は見えませんが、日本全土を汚染してきているでしょうし、アメリカ人のように逃げ出すこともできませんから。

その覚悟とは別に、あがかなければなりません。私達はいいとして、まだこれからの子供達があります。汚染されたこの国で生きていかなければならない子供達がありますから、ただむやみに感情論を振り回し、反対反対を唱えているだけでは解決がつかない。彼らを守るためには何が出来るのか、何をしなければいけないのかを考えなければいけません。そんな視点をすっ飛ばして、原発容認派の首相がうごめいています。豊葦原瑞穂国と口では唱えながら、この　美しい国　を最も汚いもので汚して、なおかつまだ何かの策動を図っている。この自己矛盾に彼は自覚しているのでしょうか。政治家に道徳を説かれたくはない。その美しい理念を語ることで、日本人にどんな犠牲を強いようとしているのかと勝手に思います。彼の政治を喜んでいる人を見れば、誰のための政治か解ります。サッチャー女史もホークランド紛争を戦いました。英国人の血も流れました。そのことに彼女は苦しみ、深い謝罪の手紙を戦死した人の家族全員に、手書きの手紙を送りました。日本の統帥部は誰も自決していません。自決しろとはいいません。責任をとれといたい。特攻で死んでいった兵士に詫びろといたい。現首相はこの国家中枢の末裔。原発推進政党の総裁。きれいな言葉を語る前に、詫びよといたい。その視点のないことに激しい懸念を覚えます。私達は国民であり、市民でもあります。自立した考えで、なにが本当なのかを見極めなければならないと思っています。

イギリスでは彼の人サッチャー女史の業績を巡って、是とする人、非とする人、様々であることが報じられました。当然の事と思います。サッチャー女史は遠い過去の人ではありません。つい先ほど亡くなった、いまの人です。ましてや政治家の頂点を極めた人ですから、その政治行動によって利を得た人、不利益をこうむった人はまだ現在も生きて生活しております。であるならば、彼の人の評価は相半ばして当然でしょう。国を割るほどの違いがあるかもしれません。しかし、それが国民主権であり、民主主義であることもしっておかなければならないと思います。政権を選挙で選択するとき、こっちがいやだからこっちをえらんだけど、そこまでしていいと任せた積りはないぞ、なんてことは出来ません。間接民主主義だからです。任期の間、国民は従うしかありません。われわれの総意が選んだ政権だからです。

総意？難しいですね。どうしてこうも騙され易いのでしょうか。例えばマスコミ。先だって関西の某人気番組、なんとか委員会で、衆議院選挙が違憲という判決が出たことについて、これも人気司会者が、あれはもう直ぐ定年になる団塊の世代裁判官が、思い出作りに違憲、選挙無効判決を出したんだと訳知り顔でにやにやと笑いながら述べていましたが、これはあの外務省機密漏えい事件を不倫スキャンダルで矮小化してもみ消した汚いやり方とおなじだと思いました。立法府は国権の最高機関です。だから司法ごときに縛られることはない、と言う論調でした。ではなんのための三権分立か。そもそも2, 5倍の格差が正当なのか。票の格差がいやなら鳥取に移住すればいいんだなどという、出演していた憲法学者の発言がありましたが、もはや論ずるに値しない馬鹿馬鹿しさです。それに加えて、国会が立法府なら、法をこそ守れ。国民だけが法に縛られるのであって、立法府は国権の最高機関だから、自ら作った法には縛られないのだとも言うのでしょうか。国民主権を無視した論であるといわなければならないと思います。ましてや一票の価値の格差が違憲である状態で、改憲など言い出すのはおこがましい。国民の意志が正しく反映されていない議会構成で三分の二以上になったとしても、それは国民の意志ではないのですから。立法府の怠慢と奢りを擁護する似非憲法学者の妄言を大マスコミが宣伝します。そして、素直にそれを聞き、盲従させようとするのが第二の権力です。眉に唾しましょう。

横道に逸れました。サッチャー女史を全面的に肯定するわけではありません。彼女の政策は、いわば小さな政府の保守主義でした。ですから切り捨てられた人たちは、サッチャー革命を今も嫌悪しております。私も逸れに同調はしません。しかし政治は決断でしょう。国民の総意がそれを選べば、今の民主主義システムは、それで動いて行き

ます。そしてそれが国民の意志と違ってくれば、政権を降りなければなりません。国家の運用を決めるのは国民です。

だが、今の政権はおかしい。もっと率直に語らなければならないと思います。例えば、詐術に長けた言い方、TTIPには国益が守れなかったら参加しない、なんて、まるでそうじゃありませんか？奇妙なロジックの公約です。憲法改正、まず96条から、これも詐術でしょう。憲法改正に慣らすため、また容易に憲法を改正できるようにするため、そして、国民の目をごまかし、憲法の基本的精神を思うまま、容易に変えられるように外堀を先ず埋めるやり方でしょう。底意がみえます。一票の格差是正のため、先ず0増5減を、というのも2倍近くの格差を残して自党に有利な選挙法改正を行うということでしょう。いかなるロジックを駆使しようと説得力はありません。憲法違反判決は不当といいながら、それを逆に党利党略のやり方に利用する、うまいやり方です。ましてや反日の外圧を契機に憲法改正を言い出すしたたかさ。東北大震災を理由に、国土強靱化を謳い、第二の日本列島改造論。また誰かが喜び、そのしわ寄せを国民に押し付ける。

そういと、妻は、じゃあなたは誰が首相になったらいいの、と問い返してきます。ちょっと言いよどみました。残念です。まことに残念。彼の人健康なら。与謝野薫、この人です。

まとまりませんでした。笑点 の答えを最後に。

物価が上がると庶民が困る。税金上がると、もっと困る。

憲法改正が声高に言い立てられている今、憲法について、まず基本中の基本を押さえておかなければなりません。憲法は最高法規であるといつてすましてはいられません。憲法は、実は97・98・99条が大切なのです。

97条

この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである。

と述べております。

98条

この憲法は、国の最高法規であつて、その条規に反する法律、命令、詔勅及び国務に関するその他の行為の全部又は一部は、その効力を有しない。

99条

天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ。

長い引用でしたが、基本的人権、最高法規、そしてこの憲法をまず誰が尊重し擁護する義務を負ふのかがここで述べられています。まずまもらなければならないのは、国家権力のほうです。国家権力は国民の基本的人権を侵してはなりません。なぜならそう決めている憲法は最高法規だからです。そして、憲法は国家権力とは何かを述べています。天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員とあります。これが国家権力というものです。国家権力と言えどもっと秘密めかして、おどろおどろしいものかと想像されますが、秘密警察も憲兵も、参謀本部、その他全て公務員であります。

主権在民、または国民主権ですから、国家のあり様は国民の選択によって決まるとなっております。国民は例え間接民主主義であっても、国会議員は選挙で選ぶことが出来ます。時の総理大臣だって、落選すればただの人です。国権の最高機関を構成する議員は選挙で選ぶことが出来ます。しかしその権力で行った政策の可否も責任も問えず、やめさせられず、ましてや罪にも問えないのが公務員です。彼らは身分を保証されております。なにをやっても無責任でいられます。主権在民の、つまり国民主権の及ばないのが公務員です。第二次世界大戦のあと、国家機構で無くなったのは陸軍省と海軍省だけでした。あとは明治政府が作ったままに残りました。その権能も、無責任体制もそのままでの形です。身分保障も同様です。国会も彼らを問えないのですから、彼らの権限は絶大だといわなければなりません。彼らにとって、選挙で代るかもしれない国会議

員などものの数ではありません。たとえ政権交代があっても、首をすくめてやり過ごせば、また思うようになると思っているのがかれらです。公僕とわざわざ位置づけなければならないのが、官僚といえます。国家は彼らが作っています。これが日本型民主主義国家機構のすがたであろうと思っています。ですからこそ、お坊ちゃんの改憲遊びは恐ろしい。まず私たち自身の意識をかえなければ日本は変わらないと思います。米国では、政権交代があれば公務員の三分の二が交代するそうです。米国の国家公務員は民間にいたときの三分の一の給与になっても、母国をよりよくするためにと、公務員になります。彼らのようなスタッフがいてこそその国家機構でしょうし、民主主義だと思えます。改憲を論議するより国家機構の改変を、そして、国家公務員の首を切れる国会を、公務員の人事権をもった内閣を、これらを実現して、主権在民の実を果たして欲しいとおもいます。

何故今憲法改正なんなのでしょう。この前の衆議院総選挙で、国民が望んだ最重要政策は経済でした。その意味では今の政権は一応表面だけでも成功しているといえましょう。しかしそれは株価と為替レートに集約される、マスコミ受けする派手な演出でしかありません。それでもいいです。経済の方は一応気が上がりました。しかし、前回の選挙のもう一つの注目点、外交はどうなったのでしょうか。はっきりいって、竹島、尖閣はどうなったのでしょうか。そのうえ北朝鮮問題が起こり、日本を取り巻く環境がひしひしと脅威を感じさせるようになりました。その脅威をもって、かの暴走老人は、このままでは日本は滅ぶといいました。黒船が来たぞ、国が滅ぶとなった頃のように、まるで攘夷論が復活してきたような観さえあります。それをあのおぼっちゃまが尊王に結び付けようとしているかに見えます。報道はまちまちの扱いをしましたが、4月28日の主権回復式典において、席を立たれた陛下に突如、天皇陛下万歳が三唱されました。おぼっちゃま首相の万歳をする姿がネットでも見られます。これが彼の言う 日本を取り戻す、美しい日本、の有様でしょうか。天皇陛下は一瞬立ち止まられはしましたが、そのまま振り返りもせず、立ち去られたとか。英明にして賢明なお振る舞いでありました。昭和天皇のお振る舞いを見るにつけ、どうしてあのように賢明なご判断が出来たのかと思います。今回の平成天皇のお振る舞いも、まさに賢明でありました。天皇は存在するだけで、政治的影響力は何よりも大です。ですからこそ、憲法は象徴天皇と規定しました。そのことで一番ほっとしておいでなのは、天皇陛下ご自身ではないかと思います。ところが、憲法が厳しく禁じている天皇の政治利用を堂々に行ったお坊ちゃま。陛下のご本意ではないのに政治に引きこもうとするのは、やめたほうがいいと思います。

それにしても、一体なぜこの時期に憲法改正なんなのでしょう。国民の誰かが発議したのでしょうか。世論調査こそすれば、憲法改正に賛成反対は答えるでしょう。しかしそれより先に、変えなきゃと言い出しているのでしょうか。そう言い出したのは国家権力の側にいる人達ばかりじゃありませんか。アメリカ占領軍の押し付け憲法だ、この憲法が日本を台無しにした、美しい日本を取り戻そう、などなど。参議院選挙を意識してか、今の権力政党の候補者が広報車でこんな喧伝文句を言ってまわっています。しかし、その声はむなしく聞こえます。それは国民の間から沸き起こった切実な要望だとは思えないからです。どこか仕組まれた、芝居がかった演出のように見えます。憲法改正、自主憲法の制定は、かの昭和の妖怪氏の悲願でありました。それを孫が達成し、大宰相の名を残したいという野望しか見えないのです。彼らの権力への執着は、とても私には解

りません。憲法改正だって、まるで詐術の96条改正から言い出して、鶴のようです。権謀術数、権力闘争に明け暮れた公家たちの手業に見えます。こずるい言い回しで国民の目を目くらませ、権力に都合よく改正してやりましょうという意図や下心が見え隠れします。国防軍と呼び変えて、また国民を死地に赴かせ、自分は安全な地から遠く眺めて、立派立派と勲章を与え、我が事成れりのご満悦のなられるのでしょうか。権力者の側から道徳、倫理、価値観を説かれたくはありません。八月15日までは聖戦と説き、負けては間違っていたといい直す。教科書に墨を塗る。わたしも経験してきたことです。

あのおぼっちゃまは、何故9条とは言わないのでしょうか。改正したいのなら、先ず何を変えたいかをいわなければなりません。またあの暴走老人は何故改正したいのか、どこを変えたいのか。この国はもたないとだけ言って、文章が日本語じゃないとは言っても矢張り9条を変えてこうしたいとは言いません。大坂の市長は、自分の体に刺青はないと上司に確認させたうえで、市長の押し付けてきたアンケート調査に人権侵害だと答えなかった職員を、明らかにみせしめとして窓際に追いやりました。そしてこれを裁判に訴えると、この人事は管理者の人事権の範囲であると言い切りました。これはどうなんでしょう。彼は弁護士ではありませんか。法曹人ではなかったのかと疑ってしまいます。権力の側にいる人の、人権を踏みにじるいいかたそのものです。こんな人が憲法改正を叫んでいます。どんな憲法にしたいのでしょうか。

暴走老人さんも、文学者でありましょう。それなら、なぜあかも自分を肯定できるのかと勝手に思います。文学者は自分が表現したものを自分で検証できます。自分がなんの抵抗もなく肯定できるものは、どんな精神風土からつちかわれたのかと検証し、批判し、問い直すことから、文学の感性はその時代を映し出すことができるようになるのだと思っています。そこにどっぷりつかっていることを意識せず、自分をなんの抵抗もなく肯定できる人は文学者にはなれません。だから、あの早やさで筆を放り投げ、政治家になったのでしょうか。自分の書いたものに酔いしれ、酔っていることを装ったままで自決した人が三島でありました。彼は自覚した文学者でありました。おなじ、自己を肯定した文学者でも、暴走老人とは次元が違っているのではないかとと思っています。しかし三島の豊穡の海も、若くして書いた 午後の曳航 と 剣 、鹿鳴館 をもう一度なぞった遺書でした。文学者は自分の表現したものを思想として客観的に検証できるのです。まずそこからはじめなければなりません。

なにかしらのムードが醸しだされています。また戦前の昭和が来るのでしょうか。司馬遼太郎氏が言った、日本史の中でも非常に特異な時代が。吉田松陰から始まって高杉晋作、木戸、山県等の長州人の一種狂信的な気質が、薩摩を政治の面で圧倒し、国家

権力の中心に強固な官僚制を築き上げました。上意下達、絶対服従の軍隊を作ったのも彼ら長州人でありました。恐れ多くも の一言が発せられると皆が直立不動にならなければならないと、天皇陛下を政治に取り込む手法を用いたのも彼らでありました。明治維新後、吉田松陰、佐久間象山の名誉を回復し、坂本竜馬を歴史の闇に葬ったのも彼らでありました。

いまリベラルの寄るところがありません。僕達の失敗は大きかった。そして今一度の、僕ちゃん達の失敗はリベラルを葬ろうとさえしています。政権を運営することとはどんなことか知らないまま交代して、僕ちゃん達はその実力通り失敗しました。私達はどこへいけばいいのでしょうか。まだ一部、心ある人材は見えます。その人たちが糾合してくれることを願っています。

未来の見えない今、現行憲法を肯定しますが、それでもなにか違うものも模索したくはなりません。逆行しようというのではなく、資本主義に拠って立つ現行憲法の先はどのようなかとおもうからです。

民主主義、自由主義の反対語は何でしょう。そう考えると解らなくなります。民主主義が最先端のイデオロギーであるのはわかったことです。ですから民主主義が否定してきた過去のもの全部が反対語と考えればいいのでしょうか。しかし社会が経済によって成り立っているなら、法もその社会制度の表象であるかぎり、その支配から逃れられません。基本的人権も美しく宣言されていても、資本主義経済にとって好都合なゆえに規定されているといった性格のものも散在します。移住権、職業選択の自由、財産権などがその性格のものと思っています。その土地に縛られ、代々の職を受け継ぎ、税を納める、明治以前の社会構造を見れば説明の必要もないことです。そして、労働力を資本のもとに安価に集め、また集中した人口を消費者として利益を追求する資本の論理が貫徹されます。しかしこの原始資本主義を是正しようとして生存権、参政権、思想信条の自由、団結権などが獲得されて行き、修正資本主義へと移って行きます。ところが今時代は独占資本主義、そして国家独占資本主義経済へ向かっています。韓国などその例だと思えます。かの国は破綻して当たり前ではないかと思えます。経済格差の質が日本やアメリカとは明らかにちがうからです。中国など論外の国です。共同体としての呈をなしていません。欲望の体系としての資本主義にも、それゆえの倫理は存在し、それに反すればその資本は崩壊するからです。資本の倫理を忘れて、国家として欲望を追求すれば、国家がつぶれます。外部からか、内部からか、崩壊の影は見えている気がします。

今時代が予見されます。個々のコミュニケーションがSNSとかで、ごく自然になりました。ひとりが発信すると誰かがそれに共感する。原発反対なんて政治スローガンでなくて、あるパフォーマンスが路上で突然一斉に行われる。フラッシュ・モブという現象だそうです。大量生産大量消費の資本主義社会から逸脱し始めた現象だと感じています。全く新しい感性の時代が来ようとしているのではないのでしょうか。アートとしてのパフォーマンスが、号令を懸け、命令して統率することもなく、いちどきに整然と個々の意思だけでおこなわれる、それがフラッシュ・モブです。わくわくしてます。なにかが変るかもしれません。

もちろん喫茶店ですから週刊誌とかマンガしか置いてありません。それは週刊ポストに掲載されていたもので、あの 風たちぬ を最後に宮崎駿氏が引退されることについての文章でした。

半島一利氏は、とまで書き進んで、はたと筆が止まってしまいました。私にとって、半島一利氏は戦前の昭和史の先生でした。戦後まもなく生まれた私にとって、戦後の昭和は自分の生きてきた歴史でした。小学校の教科書に、なぜか墨が塗られたことも知っています。この善通寺に、警察予備隊 が来たことも、それが保安隊になり、自衛隊にと名称が変わったことも、私の生きてきた昭和です。いままた開催される 東京オリンピック も見えていますし、平成天皇のご結婚式の馬車のパレードも、自分の昭和の出来事でした。だから戦後の昭和はわかります。しかし、知らない昭和、戦前の昭和を教えてもらったのは半島一利氏からでした。

その意味では司馬遼太郎氏は、以前にも書きましたが、父と同年の生まれで、まるで父に教えてもらっているように、この 日本 の事を追いえてもらいました。この国の形、全6巻 その他、司馬遼太郎が考えたこと 15巻、といったエッセイ集、小説、ほとんど拝読しました。

だが、宮崎駿氏のアニメは、アニメだけに縁遠く、子供に教えられるまで知りませんでした。それだけに、この人の後半の作品は、日本の美しさを抽出しているようで、ストーリーとかではなく、場面場面にかたられる景色を見てしまいました。氏はデジタルになると、効率よく仕事は進むが、一本一本の線の 滲み がなくなったと語ります。トトロの世界の緑がなくなり、風たちぬ の空の青さがなくなった、と言います。行き止まりの日本に危機感を感じる。その言葉に、重ね合わすように芥川の 漠然とした不安 を私は思い出しました。

宮崎氏は言います。昭和30年代の、経済の発展のための、荒ましいばかりの自然破壊はほんとうに自然を完膚なきまでに打ち壊してきた、そして宅地開発によって在来の草むらが刈り取られ、地除草剤がまかれたりすると、そのあとに生えるのは帰化植物ばかりだと言います。トトロの緑は今の人には描けない、毎日見ている緑は、あのころの緑とちがういろですから。トトロは他の国へ行ってしまったかもしてません。

それは司馬遼太郎氏の、バブル期の日本への、

先祖伝来の土地を投機の対象にするとは何事か、金もうけのために美しい自然を破壊するとは何事か。経済成長はもういないから、これ以上自然破壊をしないという国民的合意を形成し、大切な国土を守らなければならない。やればできるし、今ならまだ間に合う。やらなければ、われわれは子供や孫の世代にお詫びのしようがないじゃないか、

という言葉に重なります。

私たちはどんな時代を実現してしまったのでしょうか。いまこの行き止まりの日本に。

あまりにも重い人たちのことを、深みの足りない文章で書いてしまいました。いまの日本の

現状は、やはり経済優先の論理がまかり通っています。防衛論議もそうです。だが、右傾化する日本に、中道の人たちの論理がない。彼らに反論する理念がない。戦後68年間、他の国の人たちを自分たちの銃弾で殺したことのない日本の、この平和の理念が、それゆえ侵略されるんだという言葉に負ける。集団的自衛権も人事をいじって、解釈を変えるなど、なんという姑息さ。憲法9条をまともに変えられないとなると96条をまず変えようというペテン。やはりナチス憲法のように、国民の知らぬ間に、いつの間にかずるずると変えられていたなんてことになりそうです。なぜあの人はまともに国民の前で、堂々と議論しないのか。あの厄介な隣人に、右傾化と非難されることを恐れているのでしょうか。その隣人の恫喝への反発が、あの人を後押しする結果になったというのにです。ならば、選挙の時に言ってたように、あの隣人たちへ堂々と反論し、尖閣防衛のための措置もとればいい。海保が海上で侵入者を逮捕できるように法改正を行えばいいのです。慰安婦も歴史的に見れば、あのようなことはなかったと言いなさい。そう反論すると公約したはずでした。やはり公約は薄っぺらな紙切れ一枚のペラペラでしかないのでしょうか。あの劇場型の政治家の後継ですから。

ぺらぺらと饒舌な、あまり訳のわかってなさそうな横文字を口にする あの人 と、今の政権党への悪口ばかりになりましたが、なにか恐ろしい方向へ、また知らぬ間に連れていかれそうなきがしてならないのです。

なんの拍子か、ひょいと坂口安吾氏の事を思い出しました。この人の有名なのは墮落論ですが、これとてデカダンスと称される、世の中の常識を逆手に取って、どうだ、俺の言ってることも本当だろうと破壊的な見方を表したものと思っています。しかし、一面の見方とはいえ、それが本当なのだから始末が悪い。そんななか、この人とは全く対極とおもわれる、あの小林秀夫氏とも深い親交があったらしいことは、びっくりです。それも相当認め合っていたようで、安吾氏の文章の中にも小林秀夫氏の言が引用されたりしています。政治家なぞ、なんの独創性も持たない、支配管理することしか知らないやからだと小林氏は言っているがと、安吾氏の戦争論という文章に書いてあったはずです。今はこの本が手元にないので、間違っておればおわびします。もちろん、小林氏の言を引用した部分は上記のような悪態ではなかったとは思いますが。

墮落論ではなく、戦争論の中で安吾氏は靖国の前を路面電車で通りかかると、全員起立させられ、遙拝しなければならなかったというエピソードを書いてありました。戦争論の趣旨は、戦争が人類進歩に大きく貢献している面もあるという主張だったと思います。唯我独尊で、閉塞した鎖国状態の日本を今度の敗戦は打ち破り、世界へ解放した。人々を家から解放し、自由を与えた。天皇は人間でいいじゃないか。国家体制を一部の人間に都合よくあらせるために、天皇は祭り上げられていただけだ。上古の時代は天皇も権力を握って権謀術数を駆使したりしたが、撰閲家すら自分の都合のいい天皇を擁立しながら、自分は天皇に仕える身だと信じて疑わなかった。こんな主張もあったと思いますが、あの低視聴率を誇った大河ドラマ、平清盛は、その一面を如実に映像化しておりました。ちなみに、こんなおぞましいことが、と思える内容もあの大河ドラマにありました。自分の気に入った女を幼少期から養い、ほどほどになると、愛人に直すというくだりです。しかし、これは昔よくあったことのように、源氏物語にも同じことが書かれています。紫の上のことで、他にも散見されたと思います。

今の常識とは違い、当時はよくあったと擁護することがこの文章の趣旨ではありません。靖国と政治家の事です。

チンチン電車の中で、全員遙拝させるこの靖国も、日本中の神社も、祭られているのは誰でしょうか。逆に言えば、誰は祭られていないのでしょうか。百姓農民が祭られている神社は、調べた限り、一社もありません。よく飢饉時に百姓一揆をおこし、百姓の困窮を助けた人たちが祭られていたりするのではと思ってました。神社にそれはありません。あるとすれば、義塚、義人塚とかで、権力にはばかれる故、密かに百姓の中だけで祭ってきておりました。神社も神も、権力側に都合良く作られてきておりました。政治は権力の側にあるものに都合よく、民はそれに従わされるのみ。安吾氏は慧眼でありました。

ただし、靖国と神社の事は、私が膨らませたことで、戦争論にはありません。どうかもう一度、敗戦間際の人々の言を読んでみてください。反戦でもなく、反体制でもない、人間の語る一面の事だと思っていますが。国家権力を作るものの、国のためという言を道徳とってははいけません。

人類の進歩は人類の破滅を速めているだけ？

紀元前と合わせて、人間はどれぐらい生きてきたのでしょうか。中国は6000年の歴史と言ひ、韓国はもっと以前からの歴史を誇っています。エジプトは4000年でしたか。日本は2700年ほどと思います。

もちろん人間を猿人以前猿人後、原人、新人とか考えてもいいわけですが、今は一応文明をもち始めた時からと考えると、旧石器時代からとすると、ひとが人らしく背暮らし始めた状態からに設定できると思います。くどくどしい言い方になりました。

なぜそんな言い回しになったかという、人が自然を利用し始めたのがこのころからだと思うからです。それまでも当然に自然からと、地球からその果実をもらって生きては来たはずですが、自然と地球に積極的に働きかけ、そこからの恵みを獲物と考え、奪い始める行為を当然にし始めていると考えたからでした。そう考えると諸説あるでしょうが、約250万年前からということになります。とんでもない時間を人間は生き抜いてきたと思います。しかし今私は終末論を述べようとしているわけではありませんが、50年先が見えません。100年となると全く信じられない気持ちになります。人間はあとどれほど生きのびられるのでしょうか。200年なんてとても無理な気がします。私はその先を見ることは出来ませんが、子供の先の子供は50年先を生きているでしょう。しかしそれが見えない。なんとも恐ろしい事です。

日本は清い国だとおもいます。たぶん奇跡の国じゃないかとも思います。四季があって自然は豊かで、水はきれい。世界に類のないほど植物は多種で、海の豊かさは誇れるほどです。そこに住む人は勤勉にしておだやか。その清い国日本は、何度も試されてきました。自然災害、産業公害、天候異変、上げたらきりが無いほどです。まして、世界で唯一の原爆被爆国です。そして自分の手で日本を福島原発の放射能という、世の中で一番汚いもので汚してしまいました。何かの実験場とでもいうのでしょうか。それでも生きています。今日の連続が明日なんでしょう。その翌日も その次 なんだと思います。そうやって過ごせば400年ぐらい直ぐ経ってしまい、今は過去になっているわけです。ですが、そう上手く行ってるのでしょうか。今から先は崩壊の過程ではないかと思えます。

あの産業革命以来、人は自然や地球の果実を得て生活してゆくことをないがしろにし、自然と地球から収奪して我が物にして生きるすべを選びました。自然の恵みさえ人間の浅はかな猿知恵でコントロールできると思い込み、化学肥料や温室栽培、果てには遺伝子組み換えに手を付けています。反面自然農法で育てるほうがいいと選択する人もいます。しかしこれからの人口爆発は、地球温暖化と足を並べて食料危機を現実にしようとしています。

また地球の資源を取り尽くさんばかりに、その争奪戦を争っています。私たちはそれを享受し、あまりに豊かな生活をしてきました。その今の私たちのむさぼりが、将来の子供たちの分まで撮り尽くしてしまうことにつながっているとは、思いをいたしておりません。次の時代もこうだ、次の時代は次の時代で何とかするだろう。これは無責任です。次の時代は何とかなっても、地球は限られています。じゃ、火星から持ってこようなんてビジョンを建てる人もいますが、笑っちゃうほど絵空事です。これから起こることの現実の前には、たとえば食料生産も、つまり

は農業のことですが、化学肥料と農薬の農業も、工業の手法を取り入れた工業団地化した栽培法も、そして自然有機農法も全部間に合わないと思います。また工業生産が資源を消費し尽くすことは目に見えています。人口120億の前にはすべてが足りない。科学の進歩は素晴らしい未来をもたらす、人類の終焉を早めることに成功しつつあると思うのは妄想でしょうか。

ある本の帯に、利率0、利潤率0、資本主義の終わりとありました。その本の内容は多岐にわたっていますので言及しません。結局資本主義は人間の欲望を野放しにすることだと思っています。人の欲望を吸い込んで、資本は自律的に肥大化しようと動きます。その結果が今、利息0利潤率0の経済をもたらしています。なんて皮肉なことか。資本を育てるためにのみ、国民経済はある。これが今の日本の行き着いた果てだと思えます。国民全体の貯蓄に追いつこうとしている国の借金、そして企業の膨らみ続ける内部留保。なんという時代を私たちは実現してしまったのかと思っています。

実はこう書き進めながら、考えがまとまっておりません。資本の事はまだほんの一部のような気がします。人類の進歩が人類の終わりを早めているという思いがしているということです。田舎爺の妄想とたわごとです。

田舎親父の妄想はまだ続いております。

ついこの前、NHKでタイマグラばあちゃんというドキュメント番組を放送しておりました。岩手県の山麓に約十軒の農家が入植してきました。東京オリンピックの時のことです。それが二十年経つと村に起こっているのはタイマグラばあちゃんのご主人だけの一軒になっておます。そこへ若い人が子供を連れて、新しくやってきます。それが昭和六十三年。その年、はじめて電気が通り、テレビが見られるようになります。しかしおじいちゃんはもう相当の高齢で、おばあちゃんもテレビを見る習慣がなく、あまり見ません。一日中、米のできない畑で働き、ジャガイモと蕎麦、大根に大豆を作ります。米のできない畑で一年自分たちが食べて生きて行くためのものを作らなければなりません。おじいちゃんが生きていたときの場面で、おじいちゃんが何か小さいものをコリコリと、これも小さな包丁で何かを掻き取るというか磨くというようなしぐさをし続けています。ほんの指先ほどの大きさのものです。石ころのも見えます。一つ終わるとまた小さなものを拾い上げ、コリコリ寡黙に続けます。おじいちゃんは番組全体でもほとんどしゃべりません。この場面から2年ほどして亡くなります。92才だったか、4才だったか。おじいちゃんの剥いてたものは、小石より小さいジャガイモでした。人にあげるものはきれいなものを、自分で食べるのは指先ほどのものさえ捨てないで大事に手をかける。そうして剥いたものを紐に通し、極寒の外に吊るして水分を抜き、乾かします。寒い時は寒い時の仕事、暑い時は暑い時の仕事、と生きてゆくためにジャガイモを干し、豆腐を干します。夏の仕事で大豆を作り、冬に豆腐を作り、それも干して保存食にするのです。その豆腐を作ったときの最初の汲み上げ豆腐がおじいちゃんの一番好きな食べ物で、相好をくずして食べます。こんな彼らに言葉はありません。極寒の山里に一軒だけ残って自給自足の生活で、何か語ることがあるのかもしれませんが、語りません。おじいちゃんが死ぬ三日まえに、自分で自分の下の事を済ませ、もうこれで終わりだと言ったとだけ、おばあちゃんが語りました。そのあとは一人で何もかもをせねばならず、夏の畑仕事、冬の味噌作り、蕎麦の収穫、粉ひきとこなしていきます。乾したじゃがいもは、これも粉に挽いて団子汁にして食べるのです。美味しいのでしょうか。美味しいと言います。

生活に必要なものは電気だけ通っています。冬に水が出なくなりました。おじいちゃんが自分で引いた給水管を、雪の手も凍る中、おばあちゃん一人で掃除に上ってゆきます。継手継手を点検し、最後の取水の湧き水へは長靴で入ってゆき、取水口を持ち上げ、手入れします。誰もしてくれるものはなく、水は必要だから、杖に頼っても急坂を上がらなければならず、手が切れそうな思いでも、水に手を突っ込まなければなりません。ただ、薪だけは死ぬ数年前から、おじいちゃんが何年分も切って蓄えておいてくれてくれました。自分が死んでも不自由しないようにと、それだけの思いで九十近くの老体が木を切って蓄えたのでした。おかげで冬が越せるとおばあちゃんが言います。

おじいちゃんが死んで二年あと、もともと悪かった心臓病でおばあちゃんはふもとに降り、一年して亡くなりました。

世の隅で、語るべき言葉もなく、人に見られることもなく、輝かしいことなど微塵もなく、

自分が生きることだけで精一杯で一生を終えます。大半の人は皆そうです。世の片隅で、生きることに精一杯で終わります。

この国がいま試されているのではと

式年遷宮についてですが、この伊勢神宮、何時建てられたかご存知でしょうか。もし何年とお答えになられる方がいらっしゃれば、それはたぶん違っております。神宮は2000年前に建てられたのだらうと推測されて。そして式年遷宮の制を685年に決めたのが天武天皇で、多分それまでも式年遷宮は行われていたのですが、文献上残っていて確かなことはこのことです。こんなことは単なる雑学で大したことではないのです。日本人はこの式年遷宮を決められた時以来、ずうっと続けてきました。ざっと1350年でしょうか。20年に一度壊しては新しくを繰り返してきたのです。

一方、世界最古の木造建築、法隆寺は1400年前から壊さぬよう、焼かぬよう、じっと大事に守ってきました。屋根裏のごみ、ほこりさえ、国宝かもしれないと言われております。

片方は壊して建て替える、もう片方は壊さぬように守り抜く。これをずうっと続けてきたのは奇跡といえるのではないかと思っています。

そして、神にも仏にも祈る日本人もです。

さらに天皇陛下の即位の礼も、唐の様式で行われているようですが、中国にはもう残っていないのです。

こんな日本が、最先端技術を開発し続けており、またノーベル賞受賞者を何人も出してきました。

古い手仕事の伝統と、最先端技術で作り出されるさまざまなものが混在し、せめぎ合うように見えながら調和して存在するのが日本です。

それやこれやで奇跡の国日本とすることが出てきました。

マックスウエーバー氏のいう、資本主義の担い手としてのプロテスタントが、正直、儉約、誠実にして有能であるゆえ資本の蓄積が起こったというのなら、これこそ日本人の特性ではないでしょうか。そのうえ他を思いやる心も持っています。それが一億総中流の資本主義を作りました。たぶん一番成功した資本主義ではなかったでしょうか。だがそれを壊したのがグローバリズムという欲望の固まりでした。日本人は自分の手でコツコツと技術と先端科学を築き上げてきました。それでもってバブル後の不毛な20年を生き延びてきました。それは自分の手で作りあげてきた経験が土台にあったからです。それがなければ日本自体がバブルで崩壊していたと思います。日本を模倣して奇跡の繁栄をした国が脆いのは模倣だからで、自分の手で何も作ってこなかったからです。あの国ももう一つの国もその意味で、反映し続けることは無理だと思っています。世界の生産工場には成れても、開発センターにはなれません。しかし日本もグローバリズムのなかで翻弄され、格差社会だ少子化だと問題を抱え込みました。日本の資本も、その欲望はどことも一緒です。資本は人から離れ、資本の原理を貫きます。資本は自立して肥大化を目指します。資本が社会の中のものだからです。出資もしていないのに、ニュースの株価を一般人が見て一喜一憂します。株価が上がれば消費さえ伸びます。一般人が金を買います。バブルの時はNTT1株をどれほど欲しがったか。その要請に応えなければ、資本は衰退し、消えてゆきます

。成長し続けることが生き延びる道だからです。

しかしアングロサクソンが作り出した資本主義は今行き詰まっています。人口構成で多民族国家を統合し、それで人口資源を保つことで資本主義を維持しているのがアメリカだと思っています。あの国は欲望のチャンスが転がっており、それを掴んだものがアメリカンドリームを達成します。しかしそんな人はほんのわずか。だれもがビルゲイツやスティーブジョブズにはなれません。ゴールドラッシュに走る人たちの国です。いまはシェールガスラッシュでしょうか。中国の権力者は鬼の国です。その鬼に怯えて生きてきた餓鬼と亡者の国が韓国です。日本は日いずる国と言い放って、鬼の国に対峙してきました。

その国がいま試されているのではと思っています。福島危機を身内に持ちながら、二度も核に汚染され、バブルの後の停滞の20年で資本主義経済の結末を世界を先駆けて経験し、資本主義のその先を見通すことが出来るか、試されているのではないかと思えます。たぶんできると思います。日本人は貪らないからです。貪らない経済を築けると思います。それでGDP世界6位ほどに低落しても、そのほうが生きやすい国になるのではないのでしょうか。

政治は結局権力を揮うことです

政治は結局権力を揮うことです。憲法は国民主権、平和主義、基本的人権の尊重を三大原則と謳っています。政治の最終決定は国民の意思に依るとなっています。しかし権力は結局、権力に立ったものの都合のいいようにしかふるまわないものなのだを知っておかなければなりません。いま権力はなにかおかしいと思いませんか。そして言論人も報道もおかしいと思いませんか。大塚久雄氏をもう一度読み直しています。

隣国2か国と関係がおかしくなっています。その議論に喧々諤々となっているのは毎日の事です。明日アメリカの仲介で初めての首脳会談が行われるようですが、その議論は何かおかしいと思っています。日本に難癖をつけてきたのはあっちの方。日本はまじめだから、難癖の中身に真摯に向き合い、それは違うと抗弁に必死です。うまく土俵にのせられ、昔の因縁付けに目をつぶったことのしっぺ返しをまた受けています。そもそもそんな因縁付けにまともに向き合う必要なんかあるのでしょうか。あの国は自分の国内事情で、自分の保身のために、国民の目を日本に向けさせただけの事です。だから中身なんかまじめに議論する必要はなく、じっと耐え、あの国とまともに向き合うなんてしなければいいのです。しっかり立って、あれらの国を抜きに、それ以外の国と真剣に連携し、互いに反映する道を探せばいいのです。日本を標的にしなければならぬ事情で、かの国2国は滅んでゆきます。自壊してしまいます。巨大な欲望の国は膨らみかえった蛙の腹のように、自分の欲望の大きさと腹がさけます。小さな国はもっとひどい。かの国は自分の嘘を、自分で嘘と知りながら何度も叫ぶうちに自分でも本当と思い違いをして真実と信じ込んでしまった妄想の国です。その情念が自分で自分の首を絞めています。しかしその手を放せばじぶんが滅ぶとは知っており、死にそうになりながらなお締め付けなければならず、いま息とだえようとしている瞬間を迎えようとしています。できるだけ離れましょう。そうしておきましょう。そのほうが賢明な態度であります。

私たちは丸山真男氏を超えられたか

あの新宿争乱の中にいたものとしては、何時も引っかかっています。それが私たちは丸山真男氏を超えられたかということです。そしてその丸山真男を克服したと、多分自分ではそう思っていたら人物は、吉本隆明氏ではないかとおもっています。

日本に革命はあったか。日本に、時代を破壊し、既存権力構造を完全に破壊した事態はあったか。赤でもいい、白でもいい、そんな出来事があったかと考えています。権力の担い手が完全に変わったと言える事態の勃発を考えると、それはたぶん終戦の時だけではないでしょうか。私たちはかつての生まれながらの権力者ではありません。生れついでに土族でもなく、財閥の御曹司や公家や貴族、ましてや皇族でもありません。女性参政権は戦後からでした。終戦とそのあとのことは、与えられた革命だったかもしれないと思います。それを虚妄と言う人もいます。現行憲法は押し付けられた虚妄だと。しかしその虚妄にかけると言い切った人が丸山真男でした。

大日本帝国が復活するぐらいなら、わたしは戦後民主主義の虚妄にかけると言い切りました。

いま、日本会議という団体があります。そのメンバーのそうそうたる面々を見て、なにか空恐ろしい思いをするのは私だけでしょうか。日本を取り戻す、のスローガンがここから出てきているとしたら、あの人の後ろにあるものが、うすら寒くみえてきます。その薄気味悪さを、私は放っておけない。権力が一旦何かをやろうと決めたら、どう阻止しようとしてもできてしまう、と丸山は言いました。私たちはそのことが現実だったことを見てきました。選挙公約にも演説にもなかった政策が国政の中心課題となり、ペテンのやり回しで決めてしまって、それを国民に問おうともしない。詐欺師のやり口で憲法の改正をやろうとし、それが無理とわかれば、国民の信を問わずに権力の意志だけで解釈を変えるという欺瞞をやった。権力は何事も正義にしてしまいます。国家がやれば、殺人も正義か、と問わねばなりません。国家の側に立って、国家に命を捧げよという人間を信じてはならないと思っています。しかし、国民自身がそれを是認するのなら、日本人としてそれに従うのが民主主義だと覚悟しています。つまり、憲法改正が国民投票で決まるなら、それが国民の総意ですから、それに従います。しかし今国民の半数以上が集団的自衛権に反対しています。それでも権力は押し切りました。とあるテレビの人気番組で、某大新聞の主幹とされる人が、権力ですよと、物まねであの人の本音を披露しておりました。政治家は何を目指しているのか、その答えが権力でした。国家は究極、深部に暴力を内在させています。政治家の目指す権力は畢竟この深部の暴力だと思っています。直接物理的に国民を傷つけるなんて愚行は、さすがの国家もやりません。世論を操作し、報道を操り、検察を使って政敵を罠にかける、税務を使い、恫喝する。あの剛腕と言われた人は、察審議会なる傀儡に起訴されたが、結局無罪になった。私も剛腕政治家を肯定しているわけではないが、あの手口で一人の政治家を葬ったのは許せません。そして報道もこの事実を大々的に

は伝えない。報道の自由は言論の自由でもあり、基本的人権の根幹でもあります。丸山真男は二度徴兵され、その二度目の徴兵で海外の情報収集を任務としているとき、ポツダム宣言の内容をキャッチして感動したそうです。日本に基本的人権を確立すべし、この一文がこの宣言には謳

われていたからです。だが報道の自由はあっても、今の報道に正義はあるか。事実を伝えることが報道の使命と朝の連ドラさえ言います。しかし伝えない事実もある。戦後、民主主義を与えられ、戸惑ったのは日本人でした。彼らは民主主義を知らなかった。戦後、現行憲法のもとに育った私たちとは大違いでした。その私たちもまた、それはそれで大きな間違いを思い込んでいるかもしれません。民主主義は形が定まってあると勘違いをしているようです。丸山真男氏は、民主主義は不断に国民が追求し、育てていかなければならないと説きます。権力を常に監視していなければならない。国民は一個の独立した人格として立ち、権力を問い続けなければならない。この人は六〇年安保の際、少数の権利という思想をもって権力と対峙しました。国会の中は多数の安保賛成者、少数の反対論者、そしてその国会を取り囲む国民のデモ。

声なき声

と誰が言ったか。いま国民の声は世論調査として聞くことができます。五〇数パーセントの反対を、愚民の妄言と聞き捨てる傲慢さはどうなのか。美しい日本とりもどすとは何か。国家が何か実体のつかめぬことを言い出した時こそ耳をそばだてていなければならないと思っています。

国体と言った人たちがいました。その国体とは、突き詰めれば三種の神器の継承であると、いま言う人がいます。

私たち世代は丸山真男氏を越えなければならないという強迫観念に付きまといわれているように思います。丸山真男を意識していなかった者も、あの時の丸山真男的なものを否定しようとしていたのですから。その丸山も全共闘闘争を否定しておりました。彼が取り囲まれて罵倒されたとき、彼は君たちを軽蔑すると言いました。我々は彼に否定されたことを知っておかなければなりません。全共闘運動は心情的ロマンチズムの爆発だと言われました。けだし名言！達成すべき理想もなく、思想もなく、破壊し、既存の体制を打破することのみに走っていたのですから、心情的ロマンチズムの爆発だと言われても仕方なかったと思います。セクトに居たものもノンポリも、共産主義革命などできるはずがないとわかっていたし、それを目指してもいなかった。方向と時代が違えば、二二六になってたかもしれません。三島が、天皇陛下万歳とさえ言ってくれたら、私は君たちと連帯しようといったのも、そんなところを感じ取っていたかと思います。

丸山はそうは言いながら、この紛争の後には何も残らないとも、言っております。彼は戦中から戦後に続くリベラルの伝統が、この紛争で途切れてしまうと案じておりました。安田講堂陥落のあと二か月で彼は東大を辞しました。彼に一番応えた批判は、先生は東大をやめて丸山塾を開くべきだったんです、という言葉だったそうです。しかし彼の乗り越えられるべき点はここにあると思います。彼は知性の人でありました。人は自由で独立した存在として自己の思考を確立しなければならないと言いつけました。永久革命のとしての民主主義、永久運動としての憲法9条。そして、他者感覚を言います。彼は人間の知性を信じておりました。それは彼が生きた戦中戦後のリベラルの伝統でありました。そこに批判の目を向けたのが吉本であったと思います。プチブルの身勝手さが集合して民主主義を形作るというのです。知の伝統は素晴らしい。しかし、これも私の肌合いに合わないのですが、松下村塾は次代を作った。吉田松陰はまさに自分の心情的ロマンチズムを爆発させた人で、丸山とは対極の人であったと思います。同じ知性の人でありながら、直情的に行動し、其れがかなわなかったとき、彼はまさに塾を開き、次代を作りました。それ

が知性であったというのではなく、若さの鋭敏さが時代を見抜き、これを打破しようとして行動し、叶わなかったあとの結果だったと思います。彼に、未熟な感受性が育てられ、既定の体制を打破することになったと思います。忘れてました、そんなこと。

知性のみで民主主義を貫けるわけではない。またプチブルの身勝手さを我欲と言う人もいますが、我欲の総体が世論でもあって、民衆は無知に見えるのかもしれませんが。丸山は普通の大衆を国民とは呼ばなかった。国家に対して、国民と言えば国家に捉えられた一元のものになってしまう。ですから、人民と呼びました。しかし人民と言えば共産主義の匂いがします。いいじゃありませんか。国民じゃなくて、市民と称しましょう。プチブルの無知な大衆となって、言いたい放題で行こうじゃありませんか。年寄り、官僚は年金を食いつぶすな、ちゃあんと約束通り支給しろ。若者は子育てできるように国の体制を作れ。子供は教育にもっと力をいれて、次代を担えるようにしろ。もう、強い国家はいらない時代だ。明治維新をやって、強い国家を作らなければ侵略されるなんて時代じゃないんだと言いましょ。とはいっても、お隣の国々は、勘違いした時代遅れの誇大国家ではあります。

しかし、私たちは丸山真男を乗り越えられたのでしょうか。彼に見捨てられたように見えますが。

エマニュエル・トッド氏は、私も初めて知ったのですが、あのトランプ氏の当選を予言したことで注目された人口学者さんです。どうも、NHKでインタビュー番組があったらしく、見損ねたとすこし悔しい思いでした。このテレビ大好き爺さんが見損ねたのですから、残念。すこし日を置いて、この話を書きたいと思っています。

経歴はというと、

フランス国立人口統計学研究所（INED）の研究者。歴史人口学者、家族人類学者。1951年生まれ。祖父は作家のポール・ニザン。1976年に出版した処女作『最後の転落』でソ連崩壊を予言して衝撃を与える。2002年の『帝国以後』で米国の衰退を予言、世界25カ国語に翻訳されるベストセラーとなった。他の著書に『世界の多様性』、『新ヨーロッパ大全』、『経済幻想』、『デモクラシー以後』（以上、邦訳は藤原書店）など

と、どこかから引用してペーストしましたが、ちょっと毛色の変った未来学者ではないかと、思っています。この経歴では十分に読み取れませんが、彼の手法は、人がなにを考えているかを探ります。この国の人口を世代別、性別、人種別と、あらゆる角度から分類し、各層が何を考えているか、そして、それはどうしてそうなったのかを分析します。一つの社会の階層の構成を検討し、それがどう言った指向性を持っているか、そしてその結果、何が起こるかを予測するのです。階層と言いましたのは私で、トッド氏は階級と言います。かれは、しきりとマルクスの階級論とは違うと弁明しながら、なお階級という言葉を使います。そして、トッド氏はトランプ現象を言い当て、かつ、これは教育格差による階級の反乱だということです。これって、生産過程から疎外された労働者階級と言い換えられそうだと思うのですが、トッド氏は違うといいます。トランプ氏の件については、一度転落すると二度と這い上がれない今のアメリカ社会での、高校もろくに出ていない白人系の人たちの不満と衝動を言い当て、トランプ氏が勝つ、クリントンは嫌われている、と、今回ばかりは自信がないが、といいながら、トランプ氏が勝つと予測しました。

このトッド氏、実は日本を11回も訪問しているのだそうです。そして東北大震災もつぶさに見て回り、日本という社会の特殊さも観察して、政治による統治が機能しなくなったとき、日本人は外に秩序を求めず、自らが体制を整えて社会も経済も国さえたてなおそうとする、と語っております。なにか親日家の褒め言葉のように聞こえます。

中国について、中国人の社会では、父親の権威が非常に強く、子供たちはその下で平等に暮らし、かつ、兄弟たちは平等にその遺産を相続していくという、平等主義のシス

テムの中で暮らしているといいます。つまり、いま中国で進行している、多大な経済格差は、彼らには容認できないことであるということです。そのことが中国国内で見過ごしできない緊張を生んでおり、支配層はそれを緩和、または目を逸らそうとして持ち出してきたのがナショナリズムという古典的な手法だといいます。ところが、中国の現在の高等教育への進学率は一七%程度で、この人たちは、一定の教育を受けたけれども高等教育には進まぬ。そういった階層が今の中国の多数を占めている今の状態はナショナリズムが激しく燃え上がる危険性を秘めている、と警告しています。誰に対して警告しているかといえば、日本だとはすぐわかることです。ではどうすべきか。日本は中国と同じ土俵には乗らないことだといいます。日本の防衛力強化も中国に対してだとは思われぬようにすべきである、またなにより、中国とはプラグマティクスに付き合え、実利主義的に対峙せよと言うのです。例えば、極論すればたとえば靖国神社の存在を忘れるということ、現実的な話をすれば靖国にこだわらない、といった態度をとることだと提言します。そして、ナショナリズムとは関係ないところで、防衛力を増強することだといいます。あとは、諸侯には言わずもがなのことですが、広島長崎の解決不可能な歴史にこだわらず、日米の関係を強化し、かつ、地政学的必要から、わすれられない歴史を抱えているロシアとも良好な関係を築き、ベトナム、フィリピンなどと強く連携することが大事と説きます。中国はもう国民皆が豊かになる前に成長の止まった、そして高齢化し、男子優先のいびつな社会構成となった、そしてついには国民を養うことができなくなって衰退してゆく国家である、と断じます。ですから、どこかで日本は中国に手を差し伸べる準備をしておきなさいと忠告しています。

トッド氏を時に人は左翼学者だと言います。そうでしょうか。フランスの英知だと思いますが。

シルバーウィークが終わって、あの人が言った通り、新安保法制法のことは忘れ了吗か。忘れないほうがいいです。戦後70年の節目に、日本は大きく、その国家の有り様を変えました。

じゃあ、お前はどうかと問われますと、新安保法制法は危険ですから反対なんて単純には言いません。あっていい部分と無いほうがよかったところがありますよ、と言いたい。それでも、この法案が抑止力になるというあの人の主張は、首を傾げます。たとえば尖閣、中国は連日領海内に侵入を繰り返すのをやめていないようですが、これとてあちら側にはそれ以上エスカレートさせる意思はないと思います。それより、西シナ海のほうが忙しいし、今すぐの国益と考えていると思うからです。ですから、米国の直接的な接触さえ物ともせず、なお埋め立てと滑走路の建設を急いでいるのだと思います。そして、あの張子の虎は米国との直接対峙、一触即発を辞さないのみせて、なお虚勢を張って後戻りのできない一步を踏み出していることに目をつぶっています。たぶんこれは国内事情から来ているのでしょう。国内の権力闘争のため、いまは軍部を抱き込んでおかなければならないと、計算しているからです。軍部も自分たちの存在をアピールするために西シナ海に敢えて出て行き、成果を得よう、見せつけようとしているのです。西シナ海に関わっている国々は皆、中国から見れば弱小国にすぎませんから。尖閣はそうはいかない。日本には、彼我の実力を計ると、容易に手を出せない。その上、米国を本気で怒らせそうだからです。尖閣は日米安保の対象であると、オバマに言わせましたから。とはいっても、一度振り上げた手を、言い訳しながら降ろしちゃうのがオバマですから、余り信用できませんが。その意味で、米国を下させないように後ろからバックアップする法体制を作ったということでしょう。それも米国の要求を満たすためにです。外交は仲良し同盟を作るためではありません。お互い、どこまで利用し合えるかを計るのが目的です。ここまでは、新安保体制法を容認する側の理由でした。

しかし、あの人の姑息なやり方はあきれられるばかり。憲法改正を言い出して、まず96条を改めましょうなんて、何て言い草だ、と思いました。改正に国会議員の三分の二ではなく、過半数で発議できるようにしようとは、目くらまし以外にないでしょう。そんな見え透いたやり方が批判にさらされると、まるでなかったことのように口をつぐみ、次は内閣法制局長官をかえ、解釈改憲で乗り切ることになりました。その言い訳が、九大の准教授も言った解釈権なる概念です。内閣には解釈権があり、憲法と言えども解釈を変えることが出来るとしました。日本の憲法は硬性憲法でありますから、内閣には憲法を順守する義務はあっても、勝手に解釈を変える権利はありません。内閣法制局も、憲法を守る範囲を示すだけです。解釈権は最高裁判所にのみあります。それが三権分立です。

しかし、法は通りました。近い将来、自衛隊の放った銃弾で誰かが死ぬかもしれません。誰かの放った銃弾で、自衛隊の誰かが死ぬかもしれません。その時、か人は、その死に向き合うのでしょうか。尊崇の誠をささげるといって、口を拭うのでしょうか。もはや権力から身を引いているから、責任はないと、気にも止めないのだと思います。日本の一番長い日に、いまだ陸軍には7000機、海軍に3000機、合わせて1万機の特攻機が残っている、それをもってすれば

必ず形勢は逆転できると喚いていた陸軍参謀のように、人の命を軽く考えているとしか思えません。残念な総理を担いだものだと思います。

あるべき日本の国家像について 2

誰のための新安保法制法なんですか。まず、米国の議会で成立を約束してきました。国会審議に入る前にです。

何のための新安保法制法なんですか。抑止力？中国は尖閣で遠慮し始めたでしょうか。南シナ海で、埋め立てを控えはじめたでしょうか。あの軍事パレードを見せつけたのは、誰に対してだったのでしょうか。

もしどこかで、一発の銃弾が放たれたら、その後、世界は日本を信じてくれるでしょうか。しかし、一発の銃弾を放たなければならなくなってくるかもしれません。

しかし、そうでなくても、日本は太平洋戦争敗戦の後、三度、アメリカの戦争に加担してきたのではなかったでしょうか。まず朝鮮戦争、そしてベトナム戦争、さらに中東戦争。世界史上、ナント愚かな結果を招いた戦争だったことか。それはもう歴史が証明しています。日本は対米追随、ポチと言われながら協力してきました。そこに正義があるかどうかではなく、追随することが正義であると言い切って追随してきたのです。

哲学者、鶴見俊輔氏は小田誠氏とともに、ベ平連運動を展開しました。日清日露戦争と太平洋戦争に、日本国民は賛成してきたと鶴見氏はいいます。しかし太平洋戦争は、これはまずかったと、声には出さないが、記憶しているというのです。国民とか人民と言い換えながら、氏はその市民の記憶していることが大事だ、それに基づいて行動しなければならないと、ベ平連運動を展開したのです。このことは、その時代を生きてきた私たちの記憶です。たとえ尻すぼみの反戦運動であったにしても、私たちの生きてきた日々でありました。あいまいになった記憶をもう一度反芻しながら、考えて行かねばならないと思っています。

前の防衛大臣、森本敏氏は、防衛は用心の上に用心を重ねたほうがいいとっております。

石原慎太郎氏は、日米安保なぞ信じないほうがいい、米国は本気で日本を守ってなどくれないと思った方がいいとも言っております。尖閣で事が起こっても、領土問題であるから米国は介入しないというかもしれないということです。まあそう思った方がいいでしょう。どこの国だって、自国民の命を他国のために捨てさせるなんてことはないでしょう。まず自分の手で守らないと、他国は助けてはくれません。ウクライナがそうでした。今だって、大国ロシアに軍事行動で介入をした国は一国もありません。経済制裁という足並みのそろわないやり方でお茶を濁しています。ドイツはその際に、制裁をしたふりして尚金儲けに走っているようです。防衛は、用心し過ぎることはないと思っています。戦争末期のどさくさに紛れて、北方四島を取り、多くの日本兵をシベリアで抑留したのが彼の国でした。それを思うなら、中国包囲網を形成しようという外交の進め方は賛同します。これも安保法制法の一部には賛成する理由です。

しかし、たかが一内閣の閣議決定で憲法を歪め、秘密保護法で国民の耳目をふさぎ、マイナンバーで国民の懐に手を突っ込むこの3組一セットのやり方は、まるで、民は之に由らしむべし、之を知らしむべからずそのままではないかと思っています。中国のひともなげな振舞いで政権に付けたのですから、安保法制法で感謝の気持ちを中国に表さなければなりません。

それが終わった途端、次の制作はGDP 600兆円ですか。まるで岸から池田への政権交代を、一人でやって見せるみたいですね。高度成長時代を所得倍増でやると公約した池田のパクリを、こんな形でやろうなんて、アベノミクスはどこへいったのでしたか。今年、インフレターゲット2%を達成するはずじゃなかったでしょうか。輪転機を回してお札を刷って水増しするって政策は、国民を豊かにしたでしょうか。いま、結局デフレです。円安でうるおったのは、法人税さえまともに払わない大企業でした。まあ、大企業優遇は自民党の基本政策です。いまさら。法人税など安くする必要もありません。彼らは巧妙に逃れるずべをしっているし、国もそれを容認しているからです。

結局、知らしむべからず、よらしむべしのやり方です。

さて、昭和は戦争を抜きにしては語れません。団塊世代は、「戦争の呪縛」から解放された最初の世代です。これは紛れもない事です。『戦争を知らない子どもたち』というフォークソングが流行し、「戦争なんて知らないよ」と歌いながら、公然と戦争に反対の意志を表明しました。この新たな価値観は上の世代との「ジェネレーションギャップ」も生み出しました。しかし、「戦争の呪縛」から解き放たれても、「思想の呪縛」からは自由になり切れなかった、それが団塊世代の特徴です。強い自己主張、ほとぼしるようなそのエネルギーは、独自の若者文化を生み出す一方で、ベトナム反戦運動や学園紛争といった「公＝権威を批判する」行動へとつながっていったのです。一見、「古い価値観」から自由になったように見える団塊世代。しかし、どんなに自由そうに見えても抜け出せない「思考の枠組み」がありました。当時、米国とソ連は冷戦状態にあり、自由主義と共産主義思想が対立し、ベトナム戦争やイラン革命も起こっていました。そんな激動を前に、「思想を頼りにして世界を変革しよう」という発想を抱き、その「思想の呪縛」から抜け出せなかった世代とも言えるでしょう。（以上、引用）

戦前からの古い価値観も引きずりながら、この国に全くなかった政治体制、新しい思想、価値観である民主主義が日本に展開されてゆく、まさにその進行過程、道程を自分の生き方として体験しながら育ってきたのが我々団塊の世代でありました。それゆえ、安保条約などどっちでもよかったのです。それを強行しようとする国家機構に反対して、かつてあれほど激しく戦ったのでした。その時岸が言った、声なき声と同じ言い訳を、その孫が、今は理解が十分進んでいないが、先には作っておいて良かったと理解してくれるでしょうと、これこそ主権者たる国民の意思を無視しても安保法制法を通したことへの言い訳をしています。この時の国会前の反対デモは、安保法制法と言うより、なんかこの頃安倍って感じ悪いよね、と彼らが叫んでいたことからの行動であったと思います。今はもう、されど我々が日々、であります。そして、これが思想の呪縛から逃れられていない証です。

その言、一々ごもつともです。

わたしはこうして生きてみました

時には誰かの力を借りて

時には誰かにしがみついて

私は今日まで生きてみました

そして今思っています

明日からもこうして生きていくだらうと

こうとしか言いようがありません。私は今日まで生きてみました、であり、今日まで生きてきました、でもあるのですから。

今の時代がかつての封建制を

封建制を引き摺っているとはどういうことでしょうか。私は戦前の古い価値観といいなおしましたが、わざわざ封建制といったのですから、なにか意味があるのでしょうか、と思うのですが、深読みし過ぎの勘ぐりですか。

しかし、生まれた時が戦後間もなくですから、社会体制は戦前の余韻を未だ引き摺っていたでしょう。たとえそれに対する反感であっても、身に染みついた風土とでもいうべき文化とか価値観はあったとおもいます。たとえば、快傑ハリマオってありませんでしたか。三橋美智也の主題歌で、まーっかな太陽、もおえている、というのを覚えているのですが。これは太平洋戦争直前に、マレー半島で日本陸軍に協力した義賊にして、マレーの虎とよばれた谷豊氏の事をモデルとした冒険活劇でありました。というより、現地で活動していた日本軍のスパイともいわれておりました。これが、月光仮面の次に制作されていたとは、次代に逆行したものだったと思います。多分まだ進駐軍がいれば、絶対に放送されなかったでしょう。しかし、1960年ごろのものですから、そんなことも消え去ってしまいましたので、大丈夫だったのでしょうか。

ついでにその頃のヒーローを思い出してみると、やはり前述の月光仮面、そして、遊星王子、少年ジェット、七色仮面、まぼろし探偵、快傑ハリマオなどを数え上げられます。その中に鉄人28号とか忍者部隊月光、0戦はやとなど戦争を引き摺ったものも自然とヒーローとして受け入れられておりました。こんな子供の側の事だけでなく、世の中の風潮としてまだ色々なヒーローがおりました。ヤクザから義賊、たとえば清水の次郎長とか、赤城の山も今宵限りの名台詞、ご存じ国定忠治、そして鼠小僧とか、戦国英雄の信長、秀吉、家康、剣豪宮本武蔵、なかでも極め付きは忠臣蔵でしょう。それらがいまだ活躍していたころは、NHKの大河ドラマも安定してもてはやされておりまして。しかし近年、清盛の大河ドラマはおおこけにこけ、もはやかつてのような関心は見られません。世の中の風潮として、そんな英雄をもう忘れたのでしょうか。これが封建制を引き摺っているということであり、我々の世代がそれを当然のごとくにしてきていても、下の世代はそんなものを忘れてしまっているということでしょうか。しかしアメリカンヒーロー、バットマン、スパイダーマン、スーパーマンがもう古くなってきているように伺えます。封建制を引き摺っているということが、わからないのです。

それでも、滅私奉公に似たことをいっておりました。自己否定です。ひよってはいけない、革命のためには家庭内帝国主義を否定し、懸命に闘わなければならない。これって滅私奉公ですよ。武士道とは死ぬことと見つけたりの精神みたいにみえます。そのことに気付くと、確かに精神の在り方として封建的な部分を見つけることになります。まあ、なんにしても否定はできないでしょう。戦前世代の親に育てられたのですから。つまりは、育てられ方です。世の中も、教科書に墨を塗ったからといって、すすめすすめ、へいたいさん、すすめの余韻は残っていたはずですよ。

・・・、しかし、放映中止になって久しい再放送の水戸黄門を、そんなわけないよと言いながらみえています。

花燃ゆが低視聴率だとか。だからどうということもないのですが、明治維新が取り上げられるとき、一番先に出てくるのが松下村塾なのは、どうしても必要なことだからなんでしょうね。あそこから志士が排出してきますから。

この時期の志士というと、この前に勤皇のと付きます、勤皇の志士と言うわけです。そしてこのときの長州のスローガンが尊王攘夷でありました。よく誤解されていますが、薩摩は開国派でありました。だから蛤御門の変では、薩摩は長州と対立し、坂本龍馬の仲介まで長州の怨嗟的になるのです。反対に長州は強硬な攘夷派でありました。海外の列強は大航海時代の時流に乗って日本へ押し寄せて来て、日本とも摩擦を起こす事態になります。長州はこれらの外敵の侵入を阻止し、鎖国を維持して日本を守らなければならないという、ころざし、をかかげます。ところが幕府は、泰平の眠りを覚ます上喜撰たつた四杯で夜も眠れないことになって、修好通商条約の返事をのらりくらりとかわし続けてはきたのですがどうにもならず、国内の大名どもや強硬論者の批判をかわす目的で、天皇の勅許を頂き、事態を収めようとしています。この天皇が勅許をだしたことによって、尊王と攘夷が結びつかなくなります。天皇が攘夷を否定し、開国を認めたのですから。そしてこれが同時に、幕府の弱体化を暴露することにもつながります。ところが、世の流れや世界の時代の進み方が見えない長州は攘夷思想を貫き、欧米列強と2回にわたって衝突します。四国艦隊砲撃事件と下関戦争、というわけです。井の中の蛙が、自分が蛙であることを思い知らされた事件でありました。ところがこの蛙、艦隊砲撃は幕府の命令に従ったまでと屁理屈をこね、賠償金の支払いを幕府に押し付けます。弱体化した幕府の足元を見、ごね得にごね、つけこんで恥じないのが長州人です。このあたりが後の日本を誤らせることになったのではと思っています。

後の一次、二次の長州征討があつて、幕府が長州を討てなくなって瓦解するのですが、その間に薩長同盟が出来、幕府の崩壊は確実になります。しかしこの間の長州の変節と討幕はどう結びつくのでしょうか。そも、なぜ水戸学派に井伊直弼は暗殺されねばならなかったのか。それこそは尊王攘夷で在りました。しかし長州の攘夷はコロッと変わります。攘夷を叫んで戦って見て、コロッと負けると反省もなく大攘夷論に移り、開国に向かって薩摩と同盟します。薩摩も開国、幕府も開国、長州も開国。幕府は公武合体で尊王。まさに尊王開国は幕府の方針でありました。なのに薩長は討幕なんです。暫時開国し、その間に列強の文明を取り入れ、富国強兵を目指す。これが幕府の方針でありました。そこに薩長の討幕の名文はないのです。でももう勢いでしょ。自分たちが権力を握らんがためとしか思えないやり方で天皇まで利用して討幕を進めます。武家階級による武家階級に対する革命と言われる明治維新ではありますが、これは革命ではありません。せいぜいが維新でありましょう。変革と言うことです。しかし、その後の廃藩置県とか、士族を作り、けっきょく士族を解体したとかもありましたが、それは日本の中に西洋文明が流れ込んで来て、薩長閥でなくとも結局そういう体制に変革されたと思います。明治憲法で天皇主権を歌わなくとも、つまり神格化せずとも、漸進的に前へゆき、あの長州の絶対主義はなかったと思います。よくよく見ておきましょう。ドナルド・キーン氏も、そして日本に心をよせ続けてくれる歴史家ジョン・ダワー氏も、今の日本を危ぶんでいます。もう敗北を抱きしめるのは御免です。

この時期の左翼発言は

読売テレビの人気番組に、そこまで言って委員会と言うのがあって、テレビ右翼の代表的な番組になっています。この番組には、もう紹介するまでもないのでしょうが、著名な評論家、それも右の人たちが思いっ切り自説をぶちまくり、ひとり田嶋陽子氏のみがずれた発言をして激しく突かれます。これはバラエティですから、笑って見てればいいのですが、時に世論を形成するのでやっかいです。橋下市長、元府知事を当選させるきっかけになったりもしました。もっとも、橋本氏が市長選を戦った相手も、もとアナウンサーでありましたから、マスコミの扇動を利用したのは一緒だったかもしれません。

この番組を毎回試聴して思うことがあります。ああ、太平洋戦争の前のマスコミと一緒にだ。いま、アメリカと戦わなければ、世論が承知しないと、新聞記者どもが政府要員、陸海軍首脳に迫ったのでした。その当時日本は支那大陸で足を取られるような泥沼戦争をしていたにもかかわらず、ABC包囲網で我が国を締め上げるアメリカと開戦せよというのが当時の論調であり、世論でした。国民の多くはアメリカ何するものぞと、開戦を望んでいたのでしょうか。軍部のみの暴走とってははいけません。国民も望んだのです。日本は勝つ、必ず勝つからのだから、米国を叩き潰せと大半の国民が思ってたのでした。それをその当時の教育が悪い、軍部迎合の学者どもが悪い、いややっぱり軍部の指導者がおごり高ぶってアメリカに勝てると思い込んでいたのだと戦後色々に言われ、国民も自分自身が開戦を推し進めていたのだということを忘れてしまいました。まるで被害者のような顔をしてです。だが、そうだったということを忘れてはいけません。自分自身の責任も知っておかなければいけないと思うのです。

これとよく似たことで、右翼がよく攻撃するのが、日教組です。私も日教組それ自体を擁護するつもりはありませんが、右翼からの攻撃通り、日教組のすべてが駄目とも言いたくはありません。いわく、自虐史観教育、東京裁判史観教育、亡国教育、反日教育を推進して、愛国精神を視野の狭いナショナリズムだと教え、国旗、国歌、靖国を否定し、暗に日本は尊敬できる国ではないと自虐的な意識を植え付けようとし、といった云々をもって日教組の大罪とします。また、その成り立ちを、GHQの指導の下で組織された教員の労働組合であるということをもって、現在の憲法同様、右翼の方はそれだけで毛嫌いされ、潰せと攻撃します。その日教組を組織するときのGHQの目的が、愛国精神やモラルを剥奪して日本人を骨抜きにし、日本を弱体化させるためだったと断じます。そのために明治憲法を抹消し、終身や教育勅語の廃止、日本罪惡史観の注入を日本人に行うべく教育を利用したのだが、その走狗となったのが日教組であったと言います。そして、GHQの根本的な目的は、日本の民主化であったと言います。右翼の人は最後で自分を自分で論破してしまいます。日本は民主化され、民主主義国家となり、その前の国粹主義は否定されました。それはそれで、歴史の必然とよく言いますが、その通りになったのではないのでしょうか。右翼の人たちも今の民主主義日本で生き、右翼思想を堂々と述べられています。言論の自由は現憲法が保証するところです。明治憲法は国家への反逆となる主張は制限し、罪としておりました。そして、右翼の人も、あの国は民主主義国家じゃないから、共産党一党独裁の国だからと否定するときの論理基盤にしております。普通選挙をやれと言います。みんな現行憲法の保障す

るところではありませんか。日教組を攻撃するときだけ戦前日本を肯定し、自分は現在の日本で民主主義を保障された権利の中で自由にいきているなんて、論理矛盾もいいところです。そんなにGHQだの、アメリカを嫌うのであれば、アメリカと同盟関係なんか結ばなければいいじゃありませんか。日米安保反対、アメリカ帰れ、沖縄の基地から出て行け、と叫んで当然と思うのですが。しかし、わが瑞穂の国から夷敵米国を排除せよという攘夷の声は聞こえません。

日教組をつぶせと批判する人たちは、GHQが日教組を作った目的が、日本を民主化するためだったと鬼の首を取った様に主張しますが、その人たちは日本の民主化に反対しているのでしょうか。その人たちは民主化されると不都合だと言わずに、日本の美しさが損なわれるとか、美風、伝統が壊されると言いつくろいます。一権力者の名誉欲と自己絶対主義のために、民はその命を犠牲にされて来ました。国のために命をささげるのは名誉で、自己の幸福を追求すれば、我欲ばかりが強くなったと非難されます。自己犠牲を強いられるのはいつも弱い立場の声なき民でありました。かの伊藤博文は、日露戦争に大反対していたにも関わらず、いざ開戦となると、自分も鉄砲を担いで戦いに行くといったそうです。今そんな政治家がいますか。

集団的自衛権について、自民党推薦の学識経験者3人が違憲であると発言したことについて、法律学者は法にこう書いてあるからこうだとしかいいわない連中だと、もと官僚出身の評論家に書かせています。法は出来た途端から古びて行き、現実合わなくなっていくものだから、現実こそ見つめるべきだというのが、その人の主張です。では法律は、現実が変わると主張すれば無視していいのでしょうか。そう主張するのが権力の側であれば余計です。法による支配こそ、民主主義の根幹です。法が現実合わなくなったのなら、法をこそまず変えればいいのです。民主的手続きを踏んで法律を改正すべきで、無視するのは独裁だと言わなければなりません。独裁者には日本の民主化は目障りなんでしょう。

国内に向かっての左翼の主張はまだ説得力があります。私も ひだり、つばさ君 でありますから、彼らの言い分も解ります。しかしいざ加害国の侵略が現実になった時に対しては、なんにも説得力のある手段を持っていないことが露呈されます。なにか紛争が起こった場合は、外交による交渉で解決すべきだと言います。話し合いで解決が付くとか、世界の世論が暴力的侵略を許さないと、まるで正義であれば必ず正されるという風です。夜道でいきなり通り魔にあって暴力を振るわれたといった場合、待て、話せばわかると言えるのでしょうか。怒りに駆られて、いま殴ってくる、刃物をもって殺傷しに来る、そういった場合、言葉も法も無力です。たとえ法に死刑の適応が書かれていても、今即時の暴力には抑止力にもなりません。これが国同士の場合、理不尽な言いがかりであると思うことも外交折衝では相手と妥協せねばなりません。いまのあの国やこの国に正義などあると言えるのか、と少しく右っぼい怒りも感じます。即座の理不尽な侵略には、当方も備えておかなければ取り返しのつかないことになるのが現状です。即座の侵略を排除できる戦力を持たなければ良いように蹂躪されます。竹島をみれば、実効支配されてしまうと法では取り返せないことが解ります。まして北方四島は、かの国の力の強さで、実力でも取り返せません。

しかし、集団的自衛権を主張する人たちも、抑止力と言います。米国との安保協定で日本は守られ、それによって抑止力が働き、平和を保てると言います。その米国が今、世界的な実験をしているように見えます。オバマ氏はウクライナについて、経済制裁をもって対抗し、解決しようとしています。武力に対抗して経済の力で解決を得ようという実験であろうと思っています。これは、西側諸国が経済的には優位に立っているというおごりではないかと思っています。現実

に多少は優位をたもっているでしょう。それでも、行き詰まりを見せている各国が、出口に見えない経済制裁で、ともに疲れ切ろうとしています。そしてウクライナでは手を振り上げることもなかった米国が、南シナ海では一応手を振り上げています。何が違うのでしょうか。中国は負けるかもしれないから仕掛けない、米国は勝てるだろうけど後の借金の事を思うと仕掛けられない、だから、挑発的な態度をどちらも取るけど、仕掛けはしない。そんな冷戦がこれからまた続くのだと思います。

ですから、集団的自衛権と言う違憲かもしれない危ない橋を渡っても、衣の下の鎧ほどです。日本は地政学的に不幸な位置にあるもんだとあきらめなければならないのでしょうか。落日のアメリカと不幸な国日本がこのアジアで冷戦を耐えねばならないのです。

歴史に見ること

集団的自衛権とか個別的自衛権と喧しいことです。集団的自衛権を認めると日本が戦争に巻き込まれる、自衛隊の海外派遣にリスクは大きくなるか、戦闘地域だ非戦闘地域と、狭視的なことが論議されています。そのうち集団的自衛権は憲法違反だという爆弾まで国会に落ちました。当然のことです。政府はアメリカの要請で、憲法9条の解釈をギリギリのところまで綱渡りし、やっとこれまで自衛隊を維持拡大してきました。。それを今回、政府は解釈変更の閣議決定のみでいきなり踏み越えたのですから、違憲と言われても仕方ないでしょう。

しかし、ひょっとしてなにか取り違えたイメージが独り歩きしてはいないでしょうか。日本はこれで戦争のできる国になる、中国の侵略に対して普通の国のように事を構え、対峙できると、なんとなく思い込んではいないでしょうか。集団的自衛権が交戦権であると取り違えてはなりません。私が安部氏を擁護するのはおかしいのですが、今も尚、日本国憲法には第9条があって、交戦権は放棄されております。日本はいまも専守防衛が国是です。ですから、国会での安部氏の答弁として、後方支援が自衛隊の役割であり、直接戦闘には加わらないというのは、9条の縛りを一応考えたものだと思っています。しかし、自衛隊のリスクは高まらないとは一言もいみません。今まで通りとのみで、PKOの例で答えます。やっぱり、リスクはたかまるんですね、と言ってやりたい。野党の質問はそうってますが。

しかし、国会の論議も、テレビやマスコミの論議も、集団的自衛権が戦争に直結するようなことばかりに集中していますが、本当は国際政治のうねりの中に日本が巻き込まれ、いままで通りでは居られなくなっているんだということを論議してほしいと思っています。あの日独伊三国同盟が結ばれた際、ヨーロッパの枢軸国と連合国の覇権争いにかかわって、遠い極東の果ての日本も巻き込まれたのでした。その目的は、ヨーロッパ戦線にアメリカが参戦しないようにけん制するというのが目的でした。今アメリカによる世界秩序に、中国が立ち向かってきています。中東でも同じことですが、中東は資源と宗教の絡みで複雑すぎます。そこにイスラエルという起爆剤もあり、混迷は深まるばかりです。ところが盟主アメリカの力は衰えました。そこで日本を巻き込み、金のみならず、人も出させてその衰えを補おうとたくらみました。このアメリカのたくらみに乗ったのがあの岸信介の孫、安倍信三でありました。ソ連と対峙するために、李承晩という傀儡政権に韓国の建国をなさしめ、岸信介を戦犯で死刑になる所を助け、日米安保条約を結ばせました。今回岸信介とおなじ役割を果たすのが、その孫とはどうなんでしょうか。第二次大戦でのヨーロッパでの対立は、世界の植民地を巡る争いでありました。今回は何を巡る覇権争い何でしょう。国民感情をあおるように中国の脅威が連日報道されますが、報道も色付けされています。韓国のマスコミを他山の石とすべきです。集団的自衛権だけですぐに戦争にはならないでしょう。しかし、かつての枢軸国に付くか、連合国と妥協するか、日ソ不可侵条約を締結するか状況判断と同じことを、今この世界情勢、国際政治パワーバランスの中でもう一度行っています。二度間違えてはいけません。

ついこの前のことを知らない人が多すぎると思っています

実は今、こだわりにこだわってフィリピン戦の事を書いています。父の履歴書に刺激されたことでした。そしてつい思い切って、自衛隊の横にある 乃木記念館 の前の野ざらしの戦車の操縦席を、ひよっとすると見せてくれるかと思い、門の横の歩哨さんが常駐する小屋を訪ね、戦車の操縦席を見せてと申し出てみました。二十歳前半の、まだ幼顔の残った隊員でした。それでも鉄兜をかぶり、顎紐もちゃんと掛けておりました。そういえば今は鉄兜なんて言わないようで、自衛隊用語では鉄帽であるらしいです。しかし、通称は鉄の鉢で、テッパチと呼んでいるとかで、これがプラスチックのヘルメットだとウソッパチと言うのだそうです。まあ俗称、通称ですから面白く呼んでいるのでしょう。しかしテッパチは旧日本陸軍の呼称でもありました。それが伝統として残っていることに驚きです。戦後7年経って警察予備隊と言いつけがましい呼び名で始まった自衛隊でしたが、それでも日本陸軍からの血脈は途切れてなかったのです。

ところが若い兵隊さんは、戦車の操縦席は～・・・、と言葉を濁し、見せられないというのです。現在でもと言うべきか、昔からと言うべきか、戦車の操縦席は㊦なんです。戦車はエンジンのかけ方さえ㊦で、まして戦車の操縦席の全容なんて秘中の秘で、見せてくれるはずがないと解っちゃいたのです。しかし雨ざらしの旧型ですから、ひよっとしてと思ったのです。しかし㊦は㊦ですね、やんわり断られました。さすがに、国民に愛される自衛隊を目指すのが今の自衛隊です。不躰な私の申し出も笑顔で対応して、お前はスパイかと銃を突きつけることはありませんでした。冗談ではなく、昔ならそうだったはずです。

わたしもつい、その柔和な笑顔に親近感を覚え、私の父は佐世保の海軍海兵団に召集され、新兵教育の後、呉の海軍自動車学校で講習を受け、それから館山砲術学校で戦車操縦の講習を受けたらしいんだと話し込んでしまいました。年寄りの無駄話を聞かされて迷惑そうな顔色でしたが構わず、館山は横須賀砲術学校に後に合併され、辻堂演習場で戦車操縦の講習を受けたようで、くどくどと続けます。ついでに鬼の日向か地獄の伊勢か、それより怖い砲術学校と横須賀砲術学校は言われてたというエピソードまで語って見せたのですが、平成生まれかもしれない若い自衛隊さんには砲術学校なんて、チンプンカンプンでした。とにかく平成生まれなら当然でしょう。戦後70年、いまだ沖縄戦の事が報道されます。そして、えー、嘘、日本とアメリカが戦争したの、の時代であります。

こんなことも知っておきたいと思っています

安保法案と集団的自衛権のことについて、今大手マスコミでは報道されませんが、連日反対集会とデモが行われているそうです。ツイッターなどでも色々ツイートされてるみたいで、実は安保法案と集団的自衛権ではなく、その集会やデモをしている人たちの発言のほうに目が行ってしまいました。政治問題についての反対集会なら、たとえば**を打倒するぞー、**反対、と言うのが普通だと思ってました。ところが、今の若い人たちは、そんなシュプレヒコールなぞ叫びません。一番魅かれたのがこれです。

いまの自民かんじわるいよね

そして、私の常識とか感覚からは絶対発想できなくて、かつ理解が及ばないのが、

なんか、憲法守んないしィ

日本を安倍からまもれえ

憲法を安倍からまもれえ

本当に止めるッ

こういうの、なんかおかしいい

こういうのと、別のもありかなって

安倍、気にしてるらしいよお

国民なめんな

集団自衛権、い・ら・な・い

民主主義ってなんだ！

ぜってえ、負けねえ

ニコ生総理、感じ悪すぎ かつこ悪すぎ

この感覚がすごい。若い人も、なかなか捨てたもんじゃないです。言葉で闘うと、誤魔化されます。彼らはごまかされないでしょう。ごまかされはしないと確信してます。次代に期待します

。

表題は軍歌です。

この時のお国は単純です。地図上に位置を占める日本そのもので、国土と言っていいでしょう。

では、その土地は国有地で、〈国〉のものだと言ったときの 国 はどこにあるのでしょうか。ある時は多羅尾伴内、またある時はインドの魔術師、またある時は片目の運転手、しかしその実体は正義と真実の使徒、藤村大造! ではありますが、お国と言った時の国の実体は、どこにあるのか、誰が国を代表するのか、国の本質は、と訊いたとき、なんと答えたら正解なんでしょうか。

憲法上、日本は立法、行政、司法、のそれぞれの機関があります。国会を考えてみますと、国民の選挙で直接選ばれるのですから、国の実態としてふさわしそうに思えますが、どうでしょう。国会は、最高機関であって、国の唯一の立法機関であるというのが憲法第41条の文言で、三権分立の一翼を担う一機関と言うのが国の最高法規、憲法のさだめる所です。ここでいう機関と言うのは、蒸気機関車とかの、何かのエネルギーを動力に変える装置の意味の方ではありません。いわば、諜報機関とか謀略機関と言ったほうの言葉で、何かの目的を達成するための仕組みを持った人の組織体といった定義のものです。国会は立法を行うことを目的として、法案の提出から審議、可決と、法律を作る仕組みを持った議員の集団であると言えるわけです。しかし、立法はしても、あそこの土地は俺のものだと言ったのはきいたことはありません。そして、例えば国有地に、財務省管理とか、法務省管理と言うのはみかけます。では、お国とは官庁のことでしょうか。ここでは、管理と言う言葉がキーワードで、所有地とは言っていないんです。なぜなら、行政機関は法人には成れないからです。官僚たちの集まった自然人であって、公法人でもありません。それは行政組織法に定められております。勿論自然人であって土地は持てるのですから、ここは俺んちのものだと言っていいわけですが、ここは私が管理してますよとしか、官庁は言わないんです。管理してるのですから、所有者は、どこかにいるということになります。それが、お国 であります。この土地の所有者は日本国であります、財務省はお国に代わって管理しておりますというわけです。つまり、下の引用文の通りとなります。

行政は、国や地方公共団体などの公法人が行政主体となり、その名（名義）と責任において実施する。この行政主体は法人であるため、実際にその手足となって行為するのは、自然人によって構成されるその機関である。

この引用文に行政機関と国、公共団体などの公法人と言う言葉がすでにでてきておりますので、何を今さら、と言われそうですが、実際を考えると、国や地方公共団体などの公法人が行政主体なわけですが、この主体を現実構成している人または人たちは誰？どこにいるの？ということ。しかし、行政庁とか行政官庁は、この実体のつかめぬ行政主体のために実際の権限と責務を負って、行政行為を行います。そして、その効果は行政主体に帰属するのであって、行政

庁には帰ってきません。つまりお国とか市町村それ自体が行政を行うのが本来ですが、その実体がないので、行政庁が代わって、法律で与えられた権限と責務によって行政行為と言う権力を振るいます。しかし、その効果は行政庁には帰属しないということです。行政行為を行っても、後は知らないよで済んじゃうということです。権限は責務を伴うのですから、責任はあります。ですから国家賠償法もあります。しかし、責任として賠償するのもお国ですから、税金です。税金と言うところに、お国の正体が見えてきました。

国内で実際に国家の権力を振るうのは、行政であります。先に行政機関は、法律に基づいて与えられた権限と債務の範囲内で行政行為を行うと、法律の本なら、必ず書いてある文章を引用しました。要するに、行政機関は法律の範囲内ではあるが、権力を振るう機関であるということです。権力を振るうことを正当化するために、行政は巧みな仕掛けを作っています。その仕掛けの中に、司法も立法も組み込まれていて、権力は振るいながら、振るったわが身には火の粉が降りかからないように最初から仕掛けてあります。さすがに賢い。それが、先ほどの財務省管理地の管理の意味です。実際はその土地を良いようにしておきながら、所有地ではなく、国に代わって管理してますという体を作るのです。

細かいことを言うようですが、行政機関は行政庁、補助機関、参与機関、諮問機関、監査機関、執行機関、に分類されます。ここからはもうややこしいことは言いませんが、行政庁についてもう一度、その定義づけを述べます。

行政主体の意思または判断を決定し、行政客体に対してこれを表示する権限をもつもの。各省大臣、地方公共団体の長や司法試験管理委員会、市町村選挙管理委員会などがその例。なお、国の行政庁を特に行政官庁ということがある。

この文章の前半ではなく、後半の各省大臣、地方公共団体の長や司法試験管理委員会、市町村選挙管理委員会などがその例と言うところが、注目してもらいたいところです。つまり、行政機関は完全な縦割りでありますから、そのトップは各省大臣、都道府県知事、市町村長などであるわけです。これらの機関を特に補助機関といいます。彼らは物事を一人で決定します。独任制です。では、各省大臣の決定に内閣総理大臣は関与するのでしょうか。各大臣の決定を覆せるのでしょうか。法律上はできないのです。独任制とは、一人で決めることですから、総理はこれに関与できません。しかし、現実には総理の意向に逆らった決定は出来ません。なぜなら、総理は何時でも罷免できるからです。人事権が総理の伝家の宝刀ということになります。

しかしこの内閣総理大臣、法律の本には行政機関の長でありながら、行政庁の補助機関としては数え上げられていません。各省庁のトップのトップと言うことで、別格とでもいうのでしょうか。内閣の首長と規定されはしても、行政庁を直接には指導監督することは原則できません。憲法72条には内閣を代表して行政各部を指揮監督するとありますが、結局各大臣を通じての指揮監督です。それから各大臣を指揮監督する権限のひとつに、法律及び政令への連署をすることというのがありますが、これは気に入らなければ連署しませんよという、一種の拒否権です。

憲法には総理の権限が他にもさまざま並んでいますが、内閣の首長であって、権力を振るう具体的な存在の各大臣のように補助機関でもない。国を代表して外交も行うのだから、元首ほどのもののようなのだが、そうでもなさそうですね。大統領ではないのですから。それゆえ、日本の総理大臣は中途半端と言われます。ですから、彼もお国ではない。

さきほどの引用文に行政主体とか行政客体という言葉が踊ってました。行政客体は想像がつく通り、国民ですよ。権力を振るわれる側と言ったら、これしかありません。税金は取られる、保険料は払わされる、公共のためと土地さえ強制収用されます。それをやるのは行政機関。行

政機関は国民の選んだ国会が定めた法律によって、権限を与えられている。それは行政主体のため。その行政主体が、結局 お国 でありましょう。つまりは税金を払っている、国民とすることですね。国民主権、基本的人権の尊重、平和主義と、憲法の三原則は謳っています。国民主権が国家を作るはずです。ところが天皇大権のままの意識で国家を勘違いして営む者たちが居座り続けています。選ぶ人、選ばれる人、ともに勘違いしたままの人がいると見えます。すると、権力を振るったまんま、何一つ責任を取らないで、のほほんとしていられることになります。行政の主体は、権力の基たる国民ですから。

ある悲しみと後悔

かつて私自身への言い方として、岩波文化人みたいだと言われたことがありました。私なぞがそんな呼称に当てはまることなど、ありえないのですが、大学時代の仲間内でのふざけっことでした。さらに、岩波書店の本は高価で、手にすることも稀でしたから、その意味するところがよくわかっておりませんでした。しかし、あの混乱の中で、私一人が浮いていた時期があった時、先輩に、やっぱり岩波文化人だわと言い直されたのには、ちょっとむっと致しました。なんとなくわかっちゃいたんですが。

その先輩が、大学闘争のほぼ終息を迎えようとしていた時に、それも後半年で卒業と解っていた時に、退学いたしました。どうして、と訊ねると、俺はやっぱり剃刀だわ、斧にはなれないから、木は切り倒せないと答えました。そうしてさっさと、後腐れなく去ってゆき、長崎から出てこなくなりました。

それを見て、俺は憂鬱なる党派かもしれんといって、それでも共産党コンプレックスを信仰告白のように告白し、なおかつ、党は間違っている！といい、さっさと就職を決めて卒業していった先輩もいました。

先日、当時の同じ女子部員だった子が、半身不随で装具をいれてリハビリしていると電話してきました。遠い、わたしが置いてきた地方で、彼女はまだ生きています。おきざりにしてきたなんて、気障に思い込んでいるのは私だけなのは解っています。でも置いて来てるのは間違いない。私の思い出を置き去りにしてきたのですから。

感傷的になりすぎました。自転車で少し峠を越えると、後は下り坂、まっすぐ伸びた道の先に、大学がありました。誰にでも、同様な思いの場所があるはず。まだ若い人は、そんなことも思い出さないのでしょうか、いまを生きることで精いっぱいでも、思い出すときもあるのではないかと思います。

電話の先の、**君と私を呼ぶ声は、一度で解りました。また、年賀状でも出しましょう、という嬉しそうでした。置いてきたことと、忘れたがっていることがもう一度目の前に現れた思いでした。

そのとき書いた住所のメモ書きがなくなりました。

岩波文化人だね！

なんですか、それ？

博学でジレタントで、斜めに世の中を見て、自分はその場に置かない。

斜に構えた人の事だよ。

ちがいますよ！

朝日・岩波文化人！

加藤周一氏って、そんな人だったかもしれませぬね。空前の知識人と言われた人ですから。でも、薄っぺらい。

自己批判します！住所を失くしました。！

出会った言葉

高尚な言葉なんかじゃありません。
笑点の回答。

安部首相が奈良時代にタイムスリップしました。
で、どうなりました。
17条の憲法を改正しようとしています。

ショッピングモールの中の有名な本屋さんの平積みの本の帯に

キリスト教が資本主義を作った。

と大書されていました。ん、何？ 一瞬、マックス・ウエーバーを思い出しました。だが、ウエーバーも、そこまでは言ってない。資本主義の成立と精神は別個に論じています。となると、これを理解する手立てがありません。ネットでこんなテーマは検索できるだろうか。

ウエーバー氏は近代資本主義を定義づけず、一般常識の範囲での概念を前提に、プロテスタントの人たちの勤勉で誠実かつ清貧に甘んじ、職業を天職と思い、つましく暮らす精神が逆説的に資本の蓄積をもたらしたと論じました。あの気品のある、透徹した論証は今でも覚えています。

だが、ネットの解答は、そんなはずがないとか、資本主義はユダヤ教ユダヤ人がもたらしたものだ、これは何か悪意さえ感じられる論が語られていました。

どっちだろ？何なんだろ。わかりません。

地方の（岡山の）禅寺の住職の大智禅尼という人が語ってました。

英語には、心 という言葉はない。

この人はアメリカ人です。

mind heart spirit

と並べてみますが、違うのだそうです。そうですかあ。

住宅会社のコマーシャル。

家は家族を未来へと運ぶ船
航跡は家族の歴史

じゃ、子供たちが巣立ち、親が取り残され、それもいなくなった家は何なんですか。

私が毎朝犬を散歩させてる駅裏のおばあさんの家、最近明かりが点らなくなりました。灯りの点らなくなった家は淋しい。別に何か知り合いとか親戚とかじゃありません。朝晩犬の散歩で出会い、目上の人ですから、こちらから朝晩の挨拶をするようになっただけです。おじいさんが健在だったころ、運動のためとおばあさんの前を杖を付き、やせ細った腕で体を支えて歩いてました。夕暮れ時の挨拶をして犬を脇によけると、ほろにがそうに笑い、すみませんと詫びて通りました。おばあさんが後に続きます。下を向き、そっと頭を下げて、気遣わしそうにゆきました。

今も庭の木や灌木は植木屋さんの手が入っているようです。きっと誰かが世話をしているのでしょう。しかし、灯りは点りません。灯りの点らなくなった家は淋しいと思ってます。

その庭の梅がほころんでます。この13年、今飼ってる犬を散歩させてる間、毎年見てきた梅です。寒風の中、今年も花が咲き誇ろうとしています。

そういえば、もう忘れてましたが、昔路面電車が走ってた通りに、民芸品の店が新規開店してました。そのころ、ちょうど今の時期の毎年の恒例として、ひな人形を買い求めることにしていましたので、それを探す店がまた一軒増えたと思い、その民芸品屋さんにも入ってみたことがありました。

店先のショウケースと、ガラス越しに見える中の陳列品は濃い茶色のものが多いなあと、何とも意味のない感想を抱かせるものでした。入っても同じこと。民芸と言えば焼き物、壺なんですか、とすこしがっかりしながら、狭い店の中品物を一つ一つ品定めして回ります。すると、おかっぱの、白髪が筋になって梳き下ろされた髪型の、地味な作務衣風の服を着た女の人が、いらっしゃいませと声をかけてきました。この時期なんで、お雛様なんか、ないんですかねえと見渡していると、すみません、あんまり仕入れてないんですと頭を下げます。ここにすこし・・・。小さな大内雛が二組あって、それは民芸品の中でも地味なほうになるひな人形で、買ったことがありませんでした。わたしは小ぶりなほうをもらうことにして、包んでくれるのをまち、その間もう一度店の中を見渡してました。昭和の古い雰囲気、暗っぽい明かりの中に浮かんでました。

二年だったでしょうか、その店が表通りにあったのは。こちらもひな人形を探す時期にならないと、そういう店の事は思い出しません。で、探す時期になって、その店があったところが香川の老舗の土産物品店に代わってしまってることに気が付きました。そんなもんです。ですから、つぶれたのかと思ったのも一瞬で、あとは忘れてしまっていました。

ところが、夕暮れ時そのあたりを通りかかると、あの店があったあたりのちょうど真裏の裏通りに、民芸**の看板が点ってます。フラフラとしてみると、やはり中は暗っぽくて地味なままでした。その出窓に、立ち雛と三段飾りのお雛様があります。ああ高いと思い、迷いました。どちらも当時のわたしには相当高価でした。しかし、もう日もないことだと自分に言い訳をして、思い切って入り、それも高いほうの三段飾りを指差しました。そちらのほうがかわいかった、それだけのことです。ありがとうございます、と店主が手を伸ばし、人形を取ってカウンターの上に置き、なにやら探しています。わたしは所在無くあたりを見回すだけでした。結局、すみません、箱が見当たらなくてと言います。いいですよ、自宅用ですから。財布からお金を

出し、そういうと、すいません、***でいいです。申し訳なさそうにいい、それがいかにも商売慣れない、素人っぽさに見えました。やっぱり売れないんだろなあ、というのが私の思いでした。店の戸を閉め、立ち去ろうとするのに、ありがとうございますと声がかかります。思ってたより高い買い物をして、ちょっと得意な気持ちの高揚感がありました。何のために買ったかという、恥ずかしながら、妻へのプレゼントでありました。ですから相当数、お雛様があります。もういいと言いますが、今だって時折探します。で、あの店もお雛様を探す店の一軒としてまた復活したと思ってました。しかし民芸***は、そのあと看板の明かりだけは点り、店の前にシャッターが下りたままになりました。

あのお雛様を買ったの、あの店だったんだけど、今あの看板に明かりがつくだけで、戸が閉まってるんだよね。

そんな会話をしたあと、灯りだけが点る日々が続き、店がもう一度あくことはなく、灯りも点らなくなりました。店の前の大谷焼の大きな壺はそのまま立っています。

せんだって、そういう題の映画が放映されておりました。私は初めてこの映画を知ったのですが、とても有名な映画らしく、検索してみるとたくさんの項目がずらずらと並びました。その中から、概要をシンプルに適格に説明していたニコニコ大百科から引用します。

多くのドイツ人にとってタブーとされてきたアドルフ・ヒトラーに焦点を当てて作られた映画である。

第二次大戦終了間際、連合国の圧倒的な物量の前にもはや敗北を待つだけとなったナチス、そしてその総統であるヒトラーの姿を、極度に擁護するわけでも批判するでもなく、真実の姿としてありありと描き出す。もちろんタイトルどおり、ヒトラーが自殺する12日前からの物語である。

ドイツでの公開当時多くの賞賛が寄せられると同時に、多くの批判も巻き起こった。黒歴史と向き合う時期に来たと考える人たちと、ヒトラーを「普通の人間」として描くことに抵抗を感じる人がいたことが賛否の分かれた原因であると考えられる。

官邸内の描写は、ヒトラー関係者の数少ない生き残りであるトラウデル・ユングの証言を元に作られている。トラウデル・ユングはヒトラーの秘書を3年ほど勤め、ベルリン陥落時も奇跡的にソ連兵に殺されずに済んだ貴重な生き証人。ユング女史は映画の末尾にインタビュー映像として出演しているが、この映画の完成前2002年に亡くなった。

この引用ではあまり語られていませんが、ドイツのみならず、EU全体で、いまだヒトラーは直視するのをためらってしまう存在のようです。まず肯定はできず、といって声高に否定するにもおぞましい存在といったところでしょうか。つまりそれがタブーということなんです。

そんな雰囲気の中、この映画は声高にヒトラーを告発するなんて素振りも見せず、しっかりと描いてゆきます。1942年にユング女史はヒトラーの秘書募集に応募します。この映画の最後で女史自身のインタビューがありますが、彼女はその中でヒトラーをなぜあの時熱烈に支持ししてしまったのかと語ります。なぜでしょう？トーマスマン「マーリオと魔術師」の看破したところでしょうか。しかしそれでも今時が過ぎていったようです。

この映画を見ると、もうベルリンも陥落しようというときでも、いまだヒトラーの絶

対性は揺らいでいないことに違和感を感じます。彼は民衆の中から生まれた一介の政治家でしかなかったはずで、彼は選挙によってえらばれてきます。なのにまるで神のように絶対で、すべてを統括し、指揮します。将軍さえ彼には逆らえませんし、少年兵は瓦礫の中で、ヒトラーから勲章を与えられることに名誉を感じています。彼によって死んでいった人々は5000万人とされています。首都防衛という絶望的な戦いになお兵士は弾薬さえない銃でたたかい、戦死してゆくのです。麻酔のない手術で足を切断して生き残り、なお生きたかった人間が、ぽんと弾けた爆弾で宙を舞って死んでゆきます。映画のほとんどが軍服と瓦礫と廃墟の描写で、無意味な死ばかりです。そしてヒトラーはエヴァと自殺し、遺体は焼かれます。さらに、敵兵がやってきたとたん、総統からもらった弾丸で自殺するものも現れます。まるで殉死みたいな死に方です。

この映画の終わりのエンディングロールで、

1945年5月7日 ドイツ降伏
8日24時 全戦闘終結で合意
大戦の死者は5000万人を超え
600万人のユダヤ人が収容所で殺害された

と字幕が出ます。そして、この映画で描かれた主だった人物のその後が略記されます。

G・クリスチャン

脱出に成功 1997年デュッセルドルフで死去

E・G・シェンク教授

ソ連軍に拘束 1955年釈放

1998年アーヘンで死去

(注;軍人、医師。最終階級は親衛隊大佐)

W・モーンケ少将

ソ連軍に拘束 1955年 釈放

2001年ダムプで死去

H・ヴァイトリング防衛司令官

拘束中の1955年死去

このあともメモは長々とありますが、りゃくしましょう。この中で年次に注目してくだ

さい。ここには書いてないメモの中には、存命中というのもあります。私たちは勘違いしていませんでした。ナチスドイツは1945年に跡形もなく崩壊し、もう何も残っていないと。ナチズムの亡霊はいまだ存命中のものもいます。ナチ政権は崩壊しました。ヒトラーも死していなくなりました。ドイツはすべてをヒトラーのせいにして、口をぬぐいました。彼は民衆から起こり、一人で独裁者となって第三帝国を実現しようと夢見ました。そして5000万人を道連れに滅びました。ドイツ人にとって、すべてを押し付けるにのに、これは都合のいいことでした。しかしその戦後処理の陰で、なにかがまだ続いていました。それをこの各年次が表していると私は思います。

このなんとも不快な湿度と暑さになる前に、駅前から続く道沿いの、ビルの一階にあったコンビニがなくなりました。ここは駅から四国学院という古い私学がある通りで、通行人もわりあい多くて、よく流行って居りました。なのに、ある日入ってみると、店の店員はいても、品物が歯が抜けたようにしか棚にありません。まるで狐につままれた思いで店員を見ると、すみません、今日で閉店ですといます。まさか、そんな日に行き合わせるとは思いませんでした。

先日、なんとメルカリ便という当世風の宅配便をファミマに行って使いました。宅配にしてはダントツに低料金でびっくりしたのですが、これが今日の流通なんでしょう。ところが、当のファミマが今月いっぱい撤退だといえます。これでまたコンビニがなくなります。

そういえば、善通寺警察署が丸亀と合同になり、ちょっと大きめの交番ができて、なくなりました。平穏な、子供の声が響かない、善通寺市民の四割が糖尿病予備軍の田舎町です。

善通寺にしてこのありさまです。もっと田舎であったなら、現状はいかばかりでしょうか。かつての商店街で頑張って店を開けているのは、年寄夫婦のやっている手芸店、あか抜けない品ぞろえの洋品店、暇だから開けている履物屋、歯が抜けたようにお得意のなくなった酒屋さん。かといって、そうなる基になった大型スーパーの店内も、カーゴを押しているのはお年寄りのおばあさん。それもちらほら。気が付くと消滅都市目前です。これを行き詰まりと言わなくて、どのような事態を行き詰まりというのでしょうか。色々な理由が思い浮かびます。しかし、そのどれもが解決しようのないことばかり。今に、一人勝ちの東京も、同じ波が襲うと言われています。これが限界でしょうか。

60年代はまだ物語になってないのでしょうか

今回の朝ドラは、主人公が団塊世代の始まりの人たちのことで、それより二～三年遅れて育った我々にとっても懐かしいことばかりが登場します。最近ドラマに登場したのがビートルズ初来日でした。戦前から戦後にかけて、また、そののちの成功談はもうありきたりになって見飽きていたので、今回は興味深いものがあります。今日も、ストーリーではなく、画面に何気なく大写しになった電気釜に目が釘付けになりました。我が家もこれと同じ電気釜を使っておりました。小学校四年のころからだっただとおもいます。我が家にこの電気釜が来て以来、共稼ぎの我が家でのご飯焚きは私の仕事になりました。そのうち洗濯機も来て冷蔵庫も買って、掃除機が来ると、家の掃除もわたしの仕事になりました。

私たち、団塊の世代が生きたのが昭和でした。いま、平成も終わろうとしています。昭和といいました。違いました。戦後の昭和でした。そして親たちは、戦前も含めての昭和でした。私たちは結局昭和しか知りません。その昭和が歴史となり、物語にもなろうとしています。父と同じ年の司馬遼太郎氏は昭和を物語にできませんでした。歴史が物語になるには矢張り100年かかるのかもしれませんが。その意味で、司馬氏にして、これが彼の限界だったのかもしれませんが。ノモンハン事件を当事者として経験しながら、絶対書くと言いながら、書けなかったのですから。それにしてもなお、今まではドキュメントタッチでドラマ化されていたたものが、今回の朝ドラのようにドラマ化されるようになったのを見ると、昭和も熟成されつつあるのだとおもいます。

こういうと何かに踊らされているようでもあり、自分自身も嫌なですが、やはり最近の韓国は卑しくて嫌いです。そんな思いに囚われまいと思います。それでも見るもの聞くもの、いろんなところに卑しさばかりの韓国情報がいっぱい。

そんななか、ふと気が付きました。韓国と言い切っていますが、本当の名称を御存じでしょうか。大韓民国と言います。かつて日本も大日本帝国と称してました。このつながりについては後で述べます。そんなことに気づき、世界中の国名を調べてみました。大と付けた国、greatと関した国はほかにあるのかと思ったからです。グレートブリテンおよび～というのがありました。お分かりの通り英国です。しかしこのグレートというのは島の名前、つまり地名です。そうした由来のないにも係らず、自国名に大をつけて憚らないとは。朝鮮人民共和国と北朝鮮さえ名づけています。中華人民共和国というのもどうかとは思いますが、王朝の名前で変遷してきた国ですから、これはこれでしょうがないのかもしれませんが、しかし大とはつけていない。韓の由来はまだあります。三韓と中国では言われ、と言い出せばきりがありませんが、やはり中国の属国らしい韓のゆわれではあります。

もう悪口はいいのです。反日の国、韓国です。その韓国がきちんと独立を果たしたのが1948年でした。そしてその時、国名をどうするかと揉めたのですが、それまでの国名は大韓帝国でありました。それまでの大日本帝国におもねり、ならっての名称でした。それをやめて、さあどうするといったとき、どうしてもこの名称にしなければ腹を切って死ぬといった韓国軍人の大将がおりました。その彼が主張したのが大韓民国です。なにかその時代の思想的流れが見えてくるような話です。そして、なぜか大日本帝国への愛着があるような・・・、といえは嘘になるでしょうか。皮肉を感じております。

子供の時の事でした。今でも覚えておりますが、遅いニュースの画面がなにかの輸送船を映しておりました。子供ですからそれが何かは、テレビのニュースの内容をつけるアナウンスだけではわかりません。その声が、今映っている船はキューバへ向かう、ミサイルを乗せていると思われる輸送船だと伝えておりました。それに対してアメリカは強く反発し、ソ連は強硬な姿勢をつらぬこうとしているという内容だったと思います。アメリカはあのケネディ大統領で、ソ連はフルシチョフで、キューバ危機のニュースでありました。

日本は戦後70年、自虐史観だったと言います。河野談話と村山談話が亡国の元だと言います。その成立過程を検証しろと主張されています。それはいいと私も思ってしまいます。が、この雰囲気は恐ろしい。私も韓国のあの困ったおぼさんの演説を見ると、まるで蛇を見てしまった後のような気持ち悪さが残ります。抱え込むにはおもくるしすぎる胸の悪さで、はれることがありません。そして本屋へ行ってもテレビを見ても、ましてやネット上は反韓一色。テレビ右翼、それからネトウヨというそうですが、反発だらけの情報ばかり。そして集团的自衛権が浮上し

てきます。憲法改正も。いいでしょう、憲法改正し、集団的自衛権も持ちましよう誘導されてゆきます。私も日本は特殊な国で、いまだ世界は力が支配しており、力のないものは力で支配されるとわかっています。今、世界はアメリカの力も衰え、日本の国際的重要性も下がって来ていることも、あのテレウヨやネトウヨよりわかっているつもりです。だから日本の技術力とか経済の力とか国力はかつてのままだと思ひ込まないほうがいいです。韓国に日本の資本財を輸出しなくなったら韓国はもう終わりだとかの論理は成り立ちません。ならば初めから日本で日本の部品を使ってかの国たちを凌駕する携帯端末が出来ているはずで、かの国たちの台頭をみなかっと思ひます。猫も杓子も作っていたパソコンを今作っているのは東芝と富士通だけじゃありませんか。NECも中国に買われました。パナソニックもあのバカ高いノートパソコンをやめました。ソニーのバイオも同様です。家電ショップの陳列棚は中国、アメリカ、台湾ばかり。日本の力はネトウヨ、テレウヨ人たちが思っているほどではもうありません。だからどうしたらいいんでしょう。政治の世界にそれは求められるのでしょうか。

自虐史観を批判する人は、一つのイデオロギーが滅ぶのに70年かかった。だからこの自虐史観も70年たっいま見直されようとし始めたと言ひます。いまこうしたイデオロギーの台頭が戦争を忘れ、おろかに繰り返す循環を作らなければいいかと老婆心ながら思ひます。自虐史観か何かはわかりませんが、一発の玉も打たなかつた、他国の人を一人も殺さなかつた平和国家日本の70年をそのまま生きてきたのが私達ですから。

この硬直した日本は

ある経済雑誌の記事を見ていると、とんでもないことがかいてありました。日本は変わらないんだなあとおもうのはわたしだけでしょうか。これは二重の意味での日本の悪癖だとも思います。

一般のマスメディアは一言も言わないのですが、ネットではきちんと出てきます。東大初のベンチャー企業が開発したロボットが、米国国防省主催の原発事故に使うことを想定したロボットコンテストで、他を圧倒して優勝しました。これは福島原発内部で高い放射線の、人間が行けば数分で死に至る環境の中で活動することを想定して、そこで活躍できるロボットを作ろうと世界各国が競い、その優秀さを争ったコンテストでした。そこで、このシャフトと名付けられたロボットは二位と比べてほぼ二倍の点数を上げ、圧倒的な完全優勝であったそうです。すばらしい技術を見せつけたと言えます。ところが、これを開発した東大の、元、元 です、准教授と、確か名古屋大の准教授は、このコンテストに参加するためには、大学を辞めなければなりませんでした。こんな商業ベースに乗せるロボットコンテストに大学の先生は参加してはいけないという、まさに規制があったからです。米国ではマサチューセッツ工科大とかコロンビア大、NASAまでが参加しているというのにです。更に、このシャフトを開発したベンチャーは開発資金を日本国内の企業に募ったそうですが、一社も出そうとはしなかったと記事は言います。あの福島原発事故の解決の切り札になるかもしれない、いや技術立国日本の象徴になるはずの技術に誰も出資しませんでした。ただ実績がないからとの理由からです。先の見えない、いま最高の先端技術だということにです。私のような素人にだってそれぐらいわかります。じゃ、国はどうだったんでしょう。国はなおさら見向きもせず、相手のもしなかったようです。大学さえやめなければ開発出来なかったのですから、当然の態度なのでしょう。で、GOOGLE が買いました。日本の今一番進んだ技術はアメリカのGOOGLEに買われてしまいました。あの技術はアメリカのものになったということです。日本のメディアは取り上げません。日立のちゃちな戦車型の、機能がきわめて限定されたロボットが原発内部の探索に投入されるとはつたえましたが。

東京知事選さえ、原発が争点はずしにありました。東京の人は何を考えているのでしょうか。東京電力の供給する原発の電力で、のうのうと暮らしたきたのは誰でしょうか。あなたたちも加害者だと気付いてほしい。私のきらいな石原氏が、がれきの受け入れに反対の声が上がっていますがとの新聞記者の質問に、ひとこと だまれ といったのはその通りだと思いました。その原発の、たぶん一番有効な解決策を国民の目から隠すのは争点はずしと一緒にメカニズムが働いているのではないかと思うのはうがちすぎでしょうか。また、これからの、自動車にもITにも希望を託せない日本の、一番の成長産業にして他の追随を許さない技術がこうして目をつまれました。そのことに私は、体制派の存在を感じずにはられません。原発を再稼働し、他国に原発を売り、福島原発にズルズルと税金を投入し、エネルギーのベストミックスを考えなければならないと大見得をきる、これが日本です。

それでも生まれてくる新しい技術

日本を知らしめ、メイド・イン・ジャパンをして世界を席卷せしめた家電がもはや世界で通用しなくなった今日、それでも世界は日本の技術をもとめております。なにか。軍事技術に転用できる民間技術です。それについて興味を持ってちらっとネットを覗いただけでしたが、それだけでもこれやあれやと噴出すようになってきます。それについてフィクション仕立てで書き散らしました。

先日、ほんの数行の記事でしたが、オーストラリアが日本のそうりゅう型の潜水艦10隻を購入することを検討しているとありました。また、日本独自の心神というステルス機が今年末か来年初めから実証実験にはいるそうです。しかし、これは兵器の形をした、まさに軍事技術ですが、そうとは思いつかない技術が、軍事技術として求められています。たとえば、三次元立体映像技術です。これは、今の眼鏡をかけて見なければ立体的に見えない3Dテレビとは違い、何も使わなくても立体的に見える映像技術です。これのどこが軍事技術なのかと思いますが、今この技術をめぐって世界各国が諜報戦さえ繰り広げています。一般マスコミの紙面に大々的に取り上げられることはありませんでしたが、国内で、正確には横浜の倉庫に侵入者があり、この3D技術を書き込む特殊なメモリーのパッケージが破られ、メモリーに書き込まれたプログラムを読み取ろうとした形跡があったそうです。この事件には前段があり、中国の学会に出席していたK氏が中国上級研究員に多額の研修費を提示され引き抜かれようとしていました。K氏がこれを断ると、日本には中国の諜報員が2000人いるんだと豪語され、かつ恫喝されたそうです。多分倉庫への侵入者は中国人であると思われるわけですが、その侵入者の事を警告してきたのがアメリカの諜報機関であったそうで、これってどういうこと？と目を見張らされるばかりです。

このような、軍事技術に転用可能な民間技術は今、防衛省でリストアップされ、管理されようとしているようです。それがたとえば*菱重工とか、*芝、*ONY、*ANASONICといった日本を代表する民間企業に組み込まれ、そうすることで国が管理しようとする体制作りが進んでいるようです。

ドイツは世界で3番目の武器輸出国だそうです。いま家電とかPCとか、要するに組み立てさえすればどこでも生産可能なものは、労働賃金の安い国に敵わなくなって来ております。もう米国に冷蔵庫、照明器具等の製造業は無くなっています。いま日本も同じ轍を踏もうとしています。テレビはもうサムソンにかないません。そのうち中国製の液晶テレビを輸入するしかなくなります。ドイツ、フランス、イギリス、そういった国々は隠れた武器輸出国です。武器輸出3原則を緩和した日本も、その道を模索しているということです。あれだけ赤字を垂れ流したSONYが倒れないのも、アメリカの3D技術を開発した会社を買い取ったりの独自技術を模索しているからであり、それを私のように邪推するのは的外れかもしれませんが、今何かがうごめいていることは確かだと思います。

そしていま、みみスイッチという新しいウェアラブル・コンピューターが、日本から発せられました。スマートフォンと連動して、音声で様々な情報を提供できるもののようです。眼鏡の隅に文字情報を表示するのではなく、視界を遮らない、耳に必要な情報を提供できるということに、

どこかが関心を示しているそうです。あの小さな筐体に、ジャイロセンサーも組み込まれているとか。一度検索してみてください。YOUTUBEにもあります。

このまま四国は消滅するのでしょうか

多分、四国は消滅しようとしているのではないかとおもったりしています。なぜか。全国の空家率ランキングは、一位でこそなかったものの、二位から五位までを、四国四県が占めているからです。中でも徳島県が四国の中では一番で、次が高知、そして香川、愛媛の順だったと思います。こんな順位は四国の人間なら直ぐ見当を付けられます。徳島は山ばかりで、何も資源がありません。人もおらず、観光はかずら橋と阿波踊りだけ。香川もうどん県、愛媛のすたれようは道後温泉を見ればわかります。高知は何があるでしょう。坂本龍馬でしょうか。桂浜はがっかりするだけのものでした。

じゃ、他県はどうなのか。地方再生なんて、中央指導でも地方の主導でも、いいアイデアなんかありはしない。ましてや即効性のあるアイデアなんて無理。

結局、なんて時代を作り出してしまったのかと、反省するしかないとおもいます。

もうピケティ氏なんて忘れちゃったか

新資本論という本がEUとかアメリカでベストセラーになっているそうです。新資本論の著者はフランスの経済学者トマ・ピケティで、彼は、資本主義には格差を拡大するメカニズムを内包している、富裕層に対する資産課税で不平等を解消しなければ中間層は消滅する、と主張します。資本主義は、お金を持っているものは、自分は働かず、お金でお金を稼ごうという経済体制ですから、自由主義と本質は異なったものです。自由主義の自由な経済活動は、機会均等が主体です。いま格差は固定化され、貧困が貧困を生みます。株価やGDPなど、庶民には何の指標にもならず、恩恵すらない。インフレなんぞ、もっての外。預金の利子はあきれられる程ひくく、金庫替わりか、置いておくと手数料さえ取られて損をする。地価の暴落は、貧乏人には好都合。日本の大企業も、中国の一部特権階級と同じで、得られた資金を抱え込んでしまいません。安くなった土地で、やっとマイホームが手に入るかもしれませんし、安い物価は庶民の味方でした。竹中平蔵氏が言ったように、豊かになった富裕層から庶民にお金が流れていたのでしょうか。富めるものから富め、と中国共産党は指導したけれど、結局それも一部にとどまるのみで、下流にはながれません。新資本論に言われることもなく、資本主義は格差を生み出す仕組みです。そんな中、日本はもっとも成功した資本主義国家であったはずなのに、社会体制は悪いほうばかりに突き進んでいます。それは、韓国を見ればわかります。中国よりも韓国の方が先に崩壊するでしょう。韓国は行き過ぎた資本主義の成れの果てですから。韓国モデルの後追いをしてはいけません。外国の出資に頼り、利益のみを追求し、安い労働力を使い捨てにして、創業者一族のみが潤って、他を顧みない。今の利益のためにはなりふり構わず、自らは何も創造しようとしません。中国も韓国も同じことです。だが韓国は経済規模が小さいだけに、余裕のない経済活動をせざるを得ず、人口構成も所謂人口ボーナスを使い切ってしまうおそれがあります。もう韓国は頂点を超えてしまいました。あとは雪崩のごとくです。来年でなければ、再来年、韓国なんて国があったのかと思うと思います。中国はそうはいかないかもしれませんが、人口の多さが最大の武器の国は、人口の多さが後でとんでもない重荷とも足枷ともなり、国を傾けます。2020年とは言わなくても、2030年には、中国は分裂するか、三流国家に舞い戻っていると思います。

そして日本は、人口減少で国家の負担が軽くなり、8000万人ほどで足るを知る国民として安穩に暮らしていると思いたい。

ショックを受けてます。

今日世界はアメリカにあきれかえっています。そしてこれから世界は混迷と絶望を知るでしょう。まるで世界大戦前のアメリカです。モンロー主義と、自分が作ったにもかかわらず、その国際連盟に加盟しなかったアメリカが今います。強いアメリカ？無知と傲慢がふんぞり返っている姿なぞ見たくもない。黒人大統領はアメリカの現実を知っていました。力を失いつつある現実を一番解っていたのは彼ではないかと思っています。Yes,we can!とって、できないことの前に膝を折ったのが彼でした。それでも必死に胸を張って立ち続け、アメリカを支え続けました。無能な白人に何ができるというのか。就任後三か月で馬脚を現し、アメリカは今よりさらに経済が混沌となり、白人労働者は失業にあえぎ、不法流入者の暴動がおこり、治安は悪化の一途、国家の崩壊が始まると見えます。世界は超インフレの波をもろにかぶるでしょう。これから支配するのは力です。尖閣は中国がとります。南シナ海は中国の庭場。日本は本気で核武装しなければなりませんまい。悪夢の始まりです。いや、現実が津波になって、夢見がちだった日本を襲います。世界も。

昔、和国は倭国でありました

江戸時代天明年間、水田を耕作中に甚兵衛というが偶然発見した金印が、漢委奴国王印（かんのわのなのこくおういん）でした。出土地は越前国那珂郡志賀島村東南部、現在の福岡市東区志賀島と推定されています。印は純金製で、王印でありました。つまり、漢によって認められた正式な王であると権威づけされた証拠の印ということです。こんなことは、日本史で習いました。しかしこの時、委奴国というのが日本の一地方国なのか、日本全体を指すのか、定かではありません。しかし委奴国というのは九州の福岡地方にあった有力な地域国家であったことはまちがいがなかったのでしょう。

しかし、その時代の当代であった中国の政権国家の漢、魏、後漢などで日本の有力な地域国家、有力政治勢力をもって日本であるとして、倭国と呼びました。しかし、この国名は漢字の意味を知らないうちはよかったのですが、のちにその意味が侮蔑的で屈辱的であることを知り、倭を和と変え、和国と名乗りました。そして、その和国に大をくっつけ大和国と改めたのでした。つまり、大英帝国、大日本帝国とおなじ手法で大を冠したわけです。しかし大和国はだいわとしかよめませんが、それでもやまとこくと呼びました。これは日本のどこかに大和国というのがあったことを示しているとおもわれます。それとのかかわりが重要な意味を持つのが、邪馬台国であり、神武天皇の東征、大和朝廷の成立という古代史の謎です。これは浅学菲才の身には大任すぎるので、何かの折にいたしましょう。

しかし、大和の国という呼称が、外交的に日本の国名として使用された時期は確かにありました。4世紀の半ばに、畿内大和に原大和国と言われる三十国あまりの国を集め、その頂点に立った大和朝廷が成立しておりました。この律令国家成立以前の大和政権による統一国家を大和の国と呼んでいたようで、対外的にもこの名称を使用していたようです。

それが日本と言う呼称を使うようになります。素晴らしい名前ですねえ。日の本なんてなかなか考えつかないと思います。この名前の由来が、日出処天子至書日没処天子無恙云々（日出処の天子、書を没する処の天子に致す。つつがなきや...）という、聖徳太子が小野妹子に持たせた外交文章に記されていた有名な一文から来ているという誤解がどこかにあるようです。

日、出ずる国よりという国書より以前に、当時の中国王朝に対して、日本という名称を何度もつかっております。日が昇る国という勢いのある国の天子が、日の沈む、つまり没しそうな国の天子に物申すという意味を込めた一文をもって、対等かそれ以上の関係を表現したかったというわけではなさそうなのです。当時の中国の歴史書の記述でも日本とかいてやまとと呼んだようでありましたから。では先の文書に対して中国朝廷が怒ったという伝聞はどうしてでしょうか。いかったようなんです。しかしそれは諸説あり、国書を持ってくる作法に誤りがあったから、とか、天子という呼称に怒ったとか言われております。それゆえか、このことにはばかってか、こののちは天子ではなく、天皇をつかっております。

では日本という国名の由来はというと、これについてはなんの記述もなく、わかっておりません。日出ずる、つまり当時の世界の中心から見れば、日の昇る東側にあるので、ひのもととしたともいわれます。要するに、中国から見ても東の端の国と言うほどです。極東とはよくいった

もんです。その極東にあらゆるものが流れ着き、あるいは洗練され、また、発祥の地には残ってなくともきちんと伝承されて、日本の文化として残っています。もっとも、それも消え去りそうになっていますが。例えば雅楽、奈良のお水取りの五体投地、天皇即位の礼の高御座、たかみやぐら、仏教の諸派、かぞえればいくらでも出てきます。司馬遼太郎氏によれば、そのエネルギーの源は島国の住人であるゆえの、海の向こうへの憧れと好奇心だそうです。そう言われれば、日本人って新しもの好きですよ。

奇妙なタイトルを付けましたが、物理学ほど厳密な科学はないと、思っています。物理学者の手には、 $1 + 1 = 2$ という疑いもない真理を示す数学という道具があるからです。例えば、かの偉大なる物理学者ニュートンは自分の学説を証明するために、微分積分学を思いつきました。それまで世になかった数学を考え出したわけです。ところが、この微分積分学については同時代のライプニッツと言う人が先に発表してしまいました。そのため、大論争が巻き起こりました。ライプニッツはニュートンのアイデアを盗んだんだとか、いや自分で創案したものだとか、そりゃあもう大変だったようです。ヨーロッパは、ライプニッツと言う人は微分積分学と記号論理学の創始者として、数学の分野で歴史的な業績を残したと、現在では評価されていますが、当時彼はこの盗作騒ぎで、つかえていた国王からうとんじられたという被害にあっています。当のニュートンは知らん顔してたようで、ちょっと賢く立ち回ったんでしょうか。とにかく、ニュートンはこの微分積分を駆使して、重力を実証しました。数学と物理学が連携した実例と言えます。しかし、このニュートン力学が後の物理学の発展を強く拒みました。それを打ち破る天才は当初、学校へもろくに行けなかった落ちこぼれでした。アインシュタインです。

その前に、原子なるものを考え出したのは誰だったかです。いまではごく常識的に原子が、とか、電子がと、まるで見てきたように言いますが、私たちは見たでしょうか。物質が、極めて小さい不変の粒子から成り立つという仮説・概念は紀元前400年ごろの古代ギリシアの哲学者であるレウキッポスやデモクリトスなどが唱えていたようですが、そんな話はまるで雲を掴むような話ですから、19世紀まで忘れられていたようです。しかし、色々な事象を先ほどのニュートン力学で説明しようとしても、説明のつかないところが多々出て来ました。その解決法として、分子、原子という仮説を用いると容易に説明がつくことに気付いた人がおりました。19世紀初頭のイギリスの化学者、ドルトンであります。後に19世紀後半になると、ルートヴィヒ・ボルツマン、20世紀初頭にはラザフォード、ソディといった科学者の発見から、この仮説が有効だとなってきました。そんな科学の発展から、原子だ分子だといった概念が整理され、量子とか素粒子と呼ばれるようになり、量子力学だの原子核物理学だのと、どう違うのか解らないところまで、現在は進んでおります。ここまで進むと、一般人には到底理解できないことを、科学者は言い出します。その片棒を担いだのが、戦前の我が日本人科学者、長岡半太郎博士でありました。

この長岡先生は、1903年に、中央に正電荷を帯びた原子核があり、その周りを負電荷を帯びた電子がリング状に回っている土星型の原子モデルを発表しております。このことについての詳しい経緯を、今ここでは述べませんが、1903年という年代に注目していただきたい。この年を年号で表すと、明治36年です。ついこの前まで、西南戦争だ明治維新だと騒いでおいて、西洋の文物を必死に取り入れようとひたすら学ぶことに専念していたの明治36年です。当時の最先端の科学であった原子モデルに対して、世界に伍して土星型原子モデルを発表したのですから、凄いことと思います。後に、彼は沢山の弟子を育て、ついには湯川秀樹をノーベル賞受賞

にまで導いています。そんな彼の信条は、「仮定がたとえ奇抜なものであっても、そこから導きだされる結論が実際の現象とよく合致する場合には、その仮定を正当なものとして認めるべきだ」と言うことでした。

この言葉にある奇抜な仮定というのが、時々一般人を驚かせます。古代インドでは宇宙像を、巨大なコブラが円を作り、その胴に亀が乗って、その亀の甲羅の上に立った象が地球を支えているという風に考えました。本当は、この奇妙な宇宙像にも係わらず、インドでは「無からの発生」や「原人による創造」といった宇宙創生論を生み出し、後には「繰り返し生成・消滅している宇宙」という風に考えてもおりました。インドで描かれた宇宙像は見た目だけでは判断できないところがあります。また、ヨーロッパには天動説がありました。後に地動説で覆されるのですが、この地動説がまた奇抜な仮定でありました。

今ホーキング博士は膜宇宙論をいっております。他に紐理論と言うのもあり、多元宇宙論、超弦理論も言われております。しかし、ビッグバンはもう認知されているようです。定常宇宙論と言うのもあるにはあったのですが、宇宙の創生はビッグバンであったと、今はこれがほぼ定説でしょうか。そしてそれによると、宇宙は149億年前に生まれたとされております。さらに、地球は49億年前に出来たといえます。

物理学は本当に科学か 2

さて、アメリカにリサ・ランドール博士という方がおられます。1962年生まれの美貌の理論物理学者で、専門は素粒子物理学、宇宙論です。この人、ハーバード大学の物理学教授にして、プリンストン大学物理学部で終身在職権（をもつ最初の女性教授であり、マサチューセッツ工科大学およびハーバード大学においても理論物理学者として終身在職権をもつ初の女性教授という、大変高名な方です。「ワープした余剰次元」という論文で、サンドラム氏とともにランドール・サンドラムモデルと言うのを提唱し、この宇宙空間の外には5次元空間があるということです。そういうことを考えたのは、原子核を構成する素粒子の中に、この世界から姿を消すものがあるという矛盾にぶつかり、5次元の研究を始めたことによります。解りません。理解不能で、脳が機能不全になってしまいます。これも、奇抜な仮定であるということになるのかと思います。

しかし、先のビッグバン理論において、宇宙はまず点であったのでした。それが爆発して広がり、その広がってゆく過程があることによって、時間が生じ、広がったことで空間が生まれました。3次元、もしくは4次元空間の、現在の宇宙が生じたのです。つまり、どこかに点が生じたのでした。どこでしょう。それは5次元空間であったのかもしれませんが、そうじゃないのかもしれませんが。そして、なぜ点が生じたのでしょうか。

まず、光あれと神はのたもうたのでした。インドの宇宙像はインドの世界観からうまれました。天動説は中世ヨーロッパの宗教観から生まれて、教会に強く守られ、ガリレオは異端でした。ホーキング博士は、先ほどの疑問に対して、神を持ってきてはいけないと言い切っております。神の意志としてしまえば、ことは簡単だからです。しかし、ホーキング博士は、その理念、と言うか、妄想と言うか、そういったたぐいの事から必死に逃げようとしております。そこに何かの必然があると考えているのです。こうなると、物理学は、神を否定する新たな神学ではないかと思えてきます。難しいですね。

そうでした、ニュートンは物理学者にして、錬金術師でありました。

また、アインシュタインは、ろくに学校にも行かなかったからでしょうか、数学は大の苦手だったそうです。

世界中でグローバル化がどうか、企業の海外進出がと騒がれてきたのですが、そんなこととは無縁とっておりましたのに、ついに巻き込まれてしまいました。今年、私の長男がベトナムで新しい支社を設立することになってしまったのです。なにかベトナムの方からのお誘いだったらしく、それでも長男の所属する会社は、最初は乗り気じゃなかったそうです。会社としては、すでに大阪、東京にそれぞれスタジオも持ち、必要なデータは外注することで間に合っていて、それについての不便も感じていないというのが実情でした。ですが、それについて長男が交渉の窓口になって詳しく調査し、その結果に基づいて社内でプレゼンしたそうです。すると、なぜか、この企画が通ったそうで、後は自分とは無関係と高をくくっていると、周りに色々打診があったようなのに誰も頷かず、ついには結局、長男がベトナムへ今年の夏から出てゆくことになったそうです。設立準備は三月から。その前に、今月(一月)十六日に二度目のベトナム視察があって、その時長男が住むアパートなどを見てくるそうです。AIのデータセンターの設立ですから、所謂ハイテクビルが必要で、そんな環境が整っているのでしょうか。ネットも光はまだのようで、携帯は3Gがいまだ主流で、来年には4Gになるようですが、そんなところで開発なんてできるのでしょうか。素人ながら心配していますが、息子が赴任して、そこで三十~四十人のスタッフを確保し、一~二年教育指導して、そこから次のことを考えるという、なんとも悠長な方針らしいです。とはいっても、大阪東京のデータスタジオを閉めれば、人件費を含めて、ベトナムでの三~四年のスタジオ維持費が出るそうで、ああこれがグローバル化の実際かと間近に感じたのでした。

資本は利潤を求めて、かるがると国境を超えます。資本の求めるものがあれば、国境も宗教も踏み越えます。自国の民の都合なんか考えません。資本の論理は、自分にだけ好都合であればそれでいいのです。かつてキャノンの会長が経団連の会長であったとき、政府の要請で経団連が契約社員をできるだけ解雇しないようにしようと決議した直後、不都合な契約社員をリストラしました。具体的には、資本の行動とはこんなものです。

世の中が不景気になれば消費が落ち込みます。すると、企業は生産調整のためと人件費の削減のために不要になった人員のリストラを行い、倒産を免れようとします。たぶんその企業はそれで財務体質は好転するので、その企業にとってはいいことなんですよ。ところが、それを多くの企業が行えば、世に失業者があふれ、世の景気はますます悪化し、消費はさらに減少という負のスパイラルに陥ります。産業の空洞化というものも同様です。国内を飛び出し、そこで安い人件費と安い土地、輸送コストの削減等々が

見込まれると、資本は海外に飛び出し、そこでの生産を始めます。すると、それに付随した関連会社も海外へ出てゆきます。そして、国内の様々な技術も流出し、次第に深刻な産業空洞化が起こります。そして、その影響は国内の中間層を狙い撃ちします。グローバル化のおおかたの実像は、国内の中間層を狙い撃ちします。その中間層というのが、学歴も職のキャリアもない中間から低所得者です。ですから産業構造が変化すると、それに追いついて再訓練され、違った業種に転職できるという機会はほとんどない人たちです。いわば、単純作業の肉体労働者たちということになります。これって、最近見ませんでしたか。トランプ氏に投票した白人層たちのことです。彼らは今喝采を叫んでいるでしょう。トランプ氏は国内に、これまでにない雇用を国内に作り出すと大口をたたいておりました。そして、国外から入ってくる物には高い関税をかける。かれは経済を何もわかっていない。国内に工場を作りさえすれば、雇用は増えると思込んでいます。工場に人はいなければなりません。しかし、工場はそこで生産されるものが売れなければ維持継続できません。売れるでしょうか。また、今米国で米国自身が必要とするもの全部が生産されているでしょうか。だから、中国製によって、米国の貿易赤字の五十パーセントをしめることになるのです。日本製もしかり。日本製というと自動車ばかりが目立ちますが、B to Bが実は多くを閉めています。ボーイング社の旅客機の胴体部分の大半が、日本で作られて、米国で組み立てられています。米車のエンジンの多くの部品と締結金具、例えばタイミングベルト、ピストンリング、点火プラグ、等、メイドインジャパンと書かれていなくとも、たくさん使われていて、もうそれなしでは成り立たないのが実情です。タイヤもです。ブレーキシュー、エアフィルター、オイルエレメント、と数え上げればきりがありません。トランプさん、それらの中には、もうアメリカでは作っていない物がたくさんありますよ。液晶テレビも米国製はないんです。

トランプ氏は、私は雇用の最大の創始者になるだろうと豪語しました。ところが、アメリカは今、景気がいいんでしょうか。日本の報道はあまりそれについて関心がないようで、ニュースになりません。しかし、株に関心のある人は日本の報道の取り扱いとは逆にニューヨークマーケットをすごく意識しています。NHKのニュースも最後に東京の今日の株価とともにニューヨークマーケットの様子を伝えます。それによると、ニューヨーク株式は高騰とっていい上がり方をしているようです。トランプ氏のツイッターの性のようなようです。

日本人と日本の報道は、なぜか認識の仕方が違っていてそれを認めないようですが、アメリカは日本の失われた二十年の間も、年2%の成長はしておりました。アメリカ人にとって2%ぐらいの成長は当然のことなのです。ですから、彼らはそのことを前提にして自分たちの雇用を考えます。経済指標の中で雇用率は最重要な要素なのです。それが今大変いい。しかし、アメリカは常に新しい業態の事業が起こり、古いものは切り捨てられていきます。自動車の大生産地デトロイトは、今はもう人口減少に悩む、切り捨てられた大都市でしかなくなりました。そこで自動車生産に携わっていた、古い産業のスキルしかもたない労働者は、なかなか再就職できないことになります。日本の報道は、そんな負の場面しか関心がないようです。

アメリカの大学進学率を調べてみました。すると、日本とそう変わらない数字が出てきました。ところが、このアメリカの進学年齢は平均27歳。加えて、所謂名門大学は数少なく、よく、アメリカの大学は入るにやさしく、出るに難しいといわれますが、この名門大学は全く事情が異なって、入るのは至難の業で、出るのはもっと難しいのだそうです。では大卒の資格だけがほしいものの事情はというと、かのトランプ大学がそうであったように、ほとんど無試験で這入れて、授業料さえ払えば出席してなくとも卒業証書はもらえるという大学も多々あって、さすがお金が物言う国のことはあるということです。大統領にえられる人の作った大学が、なんと、その典型だというのですから、事情は知れたものです。

日本の大学もいまやそんな風になりそうですが、それでもきちんとした4年制の学校が大学を名乗れるのであって、2年とか3年であっても、また通信制でも大卒を名乗れるというのがアメリカの学校です。このような事情の中で教育またはトレーニングを受けた学生に、大きな能力格差があって当たり前です。かくして名門卒のみがエリートで、あとは低技能労働者に振り分けられることになります。

こういった能力の差が格差を広げ、さらに競争の国、自己責任の国、そして、ほかの人のことは関知しない個人主義の徹底した国民性の上に乗って、中流層の不満を産んでいきます。日本では当然と思っている国民皆保険のオバマケアが、我々がなぜ他の人の医療費まではらわなければいけないのかと、その保険料が高いと不満を鳴らすのです。ましてや公的介護保険などあるはずもなく、働けなくなった老人は、家の中でじっとテレビを見ているほかはないのです。

しかし、そう言っている中流層の人たちには、保険料さえ高負担にかんじられます。豊かな国、アメリカで、州によって違いますが、平均800円だそうです。それでも、日本では契約社員が騒がれていますが、アメリカ人はみないつでも首を切れる契約社員同様の雇用形態です。

世界の富豪トップ8人の資産と、下位38億人の合計した資産がおなじとは驚きの格差です。しかし、その世界の富豪トップ8人はというと、二人ほど違ってはいますが、六人はアメリカ人です。そして後の二人もヨーロッパの白人です。ということは何を意味するのかと考えてしまいます。例えば、グローバル化といっても、以前、白人先進国の都合のいいように支配されているのかとも考えられます。また、すでに富める者が、なお貧しい者から奪うという構図がここでも描かれているとも思えます。その収奪されるもののいらだちと憤懣がトランプ氏を選んだのかもしれない。しかし、これは間違った選択だったと思います。彼は危険な人物と、あのジョゼフ・スティグリッツ教授がのべております。以下はフィナンシャルポインターからのいんようですが、教授は同様の内容を各所で語っております。以下をお読みになって興味を持たれたら、検索してみてください。たくさん出てきます。

ドナルド・トランプ米大統領選共和党候補の経済政策について通信簿をつけている。教授は、トランプ氏に経済学の知識がないことを指摘、初級クラスの成績として「不可」を与えた。

トランプ氏は、中国からの輸入に関税を課すよう主張している。

スティグリッツ教授は、仮に関税を課せば2つのことが起こると警告する。

- 安価な中国製品に依存する米労働者の生活水準がすぐさま低下する。
中国製品を締め出しても、その産業が米国に戻ってくる可能性は極めて低い。
- 中国はWTOの一員として米国に対し報復的措置をとる権利があり、貿易戦争に発展する。
結果、米国は得られるより多くの雇用を失う。

そもそも、外国が米国に安売りしているというトランプ氏の主張が誤りだと教授は言う。

ここでも、教授は注意すべき2つのことを指摘している。

- 「貿易は比較優位に基づいて行われる。
米国が比較優位を失った理由の一端は、米国が製造業に関する優れた政策を持たないからだ。」

- 「米国は製品を買い、中国に対して貿易赤字があるかもしれない。しかし、米国は財をどこかに売っている。双方向ではない」（が、全体で見ればつり合っている。）

こう論破すると、スティグリッツ教授はトランプ氏に通信簿をつけた。

初級経済学の成績は「F」だそうだ。

「彼は経済学がよくわかっていない」とダメ押ししている。

スティグリッツ教授はクリントン候補の経済顧問を務めているから、話は半分に聞くぐらいがいいだろう。

世界には不公正な貿易が満ち満ちている。

だからこそ、自由貿易が望まれる。

スティグリッツ教授は、本当に大きなトランプ・リスクについて言及している。

「みんな、どれだけトランプ氏が既存のルールや民主主義のプロセスの制約を受けるか話している。

ここまで主流からかけ離れた人がその立場になるのは初めてだ。

正直なところ、誰もわからない。」

この不確実性こそ、トランプ氏勝利の最大のリスクなのだろう。

実はこれで、この文章の言わんとしたことは尽くされたようです。かの人の大統領就任はもうすぐです。取り返しのつかないことにならないければいいのですが。

じつは、今年になってNHKは地味で、しかしこれからのこととして知っておかなければならないことについて、ドキュメントとして三本の番組を放送しておりました。かたぐるしくて申し訳ないのですが、このことについてまたレポートしたいと思っています。

政府は国会答弁をAIに下書きさせるともくろんでいるようです。12月5日の日経から引用します。

経済産業省は人工知能（AI）に国会答弁を下書きさせる実証実験を始めた。AIに過去5年分の国会の議事録を全て読み込ませたうえで、与えられた質問に対し、過去の答弁内容を踏まえて回答できるかを検証する。行政分野でもAIの活用をめざす。公務員の長時間労働の要因になっている答弁対応の負担を減らし「働き方改革」につなげるねらいもある。

同、読売新聞から引用します。

政の下書きなどの行政事務に人工知能（AI）を活用する方向で具体的な検討に入った。

国会審議の議事録を基礎データとし、経済産業省で実証実験を近く始める。成果次第では、政府全体でAI導入が可能な行政分野を検討する。政府の成長戦略はAI開発などの「第4次産業革命」が柱で、官の立場から新産業育成の流れを後押しする狙いだ。

実証実験では、AIに対し、過去5年間の国会審議の議事録を学習させる。実際の活用場面では、職員が国会で質問された政策課題を入力すると、AIが、過去の関連質疑や、政策の論拠、課題などを整理して提示することを想定している。最終的には、職員がAIの示した論点整理や下書きを元に答弁資料を作成する。

若干ニュアンスは違って見えますが、結局過去の答弁との整合性を欠くことのない答弁をAIなるものに書かせようということです。過去の答弁と食い違う点を野党から突かれられないようにするための模範解答をAIに下書きさせるのです。この目論見の向こうには、自民党一党支配がこれからも続くという前提が透けて見えます。そして、官僚による政治支配が貫徹していることがさらに前提のさきの大前提になっています。そんなことが政治の停滞に見えませんか。政策の持続性とか、政策は取り消されるまで持続するんだと、公定力なるものの意義を言い立てる官僚支配が暗黙に是認されています。

こんなところがクリントンだったと思えます。トランプはこれを破壊し、感情のレベルまで降りていって、貧困白人層の本音を引き出してしまいました。正しい理念の理想主義の御旗はもういない。自分たちの生活を壊したものは叩き出せというトランプの大衆迎合に乗っかっていきます。よくグローバル化がとか、格差社会がとかいいますが、資本の論理がただ一点、利益を求めてあらゆる手段を探り、効率を求めて活動して今の社会体制を作りました。不法移民が犯人ではありません。彼らを採用した資本の側に格差社会の原因はあります。貧困白人層の雇用を維持するとトランプは言いますが、そのことによってアメリカは物価の高騰を招き、大不況となって、結果、大量の首切りが起こり、トランプは失敗するでしょう。貧困白人層は自分で自分の首を切りました。

そんな批判はどうでもいいのです。トランプを選んだアメリカが、民主主義でしょうか。イギリスの国民投票の結果が民主主義でしょうか。かといって、AIに答弁を任せる日本が反民主主義でしょうか。私はこれも肯定しないのですが、ヒットラーも選挙で選ばれたのでした。